

賀来中学校遺跡

大分市賀来中学校プール移設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

大分市教育委員会

Ka Ku
賀来中学校遺跡

大分市賀来中学校プール移設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1992

大分市教育委員会

序 文

本書は、平成3年度に大分市教育委員会が実施した賀来中学校遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大分市の西部に位置する賀来地区は古来より近接する国指定史跡・豊後国分寺跡をはじめ多くの遺跡の所在が知られ、随所で発掘調査がおこなわれるなど、これまで不明瞭であった当地域の歴史像が次第に明らかにされつつあるところであります。

今回発掘調査を実施した賀来中学校遺跡は先の昭和55年の調査により、いちはやく弥生時代の環濠集落の存在が確認され、遺跡の全容解明が課題とされていたところでありました。そうした中、今回の調査では環濠集落の範囲の把握について新知見を得ることができたばかりでなく、中世において当地を本貫としていたと伝えられる賀来氏へのアプローチの可能性を秘めた遺構・遺物を確認するなど予想以上の成果をあげることができました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究者のみならず、ひろく市民の皆様に利用され、文化財に対するご理解を深め、さらに郷土の歴史研究に幅広く活用されんことを願うものであります。

本書の発刊にあたり、ご配慮・ご協力頂きました皆様に対し、衷心より謝意を表すとともに、発掘調査ならびに資料整理にご協力下さいました関係各位に対して心から感謝の意を表す次第であります。

平成4年3月31日

大分市教育委員会

教育長 安 東 裕

例 言

- 1 本報告書は大分市大字賀来字門田に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分市教育委員会が調査主体となり、平成3年4月から5月に実施した。
- 3 本書の執筆は秦政博・讃岐和夫・坪根伸也がおこなった。なお、執筆分担は下記の通りである。
 第Ⅵ章 ————— 秦 政博
 第Ⅴ章 ————— 讃岐 和夫
 第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章・第Ⅶ章 ——— 坪根 伸也
- 4 遺構の実測は担当者、および調査補助員がこれにあたり、写真撮影は担当者がおこなった。
- 5 遺物の実測は調査担当者が行い、洲野玲子・松村千里・渡辺里美・西嶋スミエ・原田和代・宮本恭子・三重野八重子・（以上大分市教育委員会社会教育課文化財室）の協力を得た。
- 6 実測図製図は井口あけみ・洲野玲子・釘宮香苗が行った。
- 7 遺物整理は渡辺里美・井口あけみ・松村千里・西嶋スミエ・三重野八重子・町田ゆかり・漆間裕子・浜田貴美子・釘宮香苗（大分市教育委員会社会教育課文化財室）がたった。
- 8 遺物の写真撮影は塔鼻光司がおこなった。
- 9 遺物番号は3ケタの通し番号において表示する。なお、旧調査（昭和55年度）の遺物については通常の通し番号において標記する。
- 10 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
- 11 本文中の遺構番号については混乱を避けるため、原則として現場時に使用したものをそのまま使用している。

・本文中で使用する略号は次の内容を意味する。

S B－掘立柱建物遺構 S E－井戸遺構 D－土墳墓
 S D－溝状遺構 S K－土墳(坑)状遺構 K－土器棺墓
 S H－竪穴住居跡遺構 S X－柱穴遺構（不明遺構）

- 12 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物 番号	挿図 番号	遺構名	器種	胎 土		色 調		器面調整		法 量				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑦	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨	⑨	⑩

- ① 項目9に準ずる。
- ② 挿図番号に一致する。
- ③ 項目11に準ずる。
- ④ 判明する器種について記述する。
- ⑤ 胎土中に含まれる混和材について記述する。
- ⑥ 径約1mmのものを細粒とし、それ以下のものを微粒・それ以上のものを小粒として標記する。
- ⑦ 色調について記述する。
- ⑧ 器面調整について記述する。複数段で標記されるものは基本的に上位のものが上部調整を示す。
- ⑨ 計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は（ ）にて表示する。
- ⑩ 特記事項について記述する。
- 13 本書の編集は坪根がおこなった。

本文目次

序	文	
例	言	
第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
3	調査日誌抄	2
第Ⅱ章	遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第Ⅲ章	発掘調査の記録	8
1	調査の概要	8
(1)	調査区の設定	8
(2)	土 層	8
(3)	調査経過と概要	8
2	遺構と遺物	10
(1)	溝 状 遺 構	10
(2)	土 墳 (SK)	37
(3)	住 居 跡	39
(4)	井 戸 跡	44
(5)	その他の遺物	44
第Ⅳ章	平成3年度調査のまとめと考察	54
1	1号溝について	54
2	2号溝について	58
第Ⅴ章	付章1 昭和55年度調査概要	62
1	溝 状 遺 構	62
2	壺 棺 墓	67
3	土 墳 墓	72
第Ⅵ章	付章2 「賀来荘」の時代 ―中世の賀来地域―	77
第Ⅶ章	総 括	80

挿 図 目 次

第1図	賀来中学校遺跡調査地点位置図 (1/5000)	3
第2図	賀来中学校遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000)	5
第3図	賀来中学校遺跡周辺地割図	7
第4図	賀来中学校遺跡調査グリッド配置図 (1/400)	8
第5図	賀来中学校遺跡基本土層模式図 (1/20)	8
第6図	賀来中学校遺跡遺構配置図 (1/150)	9
第7図	SD01土層断面図 (1/40)	10
第8図	SD01遺物出土ポイント配置図 (遺構1/6・遺物1/24)	11~12
第9図	SD01出土遺物 ① (1/4)	13
第10図	SD01出土遺物 ② (1/4)	14
第11図	SD01出土遺物 ③ (1/4)	15
第12図	SD01出土遺物 ④ (1/4)	16
第13図	SD01出土遺物 ⑤ (1/4)	17
第14図	SD01出土遺物 ⑥ (1/4)	18
第15図	SD01出土遺物 ⑦ (1/4)	19
第16図	SD01出土遺物 ⑧ (1/4)	20
第17図	SD01出土遺物 ⑨ (1/4)	21
第18図	SD01出土遺物 ⑩ (1/4)	22
第19図	SD01出土遺物 ⑪ (1/4)	23
第20図	SD01出土遺物 ⑫ (1/4)	24
第21図	SD01出土遺物 ⑬ (1/4)	25
第22図	SD01出土遺物 ⑭ (1/4)	26
第23図	SD01出土遺物 ⑮ (1/4)	27
第24図	SD01出土遺物 ⑯ (1/4)	28
第25図	SD01出土遺物 ⑰ (1/4)	29
第26図	SD01出土遺物 ⑱ (1/4)	30
第27図	SD01出土遺物 ⑲ (1/4)	31
第28図	SD01出土遺物 ⑳ (1/4)	32
第29図	SD02・SE01土層断面実測図 (1/40)	33
第30図	SD02出土遺物 ① (1/3)	34
第31図	SD02出土遺物 ② (1/4)	35
第32図	SD02出土遺物 ③ (1/3)	35
第33図	SD02出土遺物 ④ (1/3)	35

第34図	S D 0 2 出土遺物 ⑤ (1/10)	36
第35図	五輪塔計測点凡例	36
第36図	S D 0 4 土層断面実測図 (1/40)	37
第37図	S D 0 4 出土遺物 (1/4)	37
第38図	S H 0 1 平面・断面実測図 (1/80)	39
第39図	S H 0 2 平面・断面実測図 (1/80)	39
第40図	S H 0 3 平面・断面実測図 (1/80)	40
第41図	S H 0 4 平面・断面実測図 (1/80)	40
第42図	S H 0 5・0 6・0 7 平面・断面実測図 (1/80)	41
第43図	住居跡 (S H) 出土遺物 ① (1/4)	43
第44図	住居跡 (S H) 出土遺物 ② (1/2)	44
第45図	縄文土器実測図 (1/3)	44
第46図	S D 0 1 出土土器 (壺・甕) 底部形態別出土レベル分布図 (1/10)	54
第47図	底部形態別出土割合図	55
第48図	S D 0 1 出土土器 (壺・甕) 編年対照表 (S = 1 : 16)	57
第49図	S D 0 2 出土土器法量分布図	58
第50図	全体遺構配置図 (1/240)	63
第51図	S D 0 1 遺物出土状況図 (1/120)	64
第52図	S D 0 2 遺物出土状況図 (1/120)	64
第53図	S D 0 2 土層断面実測図 (1/40)	65
第54図	出土遺物 ① (1/4)	66
第55図	出土遺物 ② (1/4)	67
第56図	出土遺物 ③ (1/4)	68
第57図	K - 0 1 出土状況平面・断面実測図 (1/20)	68
第58図	1号棺 (K - 0 1) 実測図 (1/6)	68
第59図	K - 0 2・K - 0 5 出土状況平面・断面実測図 (1/20)	69
第60図	2号棺 (K - 0 2) 実測図 (1/6)	69
第61図	K - 0 3 出土状況平面・断面実測図 (1/20)	70
第62図	3号棺 (K - 0 3) 実測図 (1/6)	70
第63図	K - 0 6 出土状況平面・断面実測図 (1/20)	71
第64図	6号棺 (K - 0 6) 実測図 (1/6)	71
第65図	12号土墳墓 (D - 12) 平面・断面実測図 (1/20)	73
第66図	賀来中学校遺跡遺構配置模式図 (1/2000)	80

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧	4
表 2	五輪塔法量表	35
表 3	遺物観察表 ①	45
表 4	遺物観察表 ②	46
表 5	遺物観察表 ③	47
表 6	遺物観察表 ④	48
表 7	遺物観察表 ⑤	49
表 8	遺物観察表 ⑥	50
表 9	遺物観察表 ⑦	51
表10	遺物観察表 ⑧	52
表11	遺物観察表 ⑨	53
表12	口縁部形態・底部形態相関表（壺）	56
表13	口縁部形態・底部形態相関表（甕）	56
表14	遺物観察表 ⑩	74
表15	遺物観察表 ⑪	75
表16	遺物観察表 ⑫	76
表17	大分市内における溝状遺構を有する集落遺跡一覧	81

写 真 目 次

写真 1	S D 0 1 遺物出土状況	10
写真 2	5 号土壙墓底面検出状況	72

写真図版目次

図版 1	83
<ul style="list-style-type: none">・ 遺構検出状況（北方向から）・ 遺構完掘状況（北方向から）・ 1号溝（SD01）遺物出土状況近景（南方向から）・ 1号溝（SD01）遺物出土状況遠景（西方向から）・ 1号溝（SD01）完掘状況（南方向から）	
図版 2	84
<ul style="list-style-type: none">・ 1号溝（SD01）調査状況（南東方向から）・ 1号溝（SD01）遺物出土状況（北方向から）・ 2号溝（SD02）遺物出土状況（137）・ 2号溝（SD02）近景（南方向から）・ 2号溝（SD02）全景（南方向から）・ 2号溝（SD02）調査状況（南方向から）	
図版 3	85
<ul style="list-style-type: none">・ 1号住居跡（SH01）柱穴間土壌検出状況・ 1号住居跡（SH01）柱穴間土壌調査状況・ 1号住居跡（SH01）柱穴間土壌内焼土塊検出状況・ 2号住居跡（SH02）完掘状況（南西方向から）・ 6号住居跡（SH06）完掘状況（北西方向から）・ 8号住居跡（SH08）完掘状況（北西方向から）	
図版 4	86
<ul style="list-style-type: none">・ 昭和55年度調査区全景（南東方向から）・ 昭和55年度1号溝（SD01）近景（南東方向から）・ 昭和55年度1号溝（SD01）近景（東方向から）・ 昭和55年度1号溝（SD01）遺物出土状況①・ 昭和55年度1号溝（SD01）遺物出土状況②	
図版 5	87
<ul style="list-style-type: none">・ 昭和55年度2号溝（SD02）遺物出土状況・ 昭和55年度2号溝（SD02）遺物出土状況（近景）・ 昭和55年度壺棺墓検出状況（遠景）・ 昭和55年度1号壺棺墓（K-01）検出状況①・ 昭和55年度1号壺棺墓（K-01）検出状況②・ 昭和55年度1号壺棺墓（K-01）内部検出状況	

図版 6	88
<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和55年度 3 号壺棺墓 (K - 0 3) 検出状況 ・ 昭和55年度 3 号壺棺墓 (K - 0 3) 内部検出状況① ・ 昭和55年度 3 号壺棺墓 (K - 0 3) 内部検出状況② ・ 昭和55年度 6 号壺棺墓 (K - 0 6) 検出状況① ・ 昭和55年度 6 号壺棺墓 (K - 0 6) 検出状況② 	
図版 7	89
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 号溝 (S D 0 1) 出土遺物 (1) 	
図版 8	90
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 号溝 (S D 0 1) 出土遺物 (2) 	
図版 9	91
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 号溝 (S D 0 1) 出土遺物 (3) 	
図版10	92
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 号溝 (S D 0 1) ・ 住居跡 (S H) 出土遺物 	
図版11	93
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 号溝 (S D 0 2) 出土遺物 	

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

賀来中学校遺跡は大分市大字賀来字門田に所在する。昭和55年の中学校校舎建て替えに際し大分市教育委員会が調査主体となり、第1次発掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期を中心とする大規模な環濠集落の存在が明らかとなり、改めて遺跡の重要性が認識されることとなった。

その後、約10年を経過し、その間にも大分市は東九州の中核都市として着実な発展を遂げてきた。都市人口も昭和63年には40万人を擁するにいたり、著しい人口増加は都市部近郊をターゲットとする大型団地の開発ラッシュに拍車をかける状況を生起する。また、これらに呼応し交通体系の整備が危急の課題として浮揚し、市内各所において早急なる対処が求められることになる。賀来中学校遺跡内を貫通する県道大分・挾間線も例外でなく、郊外へぬける主要路線としての重要性が高まり、交通量の増加はピークに達した。本道はまた、通学路としての機能も担っており、交通量の増加は児童・生徒の登下校における安全面においても懸念を生じる事態を招いたのである。

以上の状況に鑑み、平成3年度に現状の打開策として中学校西側にバイパスの新設が計画された。予定ルート上には中学校のプールが所在したため、プールの移転が早速決定され、移転先の試掘確認調査を平成3年3月28日に実施し、遺跡の存在を確認した。この結果にもとづき平成3年4月16日～5月30日の間、約1000㎡について発掘調査をおこなうことになった。調査期間中は、近年にない天候不順で、雨天により作業はたびたび中断を余儀なくされ、まさに晴天時を縫うように調査は進行したが、発掘従事者の皆さんの協力を得て調査はほぼ予定通りに終了した。

2. 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 安東 裕

事務局

大分市教育委員会社会教育課

内田 悟（大分市教育委員会社会教育課課長）

野尻政文（ 同上 文化財室室長）

秦 政博（ 同上 主幹 ）

佐藤良蔵（ 同上 主査 ）

佐藤小夜（ 同上 主任 ）

大分市教育委員会体育保健課

河野信治（大分市教育委員会体育保健課課長）

御手洗史郎（ 同上 庶務係長）

なお、木村幾多郎（大分市歴史資料館館長）、玉永光洋（同学芸調査係長）に調査上のアドバイスをいただいた。

調査作業員

佐藤フキ子・佐藤久子・佐藤ヨシコ・麻生ルミ・麻生雪路・福田アサ子・
福田伸子・猪原リエ・佐藤次男・佐藤チズ子・猪原勝喜・佐藤敦子・小野
淳子・佐藤美智代・三ヶ尻トヨ子

整理事業員

井口あけみ・渕野玲子・渡辺里美・本室初代・松村千里・西嶋スミエ・原
田和代・宮本恭子・三重野八重子・町田ユカリ・漆間裕子・浜田貴美子・
釘宮香苗（以上大分市教育委員会社会教育課文化財室）

以上の他、発掘調査期間中、高橋 徹、綿貫俊一、吉田 寛（以上大分県教育庁文化課）の各氏
が来跡され、種々の教示と助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

3. 調査日誌抄

- | | |
|-------|---|
| 4月16日 | 表土剥ぎの為、重機を投入する。 |
| 17日 | 作業員投入。 |
| 19日 | 遺構検出作業を開始する。 |
| 22日 | 遺構検出状況写真の撮影。遺構の掘り下げを開始する。 |
| 25日 | 1号住居跡をほぼ完掘する。1号溝の一部掘り下げを開始する。 |
| 30日 | 2号溝の掘り下げを開始する。 仮BMの設定。 |
| 5月 9日 | 1号溝遺物出土状況写真の撮影準備にかかる。
4号溝の掘り下げを開始する。 |
| 10日 | 5号住居跡の掘り下げを開始する。 |
| 13日 | 6号住居跡の掘り下げを開始する。
5号住居跡の掘り下げをほぼ完了する。 |
| 14日 | 2号溝の本格的な掘り下げ作業に入る。 |
| 23日 | 1号溝遺物出土状況写真の撮影。遺物の図化、取り上げを開始する。 |
| 24日 | 2号溝の掘り下げをほぼ完了する。1号溝の遺物取り上げと並行して1号溝
の本格的な掘り下げを実施する。
荏隈小学校130人による現地見学 |
| 27日 | 1号溝の掘り下げを継続実施。全体写真撮影準備
宗方小学校160人による現地見学 |
| 28日 | 1号溝の掘り下げを完了する。
全体写真の撮影。 |
| 30日 | 調査資材等の撤収。 |

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

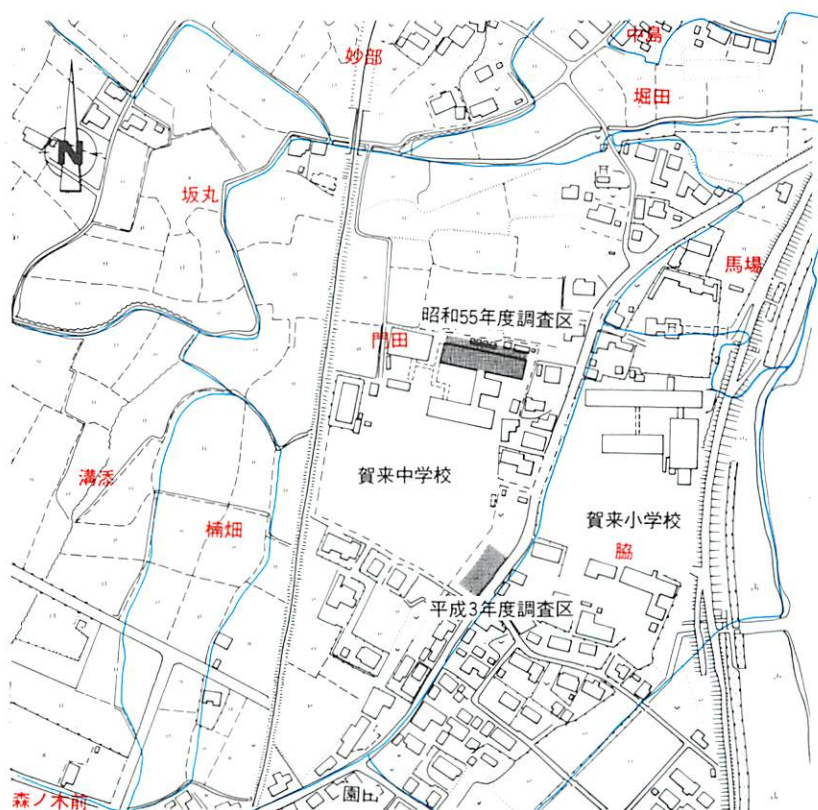
大分市西部に位置する賀来地区は、立石山を水源とする大分川とその支流賀来川に挟まれた肥沃な沖積地を中心とする地域に相当し、賀来中学校遺跡はこの二大河川の合流地点に近い微高地上に位置している。

遺跡西・北側に展開する低丘陵上では、野田山・庄ノ原・机帳原遺跡等を中心に旧石器時代の遺物が採集されており、古くより当地が生活の舞台として利用されていたことを物語る。また、この丘陵上には縄文遺跡も多数存在し、野田山遺跡、下黒野遺跡などでは縄文時代早期の遺構・遺物が確認され、永続的な利用がなされたことを窺い知ることができる。

稲作農耕導入時期の遺跡としては前述の下黒野遺跡をあげることができよう。当遺跡では刻み目突帯文土器とともに丹塗り研磨された壺形土器が共伴出土しており、さらには石庖丁形石器の出土もみられ、初期稲作農耕存在の可能性を示唆している。

弥生時代後期になるとこの地域も含めた大分市域全体はドラスティックな展開をみせるようになる。すなわち、環濠様の大規模な溝状遺構を有した集落形成が随所にみられ、遺跡数も前代と比較にならない程の増加傾向を示すようになる。賀来地域周辺においても、尼ヶ城遺跡・雄城台遺跡等にこのような状況がみられる他、低地における僅少例として今回の調査対象である賀来中学校遺跡に同様の集落形成が確認されている。

古墳時代以降、当地域はさらに活況を呈するようになる。庄ノ原古墳地縁辺には古墳時代中期に蓬来山古墳を中心とする高塚古墳が造営され、当地域を統治する一大勢力の存在を今に伝えている。この情勢は引き続き後期にも引き継がれたとみられ、丑殿古墳、千代丸古墳などの高塚古墳が永続的に造営され、その周辺には横穴墓群が多数分布するといった様態



第1図 賀来中学校遺跡調査地点位置図 (1/5000)

が展開する。このような中で千代丸古墳には石棚前面に線刻画が施され、古墳時代の終末時期に筑後川流域との文化接触があった事実が知られ、注目されよう。

古代には大分川の形成になる低段丘上を「好所」と定め、「国の華」としての豊後国分寺が造営される。これは直線距離3kmを測る国府推定地（「古国府」）との大分川を中心とする水上交通によるアクセスを期待しての選地であったと推定される。

中世には賀来荘として賀来氏の本貫地となり、調査地の北方300mには賀来氏の館跡の伝承が今に残り、現在天満社が鎮座している。当該期の賀来川流域の遺跡のひとつである宮苑遺跡では13世紀後半を中心とする館跡が発見されており、豊後における中世居館の構造解明に資する所は大きいといえよう。

賀来中学校遺跡は大分市大字賀来字門田に所在し、現在遺跡地の大部分は賀来中学校校舎ならびにグラウンドとして利用されている。旧古に二大河川によって形成された当地は周囲よりも幾分高位に位置し、氾濫に対する防備効果は大きく、さらには本支川の交わるところに近接しているという地理的特性の上からも水上交通の要衝として、非常に有利な地域であったと考えられよう。

註1)「野田山遺跡」大分市教育委員会・三井不動産株式会社 1979

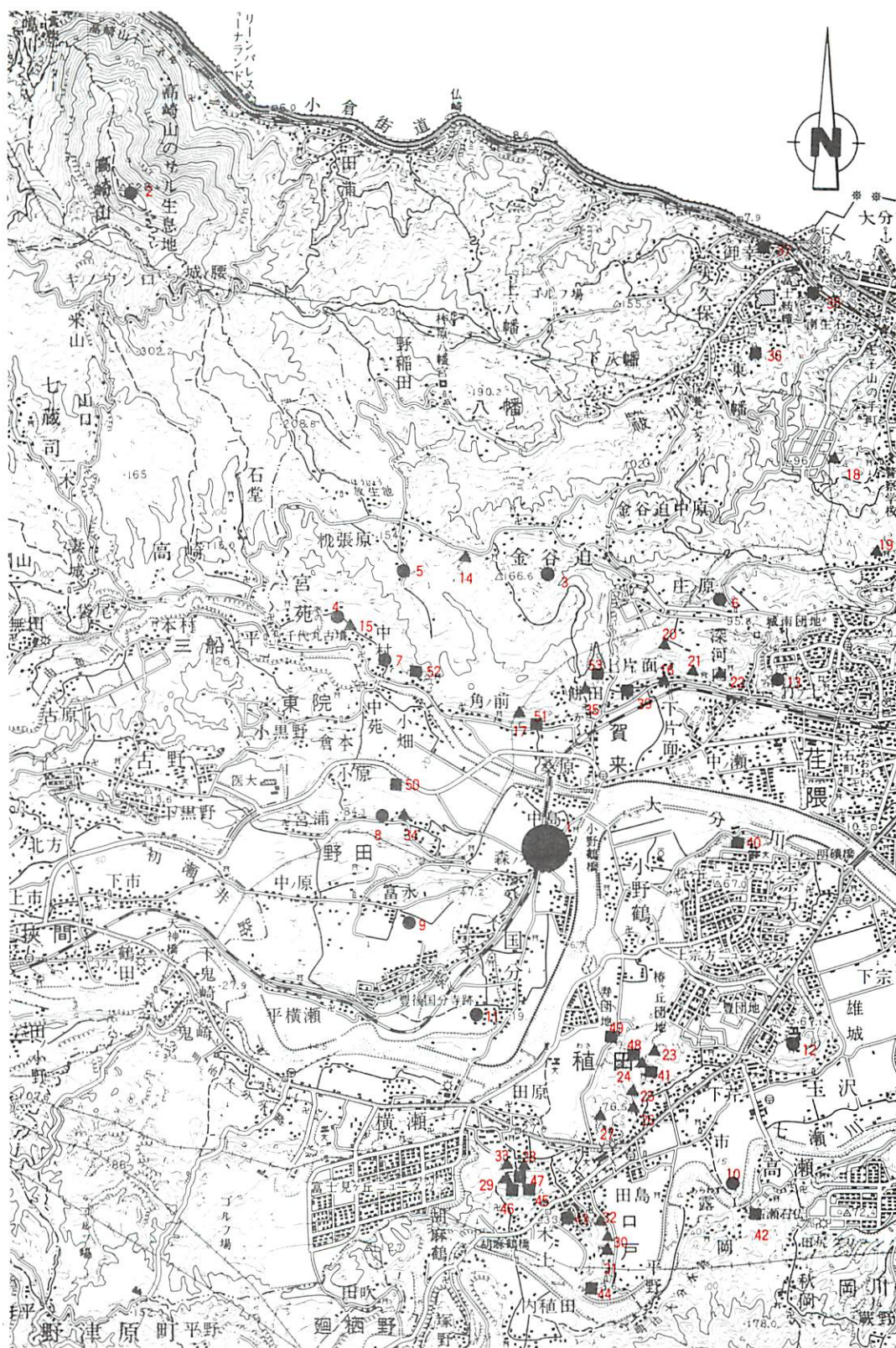
註2) 註1に同じ

註3)「下黒野遺跡」大分郡桼間町大字古野字下黒野所在遺跡の調査 大分県教育委員会 1974

◀ 表 1 周辺遺跡一覧 ▶

番号	遺 跡 名	所 在 地	番号	遺 跡 名	所 在 地	番号	遺 跡 名	所 在 地
1	賀来中学校遺跡	大分市大字賀来	2	高崎山城跡	大分市大字神崎	3	金谷迫城跡	大分市大字金谷迫
4	宮苑遺跡	大分市大字宮苑	5	机帳原遺跡	大分市大字机帳原	6	庄ノ原遺跡	大分市大字庄ノ原
7	中村遺跡	大分市大字宮苑	8	中尾遺跡	大分市大字野田	9	国分台遺跡	大分市大字野田
10	植田市遺跡	大分市大字玉沢	11	豊後国分寺跡	大分市大字国分	12	雄城台遺跡	大分市大字玉沢
13	尼ヶ城遺跡	大分市大字永興	14	金谷迫古墳	大分市大字金谷迫	15	千代丸古墳	大分市大字宮苑
16	丑殿古墳	大分市大字賀来	17	餅田古墳群	大分市大字賀来	18	亀甲山古墳	大分市大字三芳
19	古宮古墳	大分市大字三芳	20	蓬来山古墳	大分市大字庄ノ原	21	田崎古墳群	大分市大字賀来
22	深河内古墳群	大分市大字深河内	23	下迫古墳	大分市大字市	24	虎御前古墳	大分市大字木ノ上
25	漆間古墳	大分市大字木ノ上	26	世利門古墳	大分市大字上世利	27	稲荷古墳	大分市大字木ノ上
28	阿部古墳	大分市大字木ノ上	29	山伏古墳	大分市大字木ノ上	30	千人塚古墳	大分市大字木ノ上
31	浅草神社古墳	大分市大字木ノ上	32	御陵古墳	大分市大字木ノ上	33	四本松古墳	大分市大字木ノ上
34	中尾古墳	大分市大字中尾	35	井手ノ上古墳	大分市大字賀来	36	穴蟹喰横穴墓	大分市大字八幡
37	蟹喰横穴墓群	大分市大字神崎	38	生石横穴墓群	大分市大字八幡	39	上片面横穴墓	大分市大字賀来
40	小野鶴横穴墓群	大分市大字小野鶴	41	高来山横穴墓	大分市大字上芹	42	高瀬横穴墓群	大分市大字高瀬
43	木ノ上古道石棺	大分市大字木ノ上	44	岩崎横穴墓群	大分市大字口戸	45	土肥横穴墓群	大分市大字木ノ上
46	志土地横穴墓群	大分市大字木ノ上	47	木ノ上峠横穴墓群	大分市大字木ノ上	48	漆間横穴墓群	大分市大字木ノ上
49	大曾横穴墓群	大分市大字田原	50	小原横穴墓	大分市大字中尾	51	餅田横穴墓群	大分市大字賀来
52	岩御堂横穴墓群	大分市大字宮苑	53	井手ノ上横穴墓群	大分市大字賀来			

● 遺跡 ▲ 古墳 ■ 横穴墓群



第2図 賀来中学校遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000)

註4) 註3に同じ

註5) 同様な遺跡例として、下郡遺跡・多武尾遺跡・雄城台遺跡・尼ヶ城遺跡・北の崎遺跡等がある。

註6) 集落を画する条溝様の溝を伴い、住居内からは方格規矩鏡片が出土している。讃岐和夫「海と里のムラ」『大分市史』

上巻 大分市 1987

註7) 「雄城台遺跡・第8次発掘調査の概要」大分県教育委員会 1987

註8) 昭和54年大分市教育委員会調査・讃岐和夫「海と里のムラ」『大分市史』上巻 大分市 1987

註9) 富来 隆・杉崎重臣「蓬来山古墳」『大分市の文化財』第15集 大分市教育委員会 1975

註10) 高橋 徹「高塚の始まりとその行方」『大分市史』上巻 大分市 1987

註11) 註10に同じ

註12) 周辺には岩御堂横穴墓群をはじめとする多くの横穴墓群が分布する。岩御堂横穴墓群には他所から移設されたと思われる凝灰岩製の家形石棺蓋が安置されている。

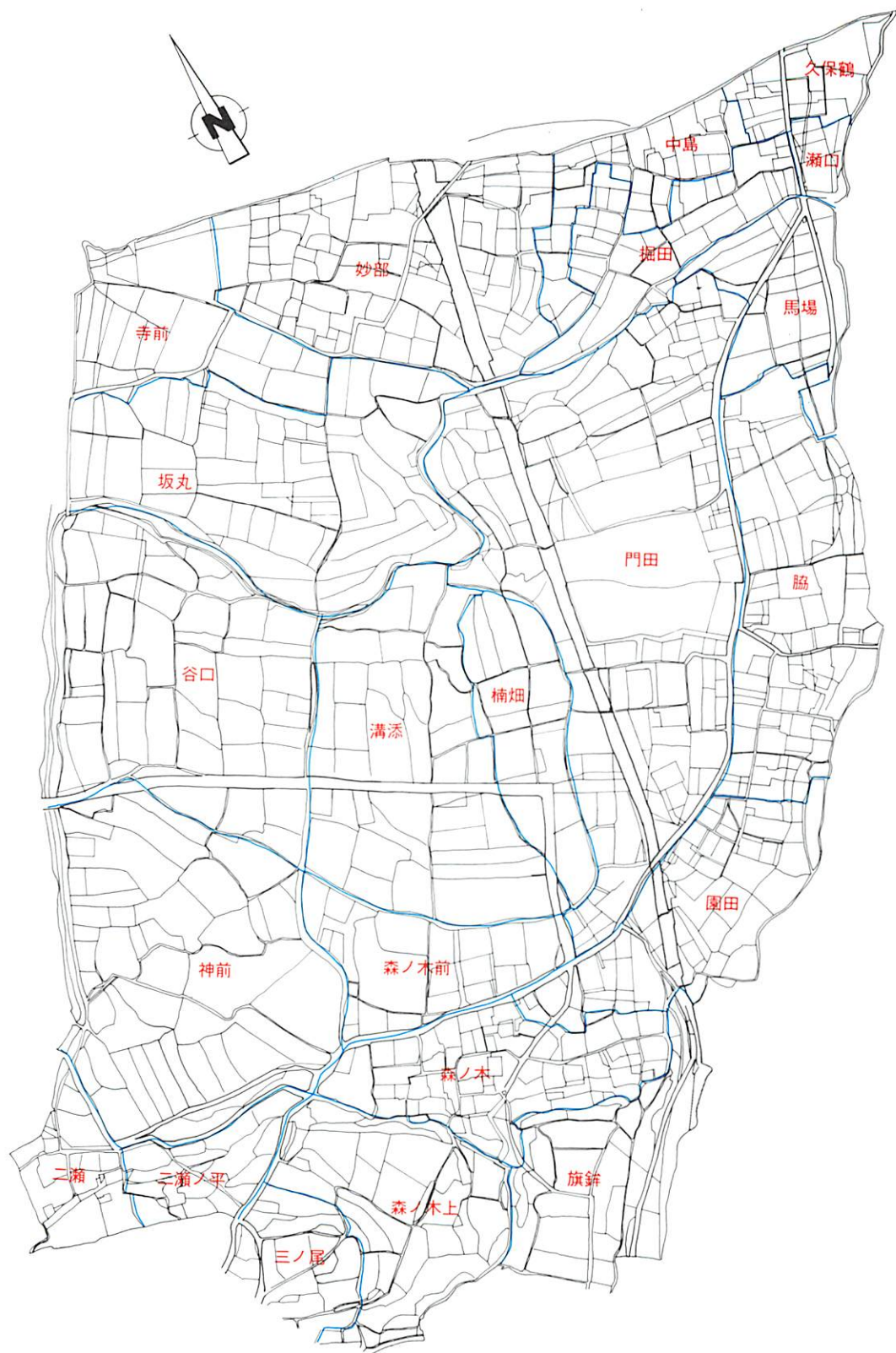
註13) 装飾古墳の変遷上最終段階に現われるとされる線刻文様を有する古墳は大分県内においては他に国見町・鬼塚古墳、玖珠町・鬼ヶ城古墳が知られているが、当地域にこれらに先行する装飾古墳の系譜はみとめられず、現段階においては筑後川流域とのなんらかの「文化接触」に成立要因を求めるのが妥当であるとする。

註14) 「豊後国分寺跡」大分市教育委員会 1979

註15) 古国府地域が古来より国府推定地として有力視され、数次にわたり調査が実施されてきているが、国府に関係すると思われる遺構・遺物の発見はいまのところない。

註16) 天満社の境内に「賀来荘 地頭賀来氏館跡」銘の石碑が建立されている。

註17) 昭和59年度大分市教育委員会調査



第3図 賀来中学校遺跡周辺地割図

第Ⅲ章 発掘調査の記録

1 調査の概要

調査は平成3年4月16日～同5月30日の間実施した。

(1) 調査区の設定

調査に先がけて、第4図に示すように調査区の設定をおこなった。まず、任意に基点を設け南から北へA、B、C…、西から東へ1、2、3…と区割りをおこなっている。なお、南北方向の区割り線は磁北に一致する。

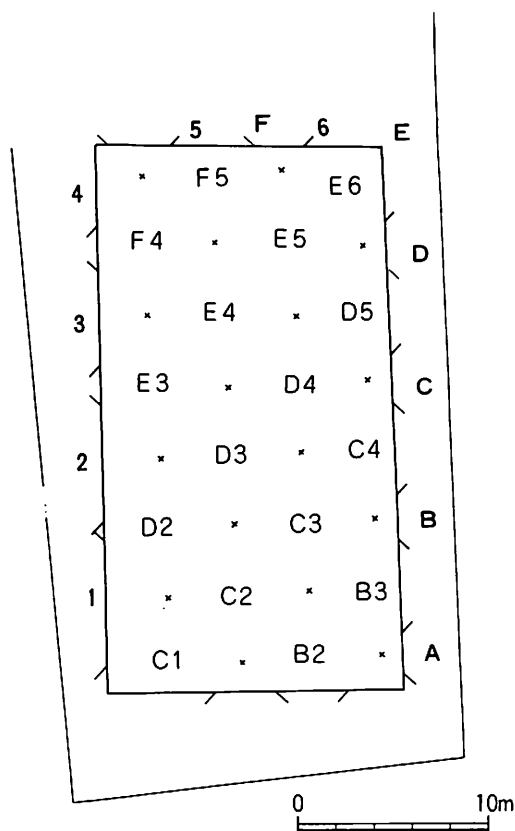
(2) 土層

本調査区内には部分的に間層の存在する所も認められるものの、基本的にはほぼ第5図に示す5つの土層により構成される。

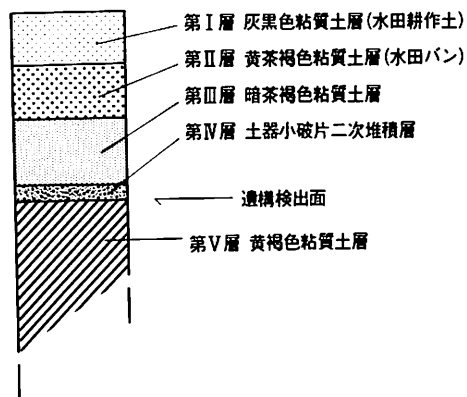
第Ⅰ層は灰黒色粘質土層である。この層は調査開始直前まで水田として利用された耕作層である。地点により若干の差異がみられるが、平均層厚14cmを測る。第Ⅱ層は黄茶褐色粘質土層である。第Ⅰ層直下に均一に存在する。第Ⅰ層の水田耕作層に伴う水田基盤層、いわゆる水田バンである。第Ⅲ層は暗茶褐色粘質土層である。平均層厚18cmを測る。第Ⅰ層に先行する水田耕作土である可能性を指摘できる。第Ⅳ層は土器小片の二次堆積層である。およそ5cmの厚さで分布する。出土する小破片は例外なくローリングを受けており、3cm角程度の大きさのものが主体を占める。水田耕地造成時に一括廃棄されたものであろう。第Ⅴ層黄褐色粘質土層は本地点の基盤土層をなすものである。遺構はすべて本層の上面で検出することができる。無遺物層である。

(3) 調査経過と概要

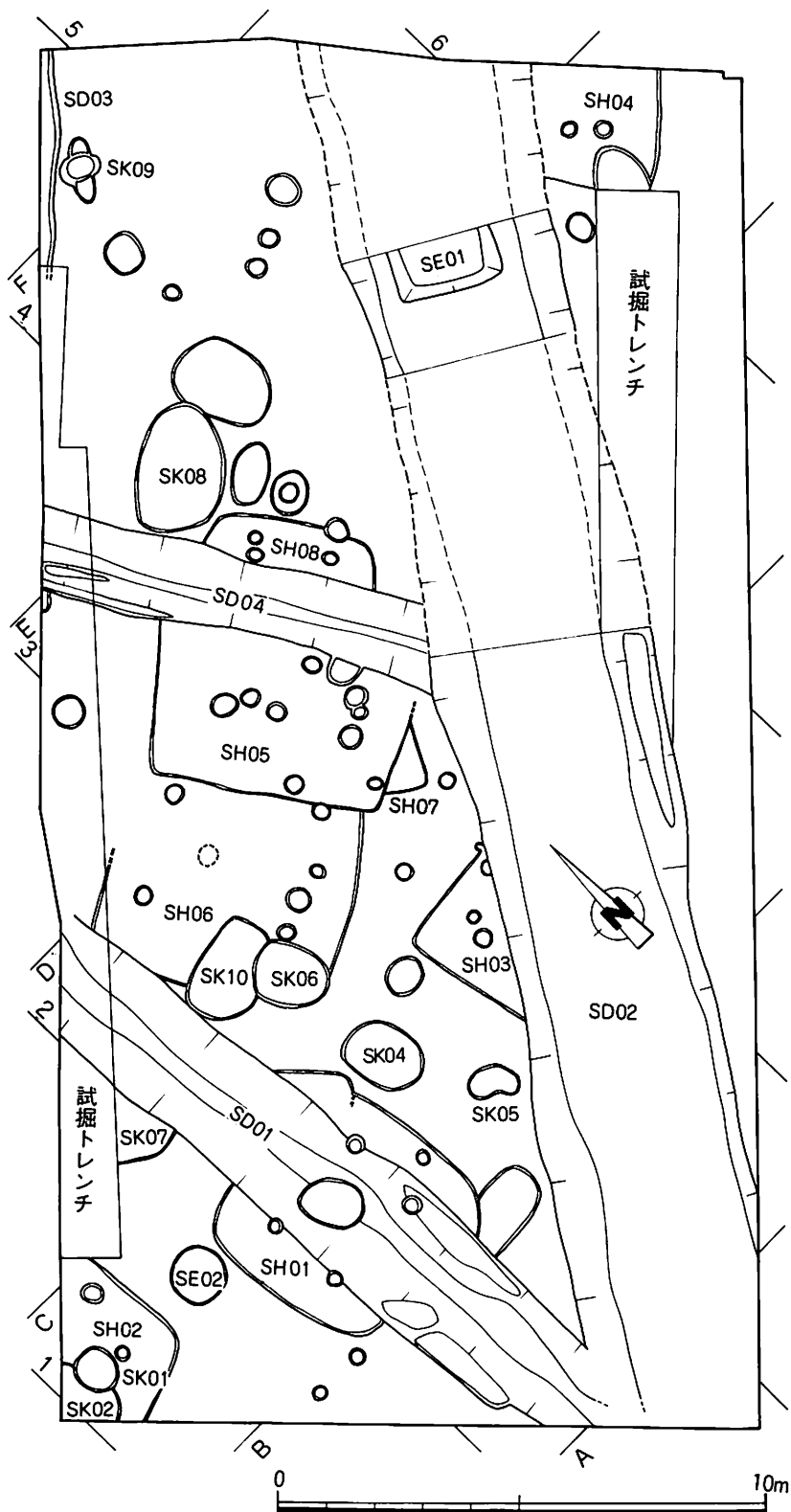
平成3年3月28日に実施した試掘調査の結果を踏まえ、同4月16日、重機による表土除去作業を始めた。表土剥ぎは調査区の西側部分から開始したが、第Ⅴ層黄褐色粘質土層の上面において、遺構が周囲に連綿と展開する状況が看取されたため、調査対象範囲の全面的表土を除去し、遺構の確認をおこなった。遺構はすべて第Ⅴ層上面で確認し、遺構検出後は手掘りによる



第4図 賀来中学校遺跡調査グリッド配置図 (1/400)



第5図 賀来中学校遺跡基本土層模式図 (1/20)



第 6 図 賀来中学校遺跡遺構配置図 (1/150)

掘り下げを順次おこなった。

遺構検出作業の結果、調査区を南～北方向へ斜走する比較的規模の大きな溝状遺構を確認し、その間に堅穴住居跡等の遺構が分布するといった状況が認められた。

検出した遺構は弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居跡8軒(S H01～08)、弥生時代後期の溝状遺構2条、所産時期の不明な土壇18基、中世以降の所産となる溝状遺構2条、井戸跡2基などである。

2 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡8軒、溝状遺構4条、土壇18基、井戸跡2基などである。出土した遺物の内容は縄文時代後期～中世におよぶ。

以下では検出遺構の説明と各遺構の時期決定の指標となる遺物について詳述していく。なお、紙面の都合等により詳細な記述のできなかった遺物に関しては後出の遺物観察表を参照されたい。

(1) 溝状遺構

1号溝(SD01)

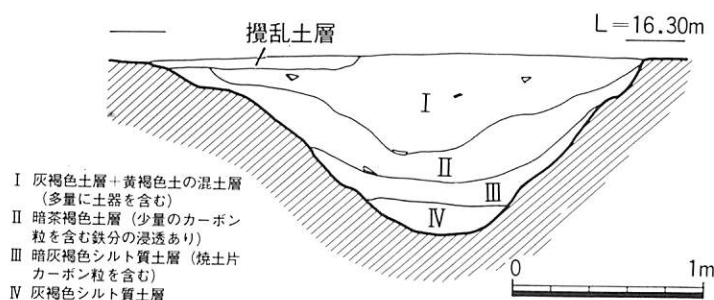
調査区の西側角をほぼ南北方向に斜走する溝状遺構である。掘削方向はN-8°-Wにとっている。断面形は鈍いV字形をなし、内部には多量の土器を内包する。検出面で幅2.23m、現存深度1.02mを測り約15mにわたり検出した。出土土器は溝埋土の最下層～上層についてほぼまんべんなく出土するが、出土量のピークは中層～上層下部に認められる。出土土器の平面分布をみると土器は主として溝の東側から投棄されたような傾向を示しており、溝埋土の同一レベル面に一様に出土するのではなく、あたかも単位ブロックを形成しているような出土状態を示している。また、出土土器はローリング等を受けた痕跡はなく溝内の堆積土層中にもラミナ等の水性作用の所産となる堆積は認められず、溝機能時あるいは埋没過程において流水等の自然営力が介在したという物証を今回の調査結果からは提示することはできなかった。

溝土層断面の観察からは市内多武尾遺跡において確認されているような内堤存在の物証もまた得られていない。

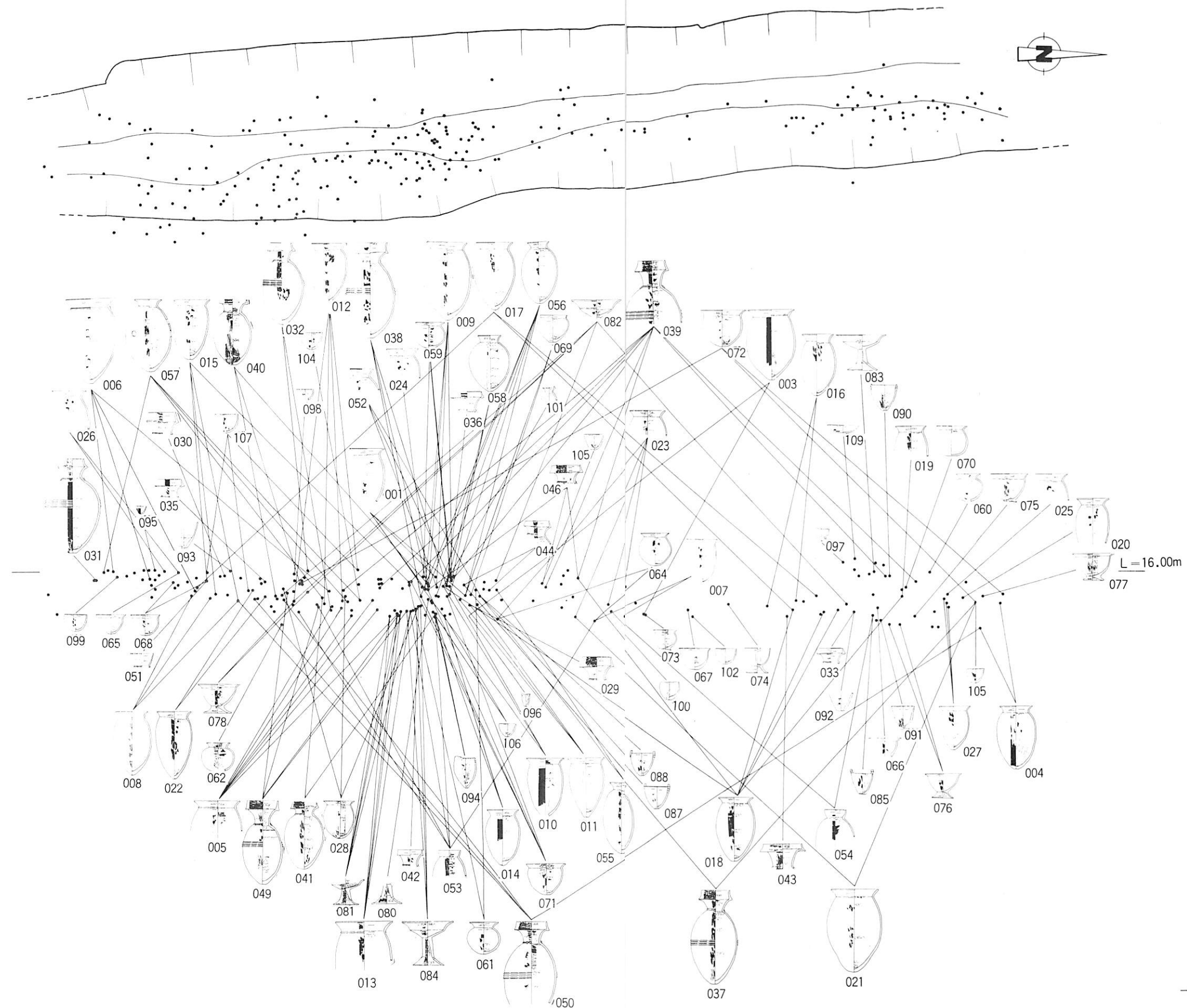
出土土器は甕形土器を主体とし、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、甗形土器、ミニチュア土器等がみられる。



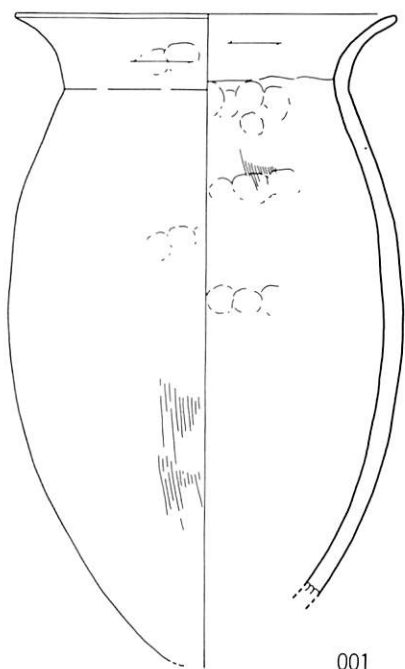
写真1 SD01遺物出土状況



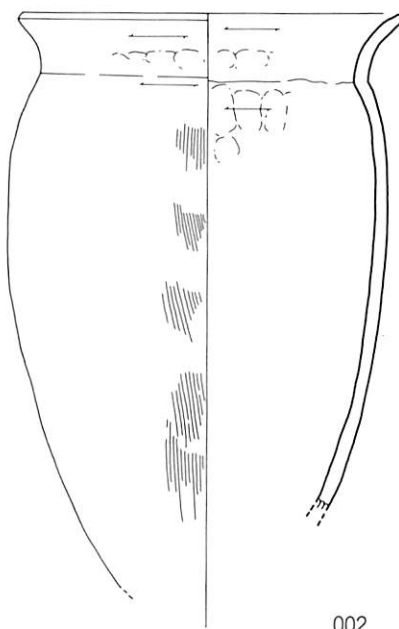
第7図 SD01土層断面図 (1/40)



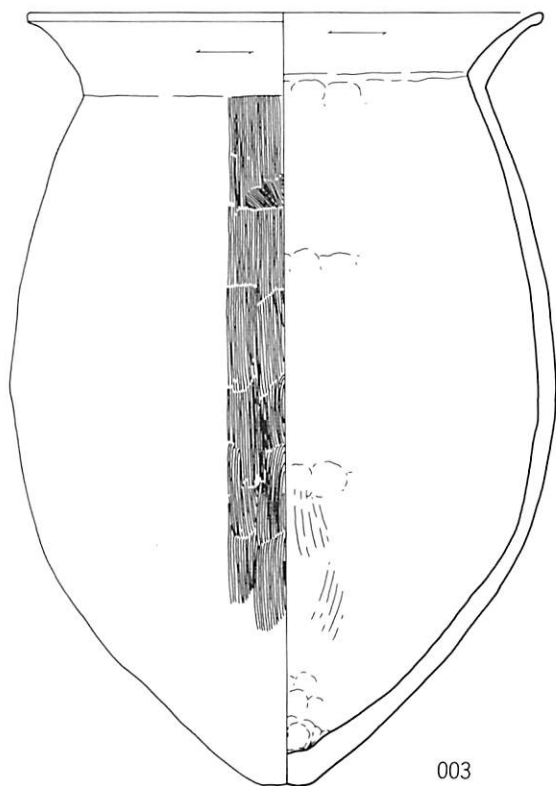
第 8 図 SD01遺物出土ポイント配置 (遺構1/6・遺物1/24)



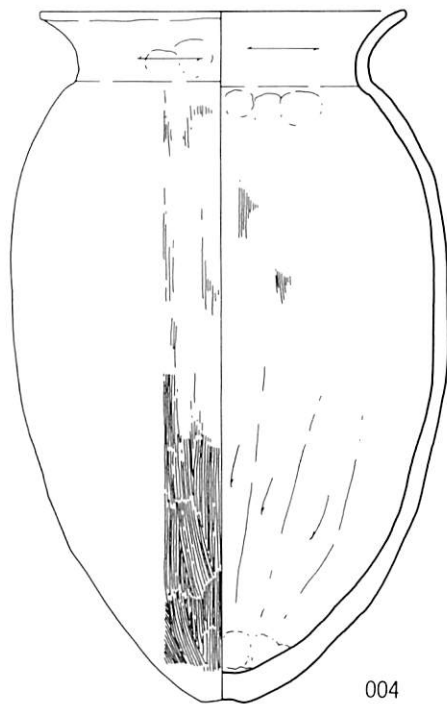
001



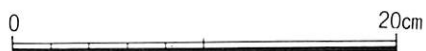
002



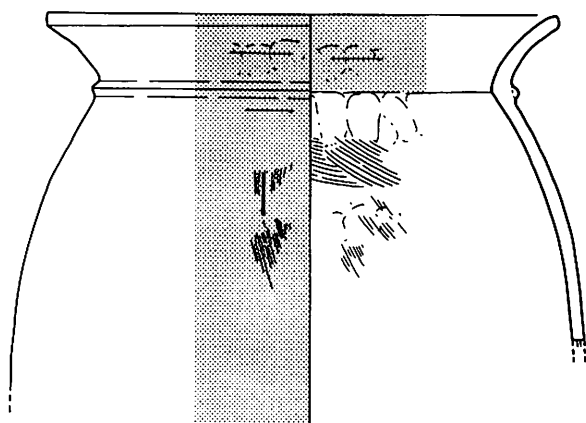
003



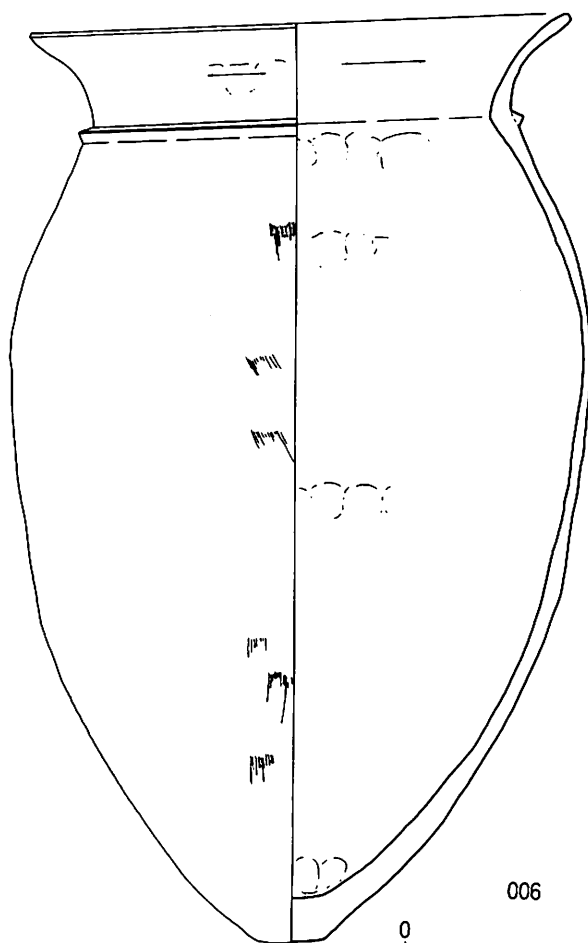
004



第9図 SD01 出土遺物 ① (1/4)



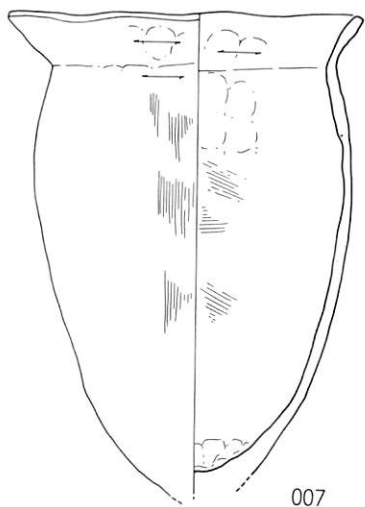
005



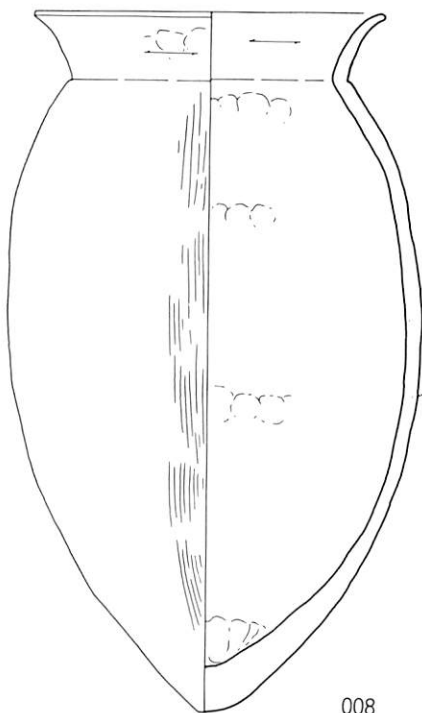
006

0 20cm

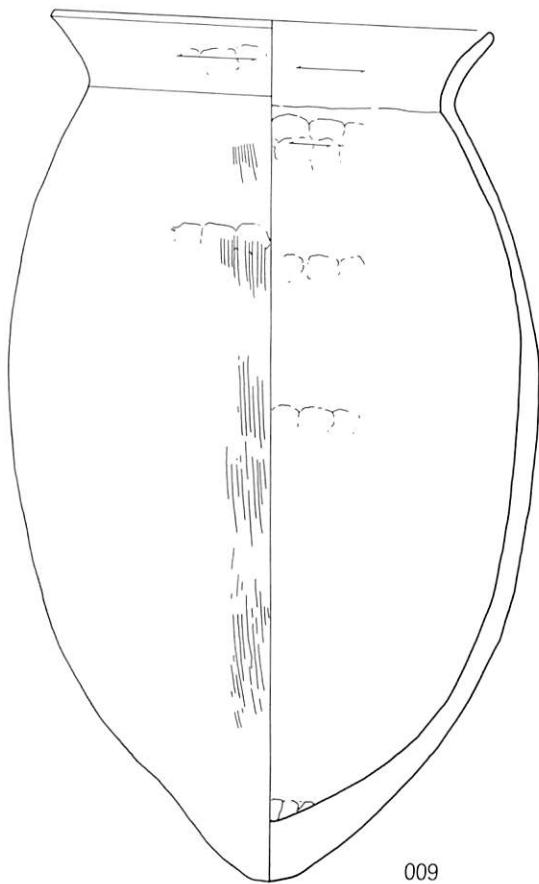
第10図 SD01 出土遺物 ② (1/4)



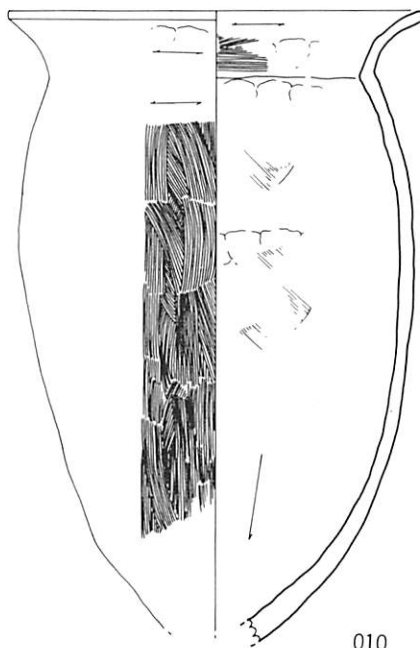
007



008



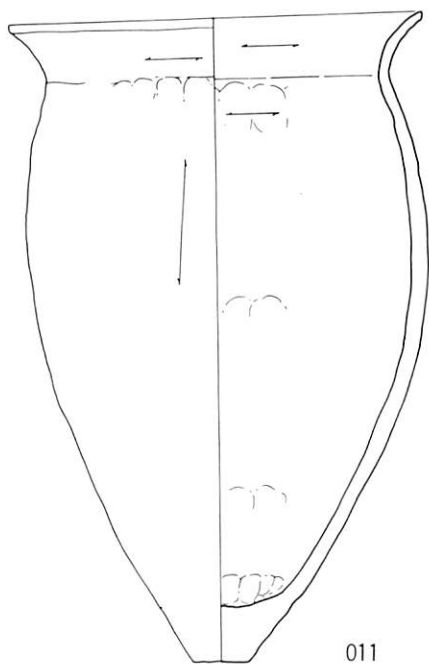
009



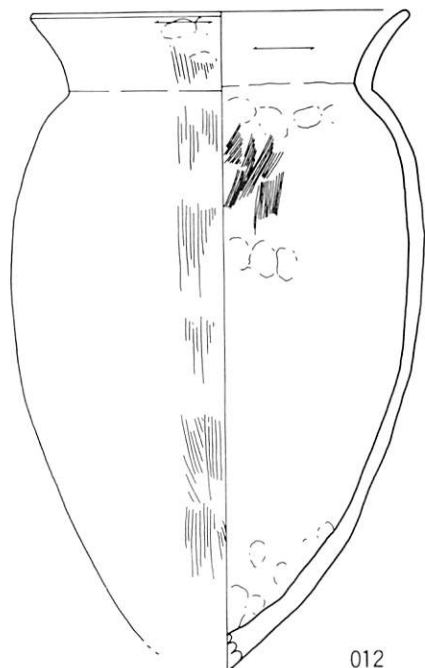
010



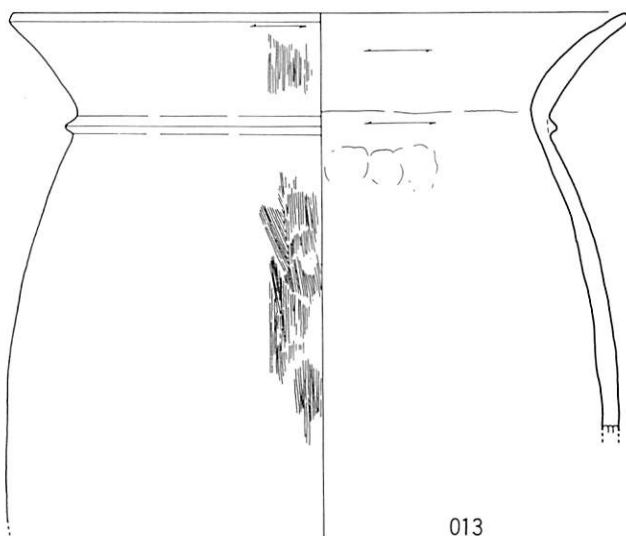
第11図 SD01 出土遺物 ③ (1/4)



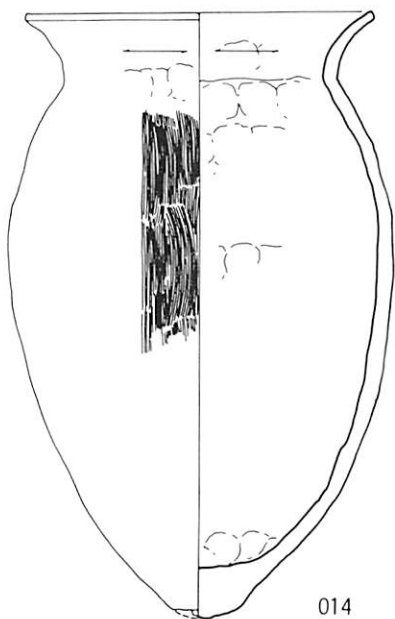
011



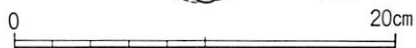
012



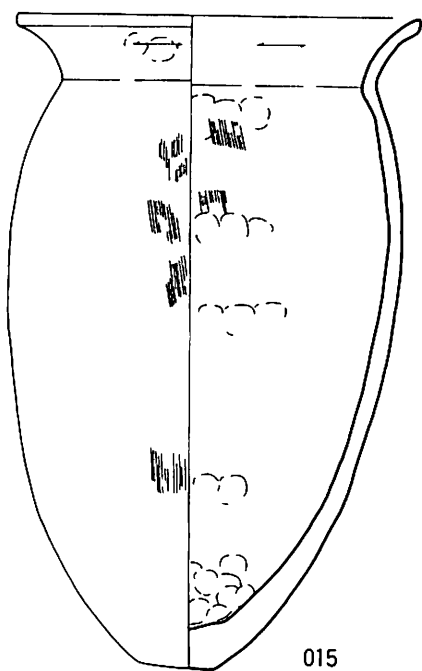
013



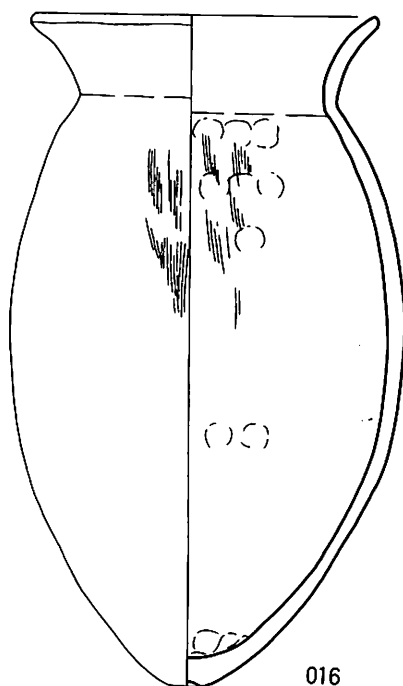
014



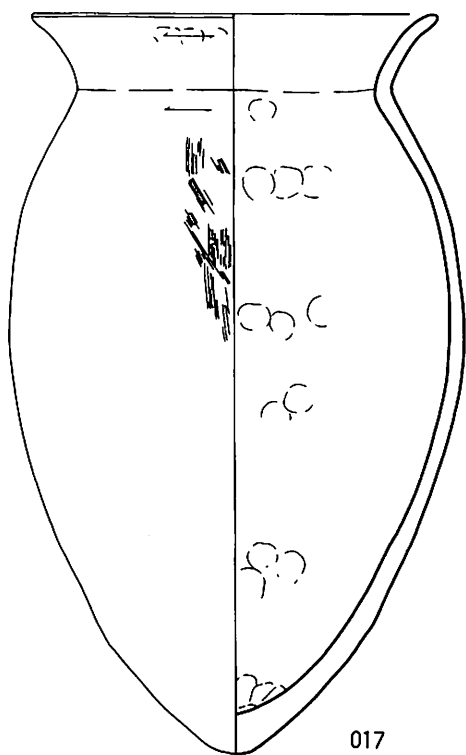
第12図 SD01 出土遺物 ④ (1/4)



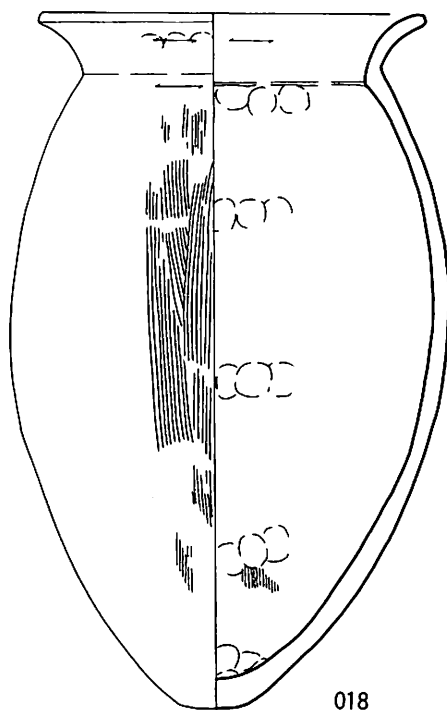
015



016



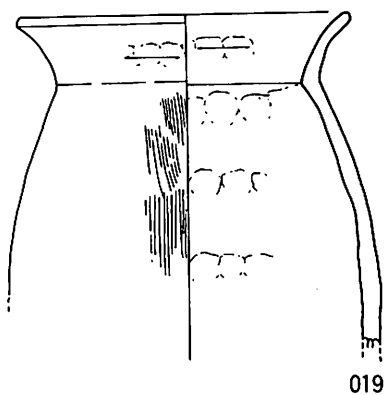
017



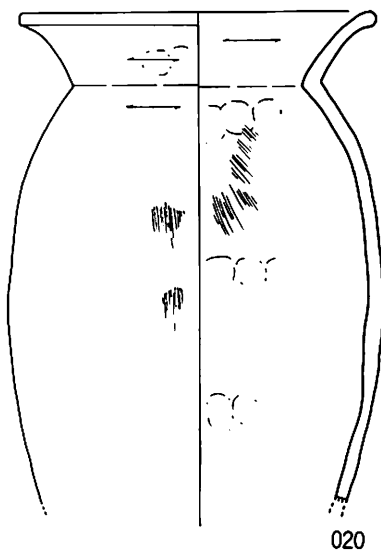
018



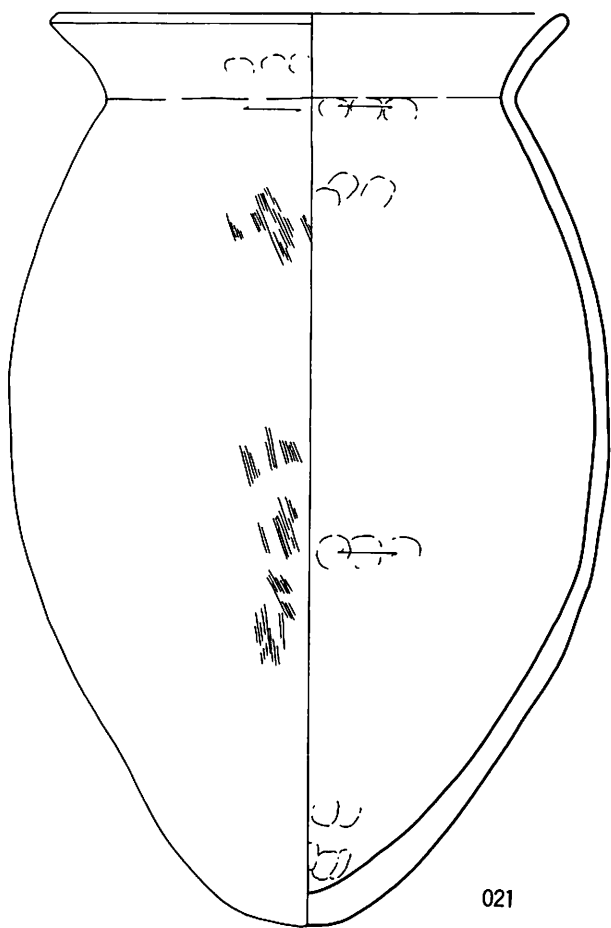
第13図 SD01 出土遺物 ⑤ (1/4)



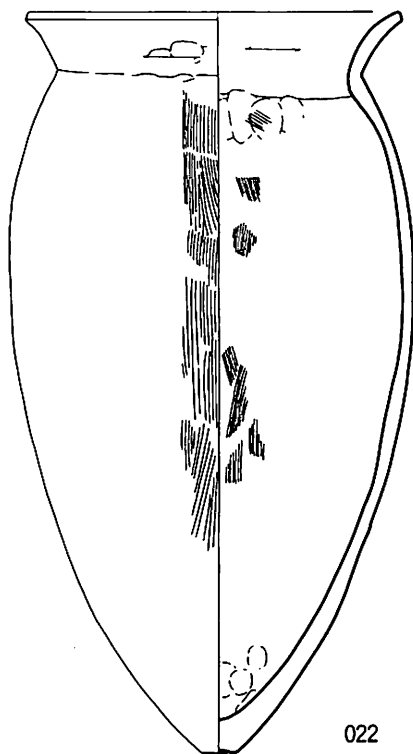
019



020



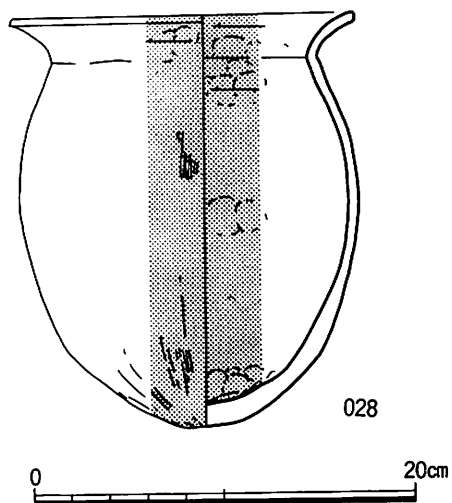
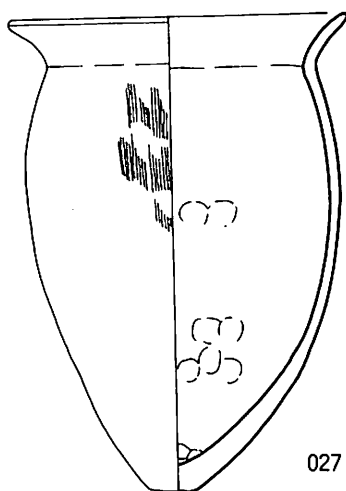
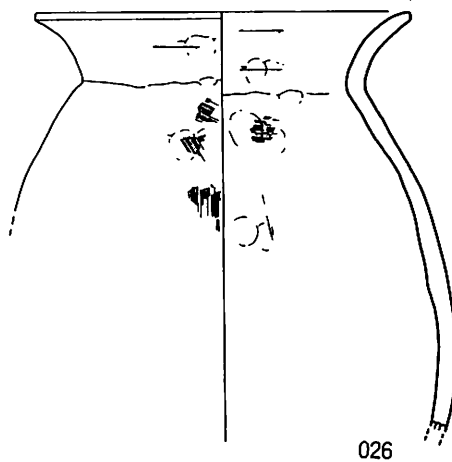
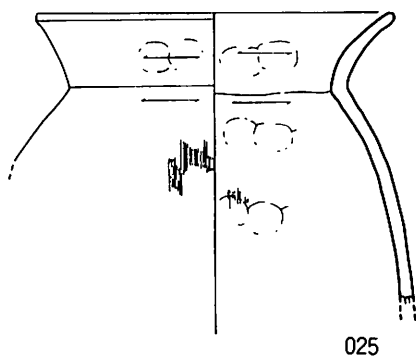
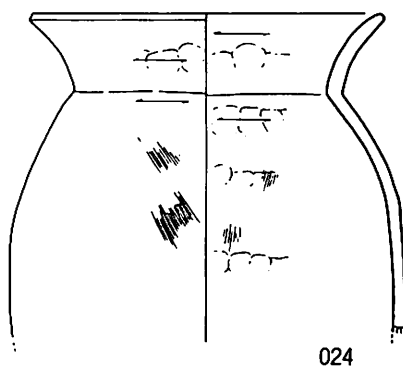
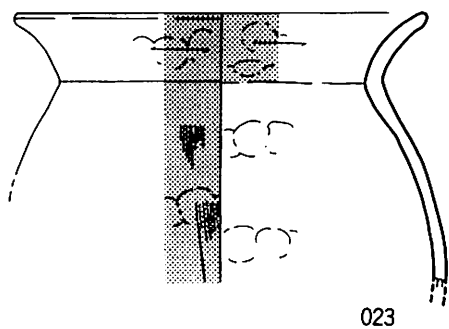
021



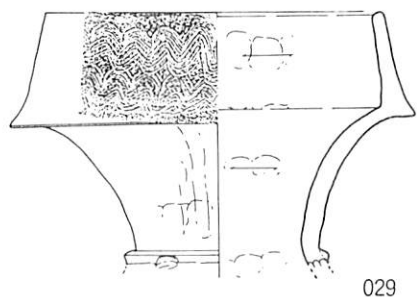
022



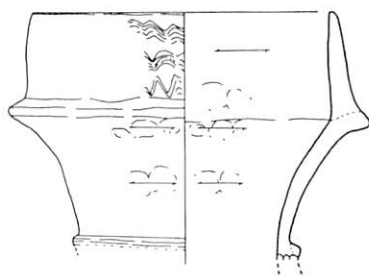
第14図 SD01 出土遺物 ⑥ (1/4)



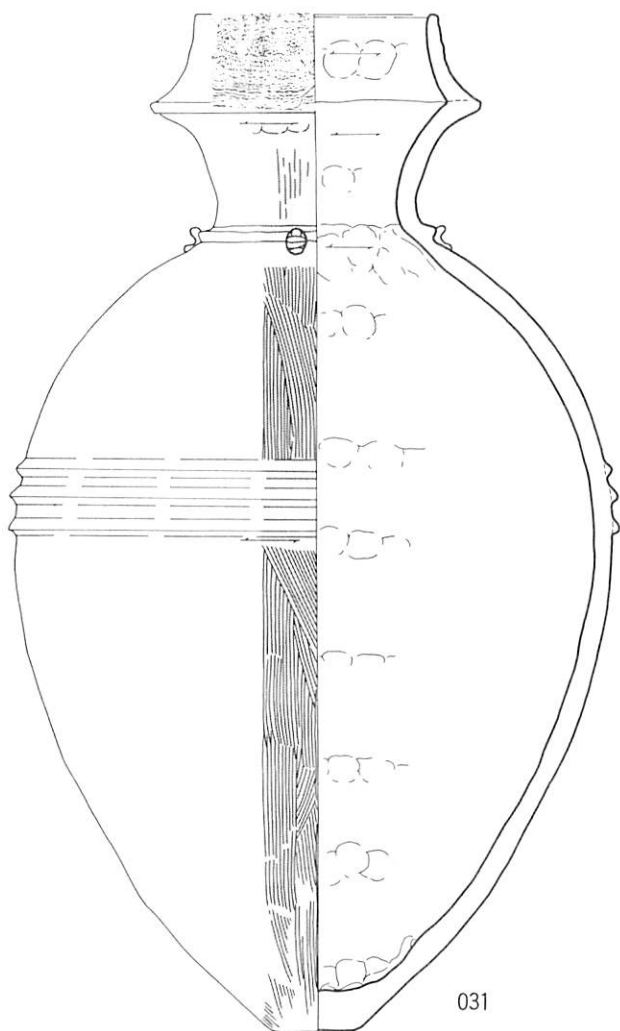
第15図 SD01 出土遺物 ⑦ (1/4)



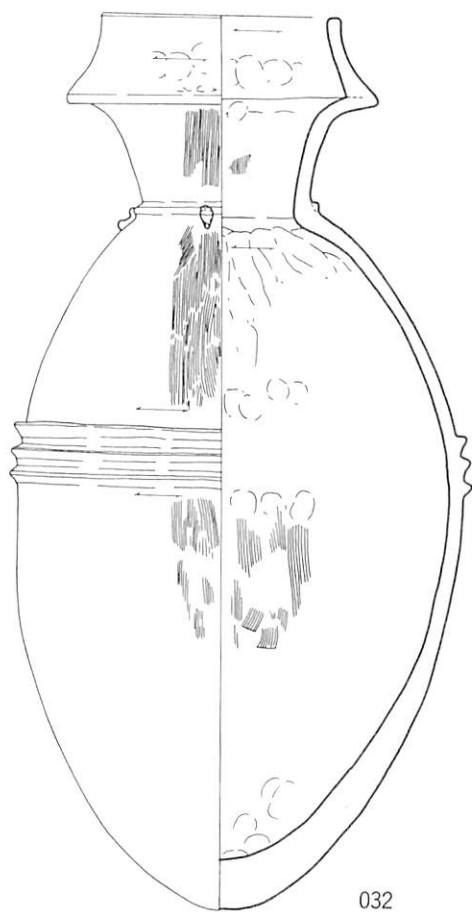
029



030



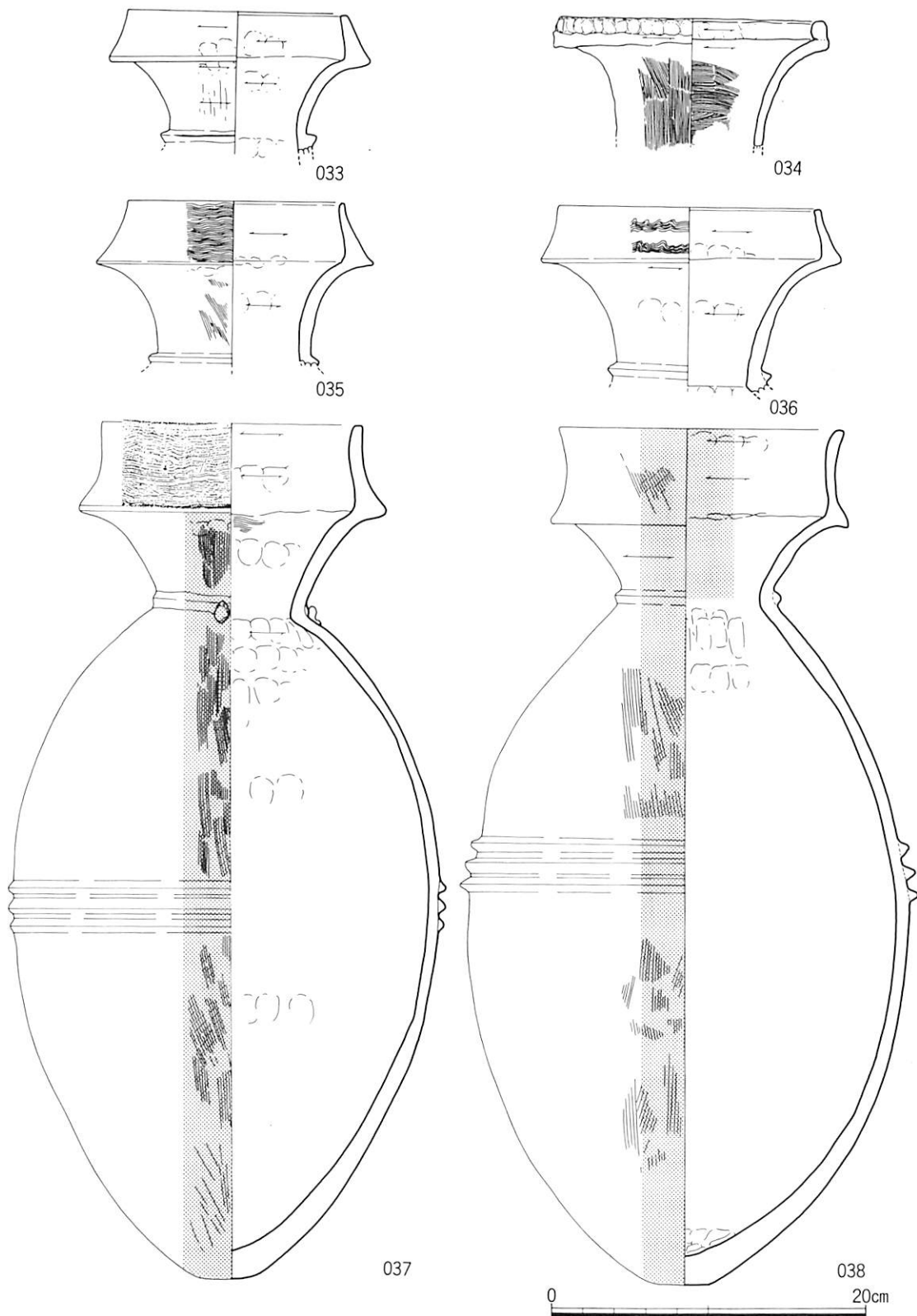
031



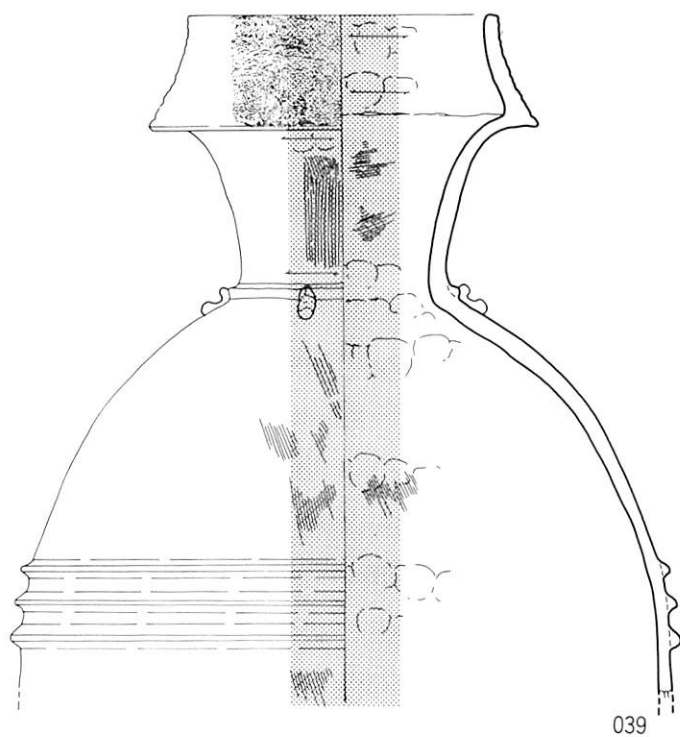
032



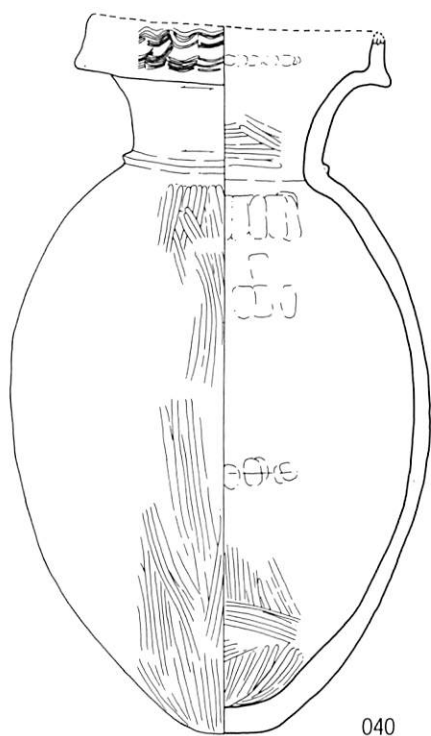
第16図 SD01 出土遺物 ⑧ (1/4)



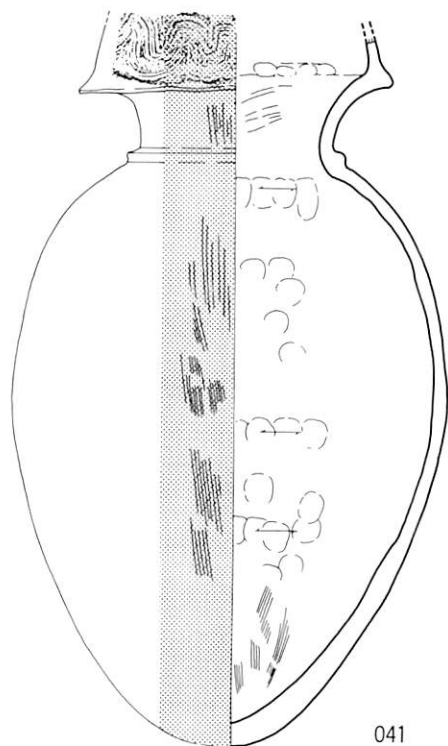
第17図 SD01 出土遺物 ⑨ (1/4)



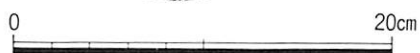
039



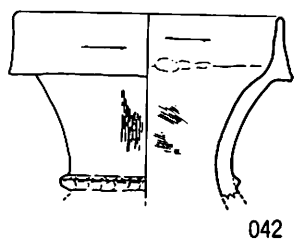
040



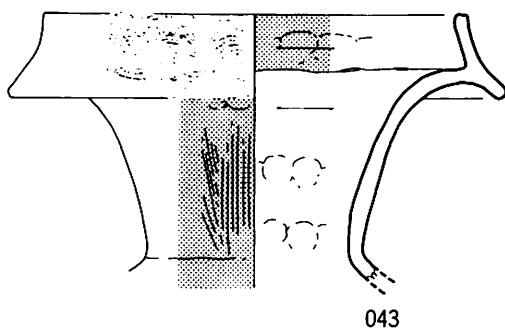
041



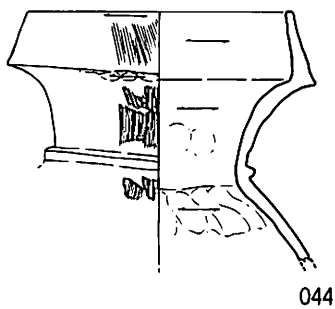
第18図 SD01 出土遺物 ⑩ (1/4)



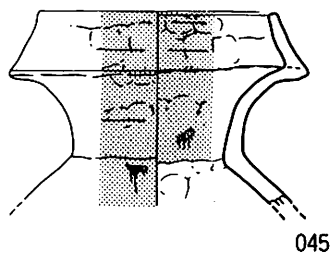
042



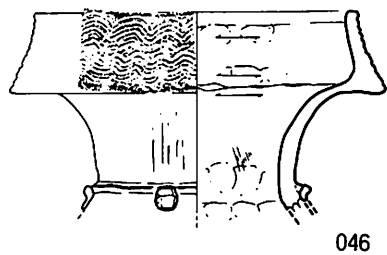
043



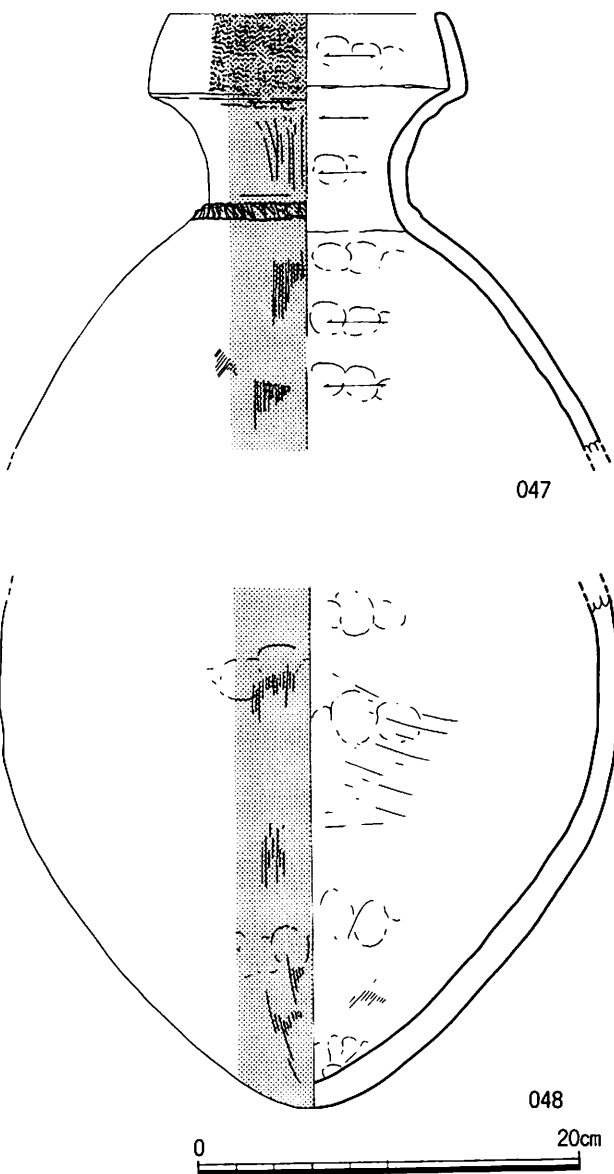
044



045



046

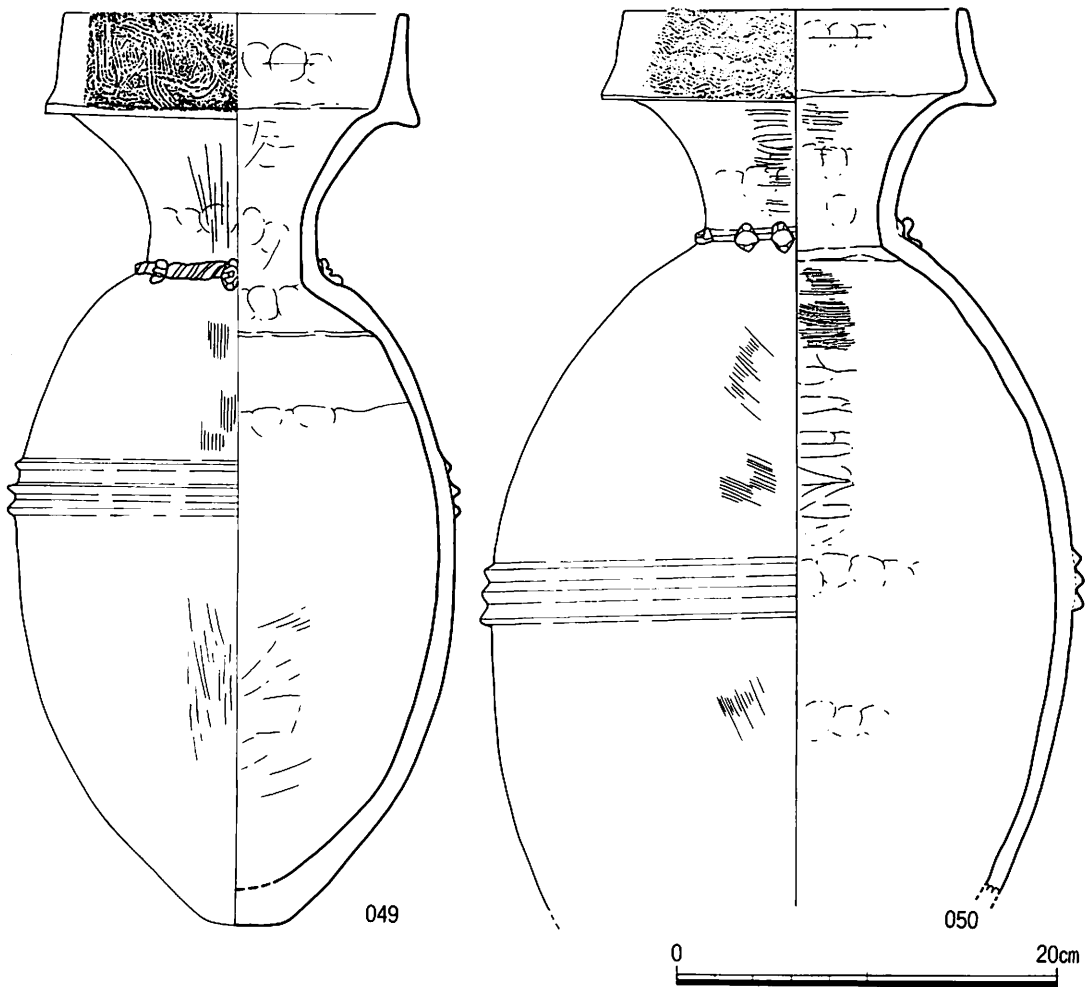


047

048

0 20cm

第19図 SD01 出土遺物 ① (1/4)



第20図 SD01 出土遺物 ⑫ (1/4)

甕形土器（第9図～第15図）

遺存率の高い40点について図化をおこない掲載している。

出土している甕形土器は胴上半～口縁部の形態によって以下の4類に分類することができる。

I類 肩部から口縁部にいたる境界付近に特徴的な様態を示す。

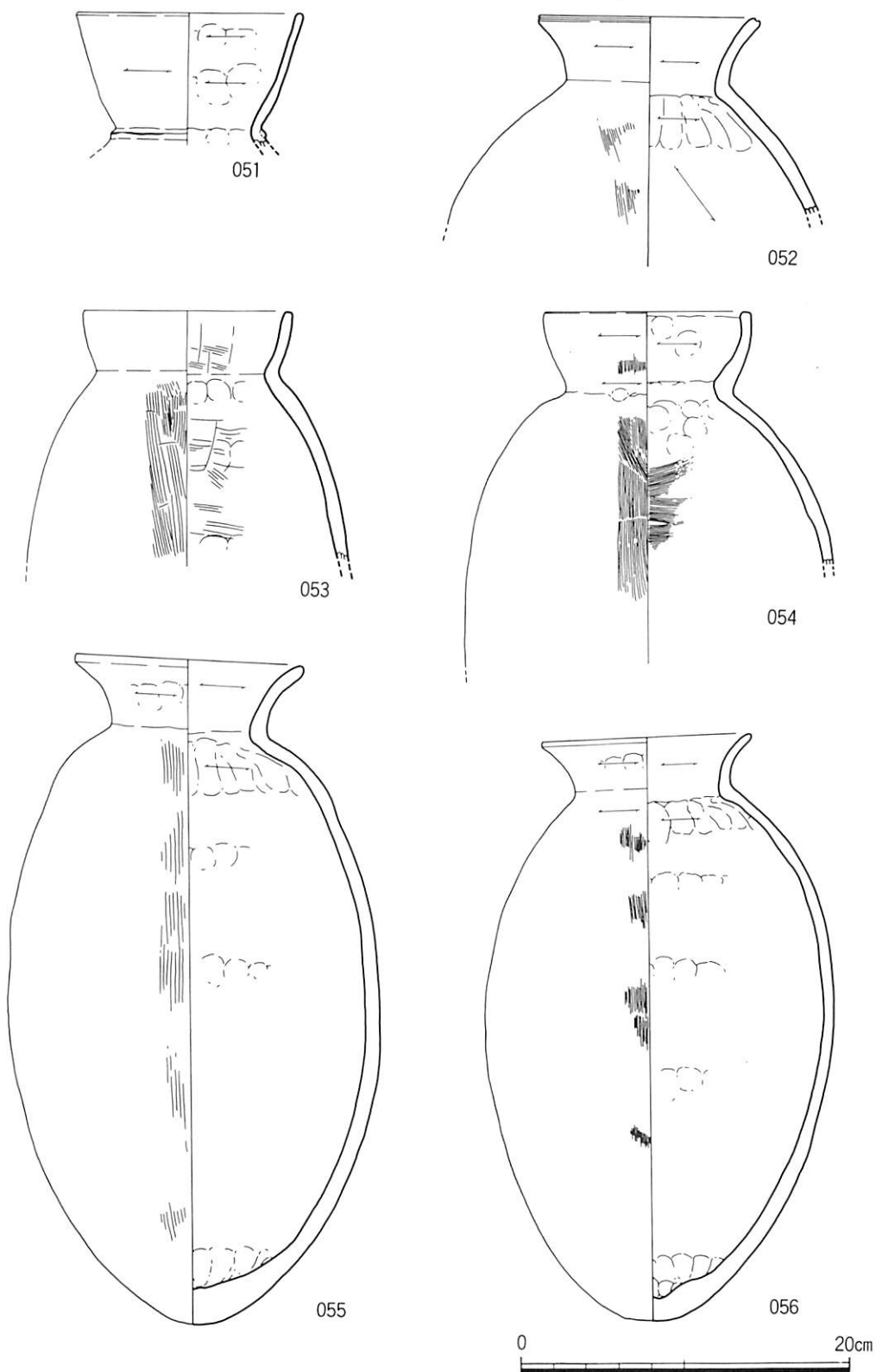
くびれ気味に内湾する胴上半から口縁部は大きく外反し、口縁部外面はていねいなヨコナデ調整により仕上げられる。このため胴上半と口縁部の境には段が形成され、内面の同部位にも比較的明瞭な稜線が認められる。胴部はあまり張らず、直線的に底部にいたる。

II類 胴部のほぼ中位に最大径をもち、口径が胴部最大径と同程度あるいは口径が胴部最大径を上回る。

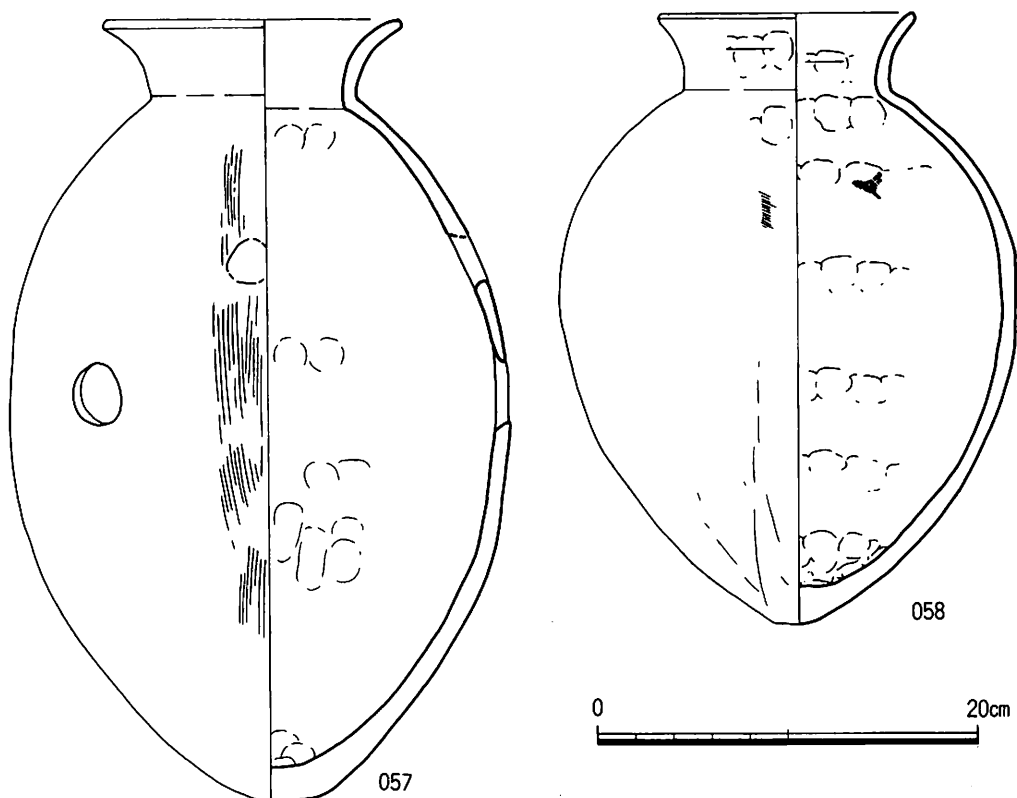
III類 基本的な形状はII類に類似し、口縁直下に一条の三角突帯を貼付する。

IV類 胴部のほぼ中位に最大径をもち、胴部最大径が口径を上回る。

これらの形態を有する甕形土器がいかなる型式をもって存在していたのかについては後章において検討する。



第21図 SD01 出土遺物 ⑬ (1/4)



第22図 SD01 出土遺物 ⑭ (1/4)

壺形土器 (第16図～第23図)

壺形土器には複合口縁部をもつ所謂「安国寺式」の系統に連なるもの（Ⅰ類）と長胴卵形を呈する胴部に短く外反、ないしは内湾気味に外方へ開くもの（Ⅱ類）、球形をした胴部に外方へ大きく開く短口縁をもつもの（Ⅲ類）の3つに大別することができる。

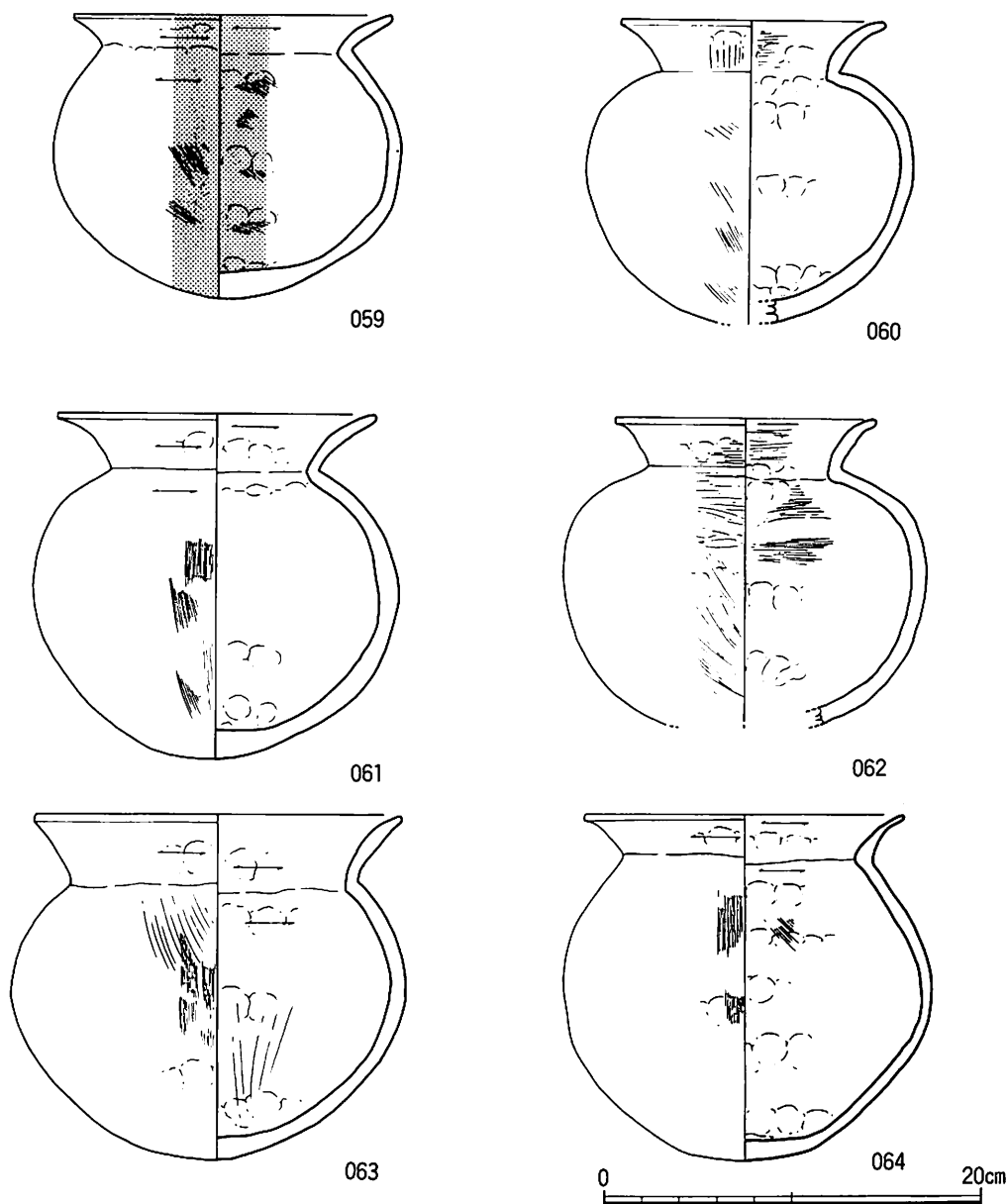
壺Ⅰ類には頸部に一条の三角突帯または刻み目突帯を、胴部に2～3条の三角突帯を巡らすものが多く（Ⅰa類）、胴部に突帯を有しないもの（Ⅰb類）の出土点数を大きく上回っている。同類（Ⅰa類）の大型壺には頸部の突帯に付帯して勾玉状の浮文を貼付する例が多い。

鉢形土器 (第24・25・28図)

基本的には底部の形態により3種に分類することができる。安定した平底を呈するもの（Ⅰ類）と外方へ張り出す脚様の底部を有するもの（Ⅱ類）。丸底を呈し底部から口縁部へ直線的に開くもの（Ⅲ類）があり、068のように全面に赤色塗彩を施したものも少なからず認められる。

高坏形土器 (第26図)

高坏の出土量は他の器種に比して少ない。坏部は段を有し外方へ大きく展開するもの(082・083・084)がみられ、脚部では段をもたずストレートに脚裾部にいたるものが出土している。脚には例外なく円形の透かし穴が穿孔され、赤色顔料により塗彩される。



第23図 SD01 出土遺物 ⑮ (1/4)

甑形土器 (第27図)

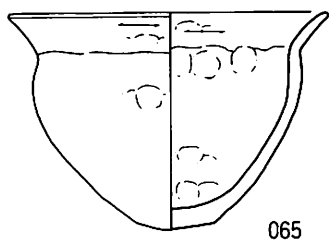
甑形土器が比較的数量多く確認できることも、本溝出土資料の特徴のひとつになっている。器高12～15cm程度のものが主体を占め、口縁部の様態により以下の3類に分類することができる。

a類-口縁部分に橋状の把手を有するもの(085)

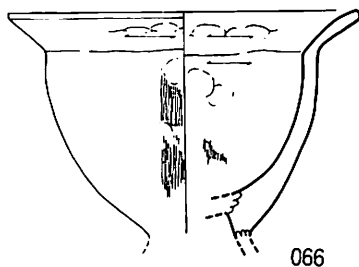
b類-穿孔を有するもの(086～090・094)

c類-ヨコナデなどで仕上げ、なんら加工・造形を加えないもの(091)

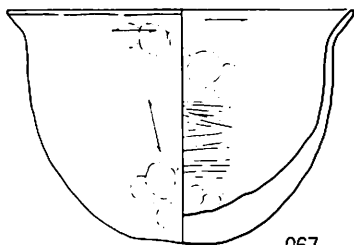
底部の穿孔はすべて焼成前に行われている。



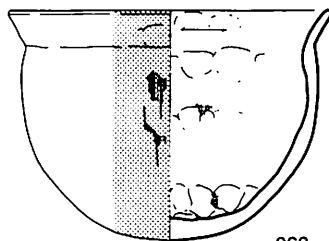
065



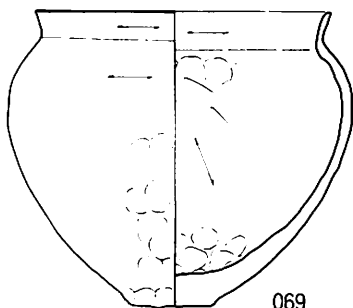
066



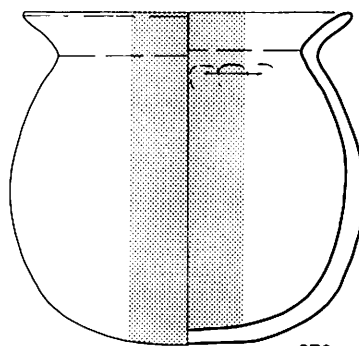
067



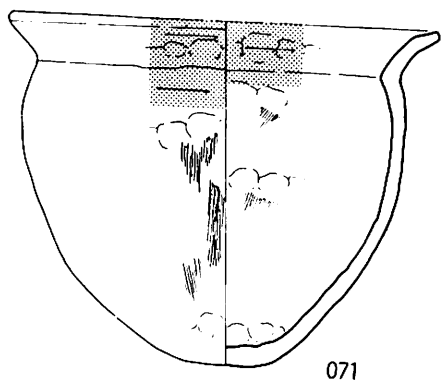
068



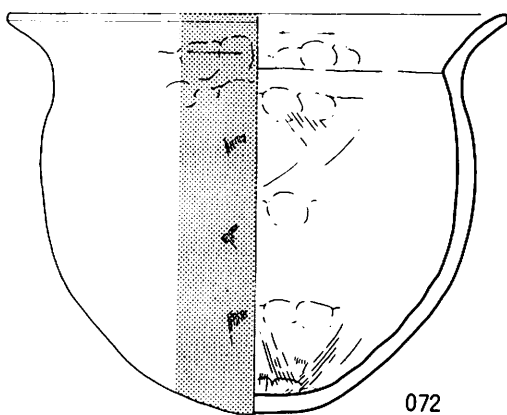
069



070



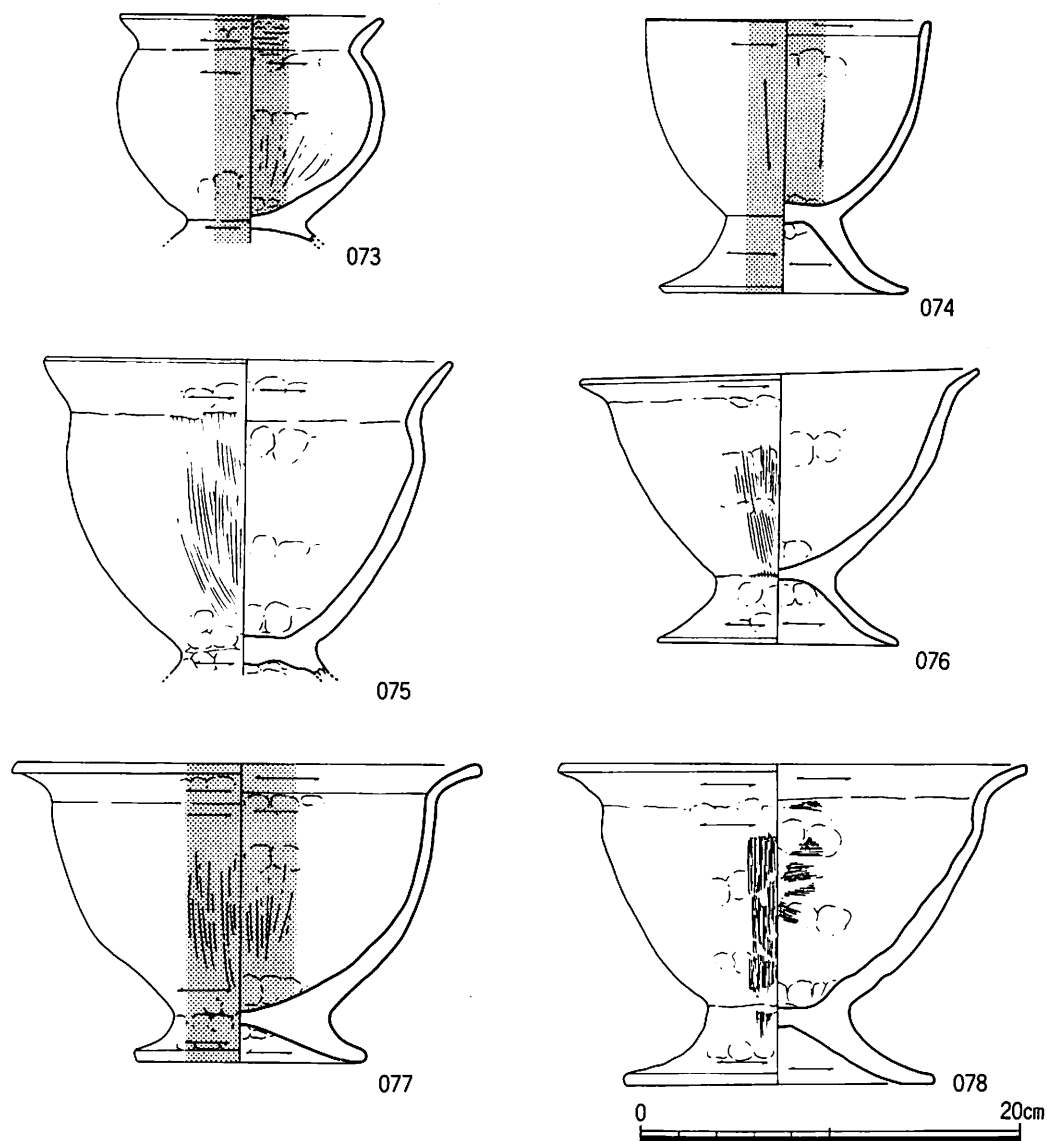
071



072



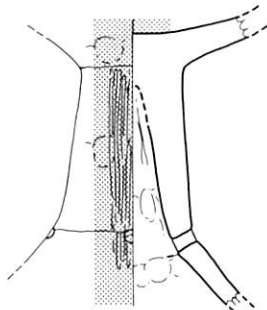
第24図 SD01 出土遺物 ⑬ (1/4)



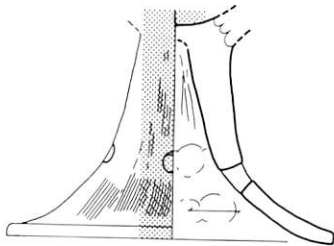
第25図 SD01 出土遺物 ⑪ (1/4)

ミニチュア土器 (第28図)

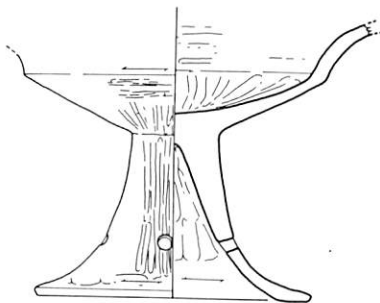
鉢・甕・壺などを模倣したとおもわれるミニチュア土器が出土している。101は複合口縁を有する壺形土器を模したミニチュア土器である。口縁端部、胴下半は欠損する。096は甕形土器を模倣したと思われるミニチュア土器である。口縁端部を僅かに欠くがほぼ完存する。底部は不明瞭ながら平底を呈し、当該時期の土器の特徴をよく表現している。



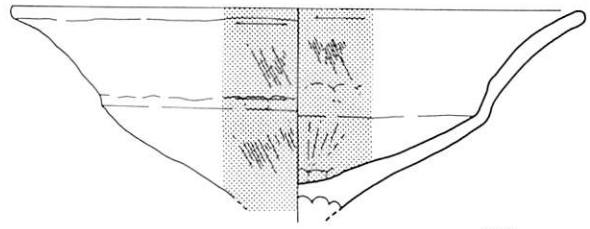
079



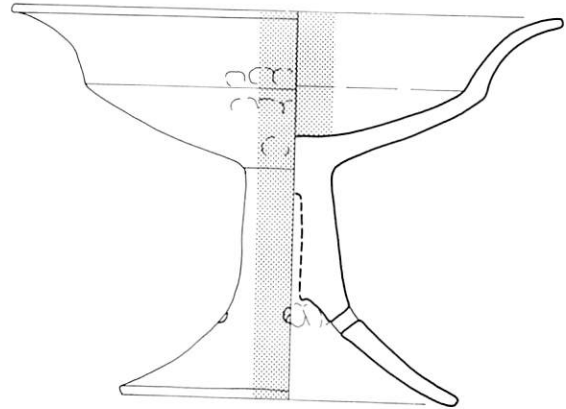
080



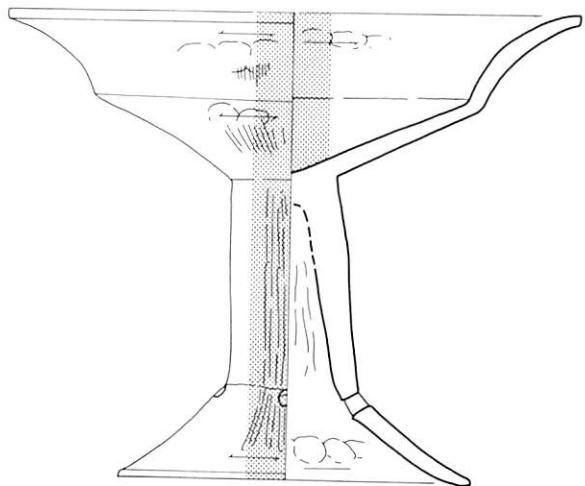
081



082



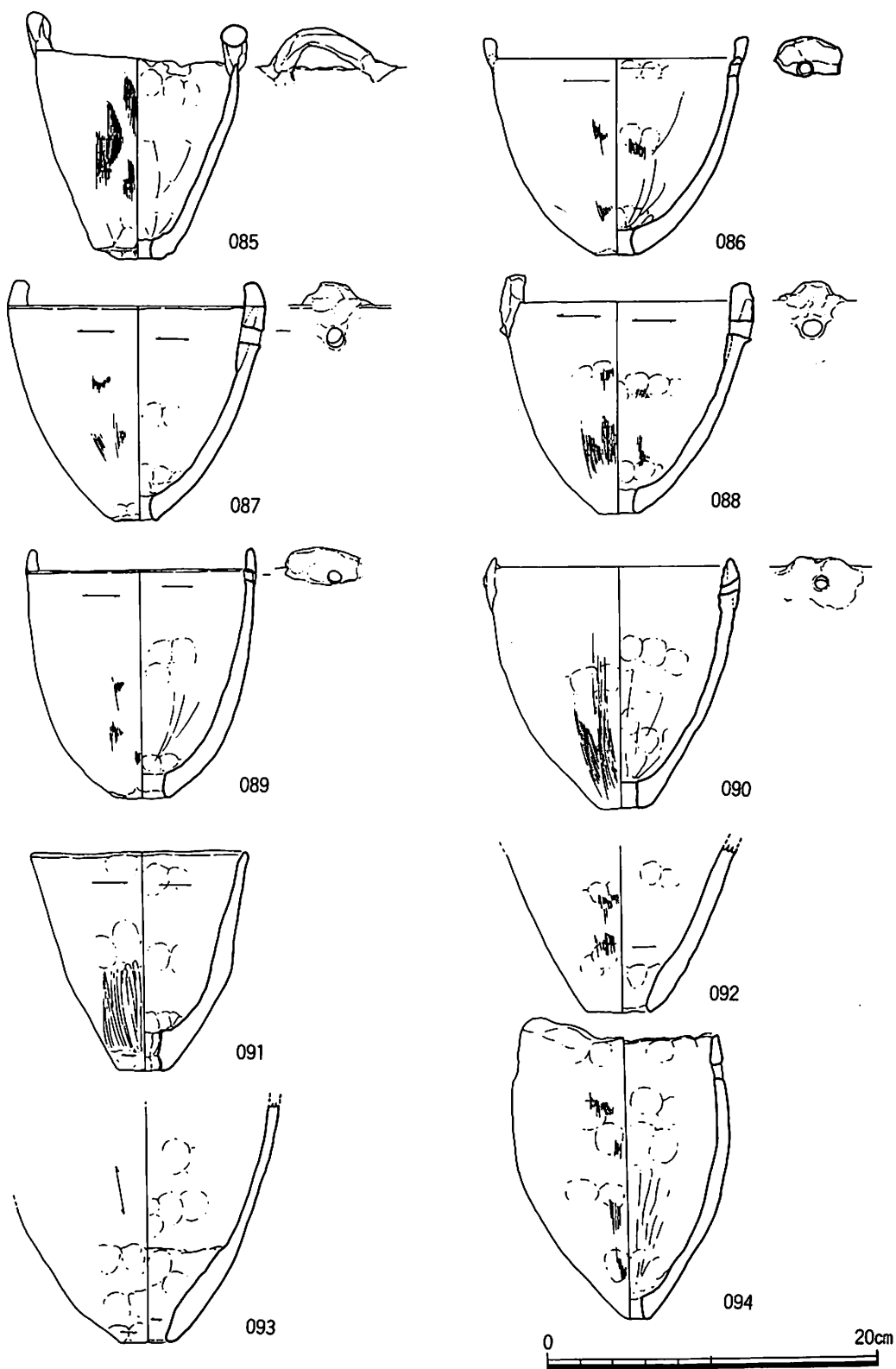
083



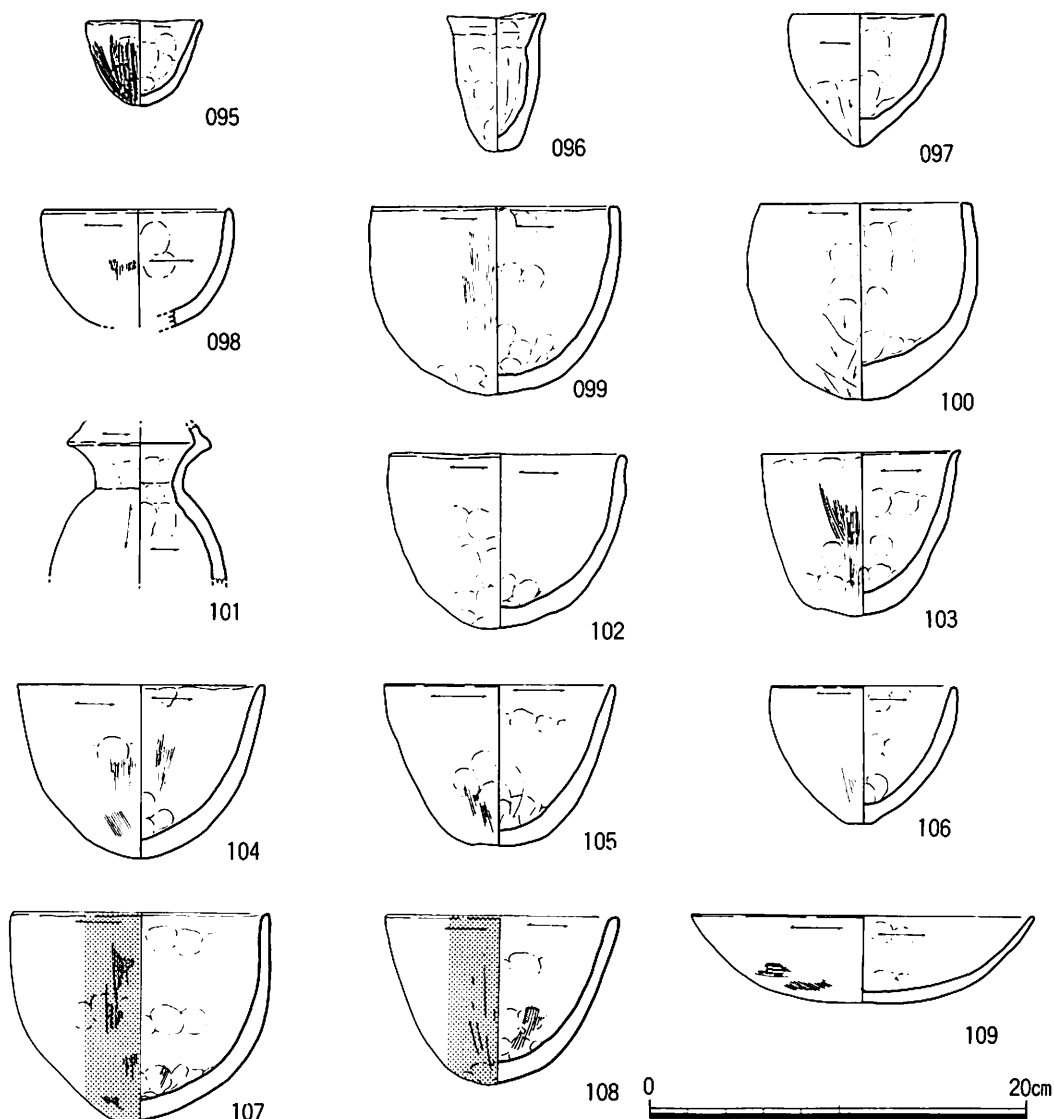
084



第26図 SD01 出土遺物 ⑮ (1/4)



第27圖 SD01 出土遺物 ⑬ (1/4)



第28図 SD01 出土遺物 ㊹ (1/4)

2号溝 (SD02)

今回の調査区内の南角から北方向へ延び、両端はさらに調査区外へ展開する。検出面での幅4.28m、底面幅2.96m、深さ0.8mを測り、断面形は整美な梯形を呈する。

第29図には土層断面図を示している。2号溝は1号井戸 (SE01) と切り合い関係を有し、1号井戸→2号溝の構築順位を知ることができる。溝埋土は大きく3層に大別でき、上部層から順に上層・中層・下層として遺物の取り上げをおこなった。また、溝底面に相当する部分には屑状に鉄分の固着がみられ、溝機能時に滞水のあった可能性を示唆している。護岸施設等は確認されていない。検出長23mを測り、溝内部からは弥生土器片、完存品を含む土師器、輸入陶磁器片、陶器片、五輪塔片の出土が認められた。

土師質土器（第30図）

溝内堆積土層上層～下層の各層から完存品を含む数点の土師質土器の出土が認められる。法量の上では坏と小皿に対応する大小二種がみられ、それぞれに分類可能な数形態の内容を有している。溝底面に密着状態で出土した数点を除き、大部分は溝埋土中において散発的な出土状況を示す。溝底面から出土する土師質土器はいずれも西壁に近接する地点において確認されている。

中世陶器（第31図）

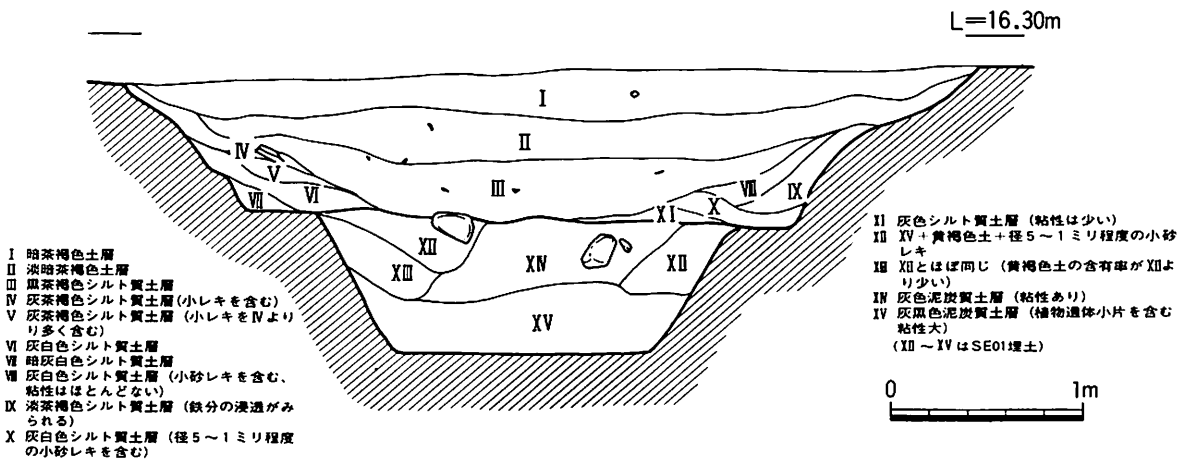
137は溝内堆積土層の中層内から出土した中世陶器である。僅かに一部を欠くが、ほぼ完形品に復元することができた。内・外面とも淡黄褐色を呈し、器表面には輪積痕が明瞭に残る。また、外面の胴下部には格子目様の叩き痕が認められる。口径25.6cm、底径18.0cm、器高32.1cmを測る。当遺物の生産地等を含めた詳細については他に類例を求めることができず現段階では不明である。

土 錘（第32図）

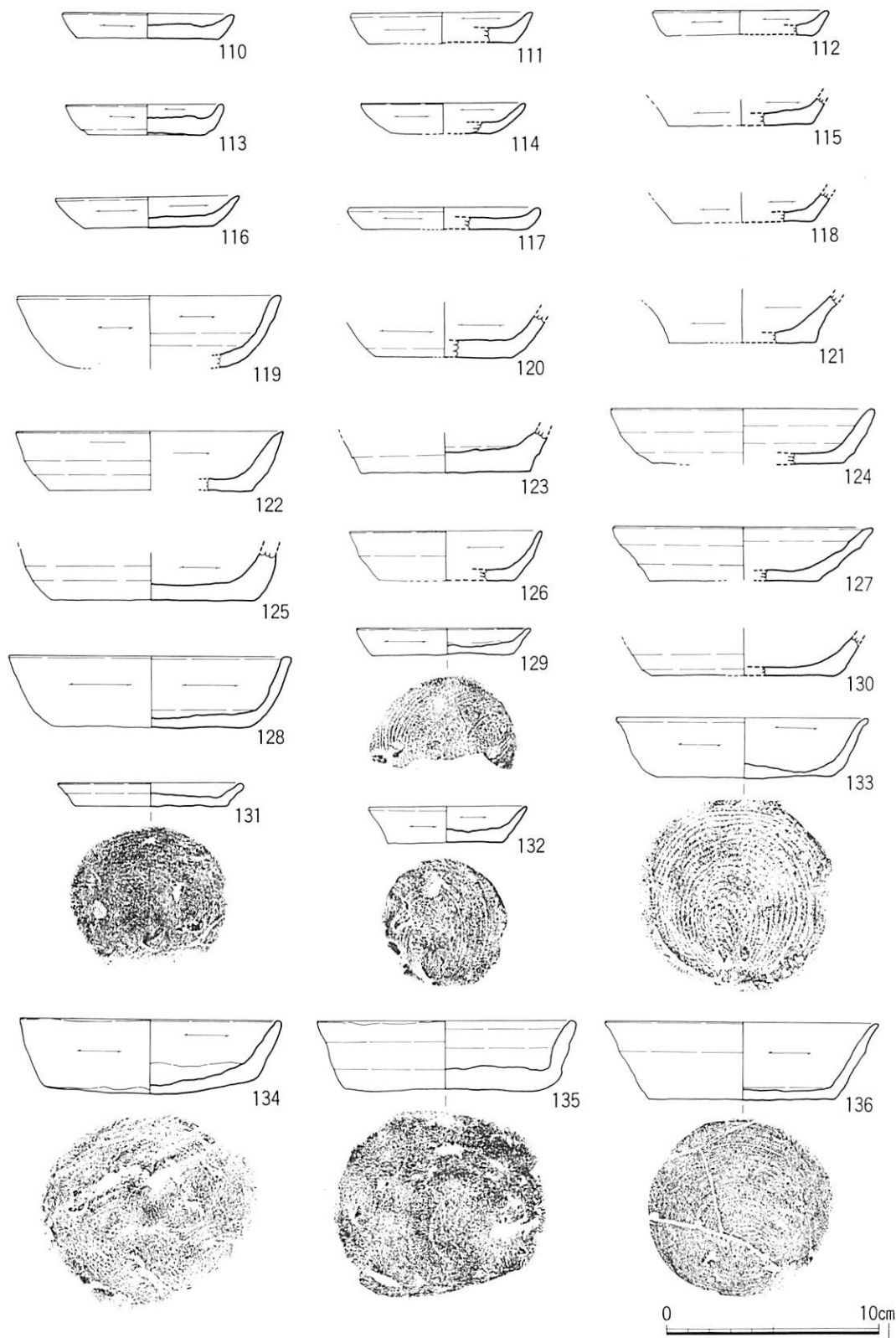
138は2号溝（SD02）埋土最下層上部から出土した土錘である。製作に際しては精製土を使用し、胎土内には黒ウンモの微粒を少量含む。淡茶褐色を呈し、現存重量14gを測る。

輸入陶磁器（第33図）

輸入陶磁器は土師質土器同様各層より散発的に出土する。出土量は概して少ない。輸入陶磁器は6点を図化し、掲載した。143はいわゆる玉縁状の口縁を呈する白磁碗の口縁部である。144は龍泉窯系の青磁碗である。器外壁に鑄入りの複弁を彫刻する。145は青磁平底皿の底部破片である。内面見込み部分に櫛描を主体とする文様を施す。同安窯系のものと思われる。



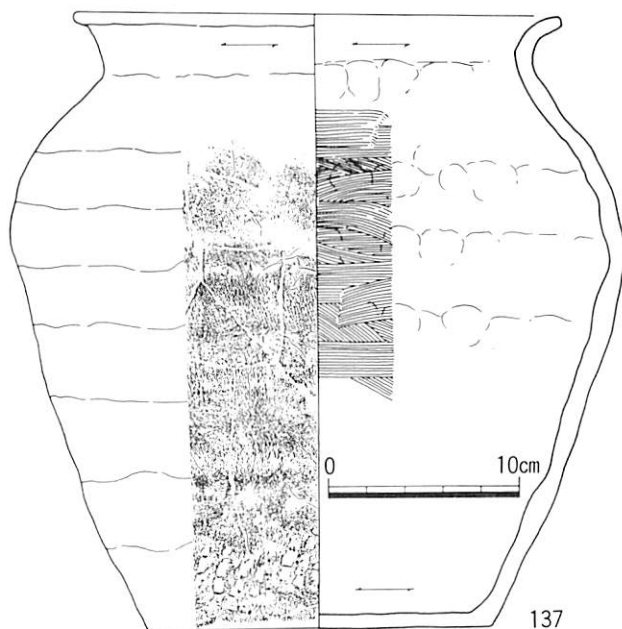
第29図 SD02・SE01土層断面実測図 (1/40)



第30図 SD 02 出土遺物 ① (1/3)

五輪塔 (第34図)

五輪塔片は4点確認した。すなわち、水輪3点、火輪1点であり、すべて凝灰岩製である。また、水輪3点のうちの1点(149)には四面に梵字が刻まれる。Aは釈迦如来を示す梵字「バク」、Bは金剛界大日如来を示す梵字「バン」、Cは風天を表す梵字「パー」、Dは水天を示す梵字「パ」^{註3)}と思われる。すべて溝内堆積土・中層から出土している。

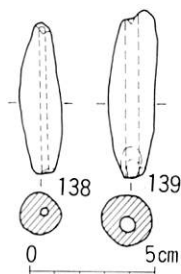


第31図 SD 02出土遺物 ② (1/4)

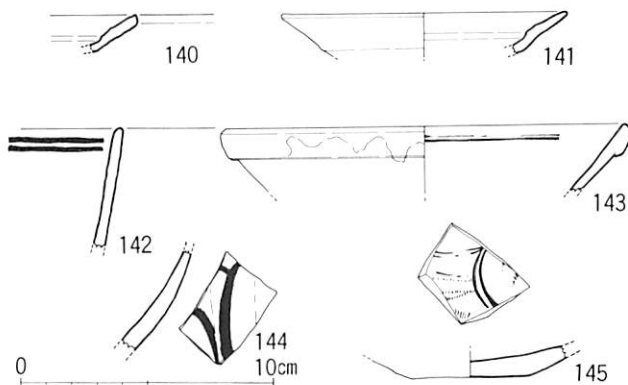
註1) 「多武尾遺跡 調査概報」 大分市教育委員会 1982

註2) 帰属時期を含めた分類検討は後章においておこなう。

註3) 利光 明氏の教示による。



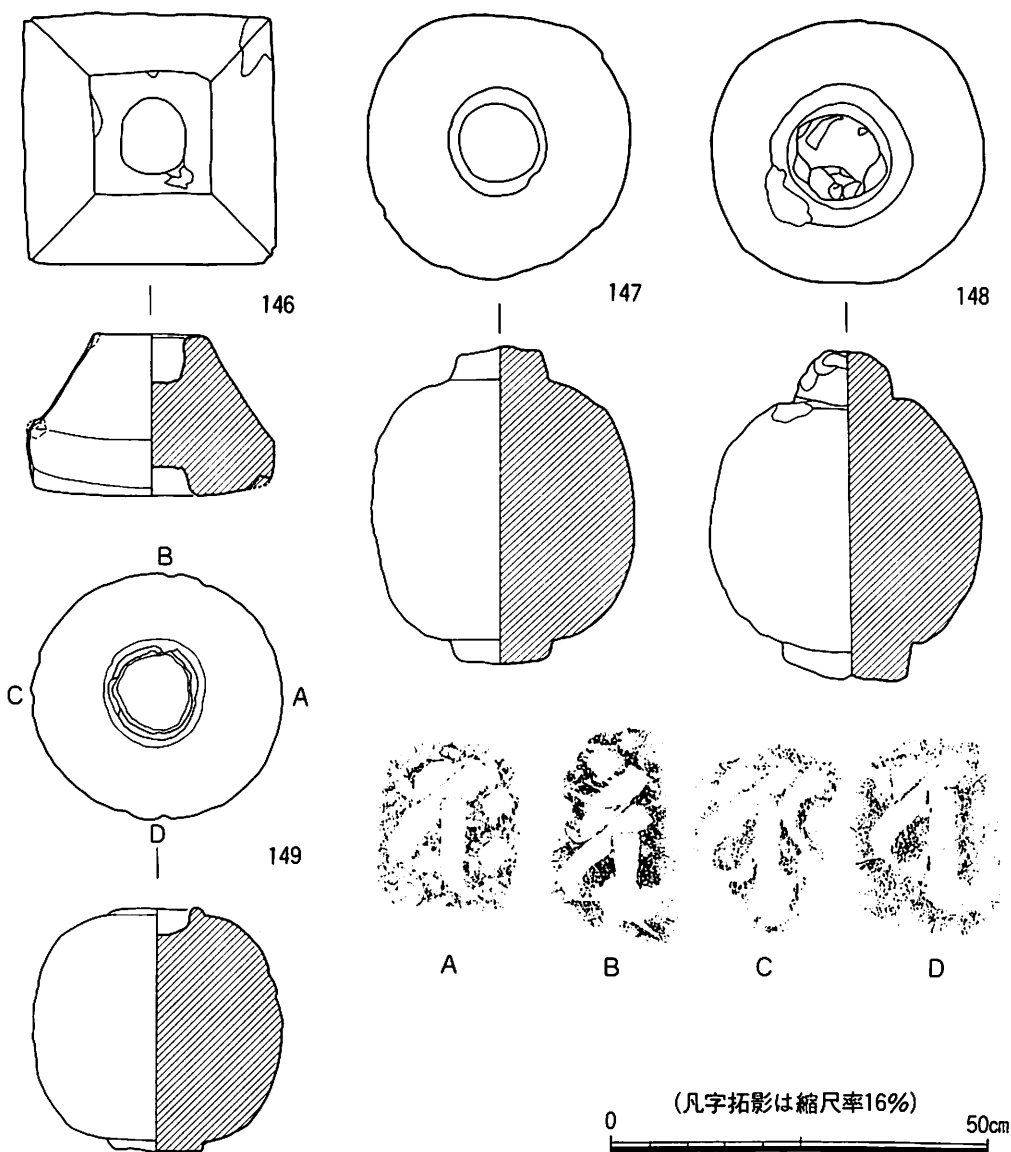
第32図 SD 02出土遺物 ③ (1/3)



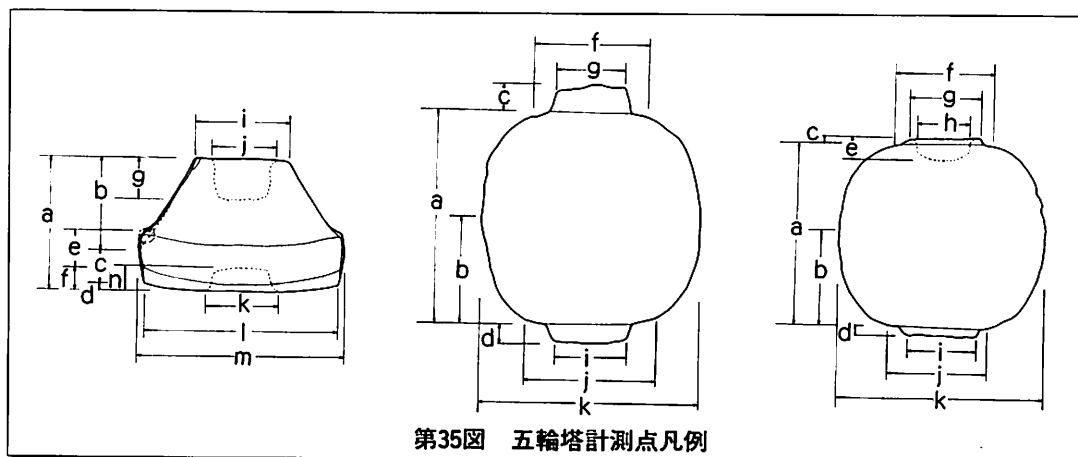
第33図 SD 02出土遺物 ④ (1/3)

表2 五輪塔法量表

図版 番号	法 量 (単位cm)													種 別	石 質	備 考
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m			
146	21.2	12.8	5.2	1.2	5.0	3.6	5.6	4.0	14.4	10.4	11.6	30.8	33.2	火輪	凝灰岩	
147	34.0	17.2	4.0	3.2	—	18.0	10.8	—	11.2	20.8	34.8	—	—	水輪	凝灰岩	
148	32.4	15.6	6.8	3.6	—	18.0	9.2	—	16.4	22.0	35.6	—	—	水輪	凝灰岩	
149	29.2	15.2	0.8	1.6	3.6	15.6	11.2	8.4	10.8	16.0	32.8	—	—	水輪	凝灰岩	梵 字



第34図 SD02出土遺物 ⑤ (1/10)



第35図 五輪塔計測点凡例

3号溝 (SD03)

調査区北側において約11.5mにわたり検出している。西側半分は調査区外に相当するため今回の調査結果からはその規模を推定することは難しいが、試掘調査時のデータによってその規模を復元すると、幅0.4m、深さ0.07mを測る。溝内部には拳大の礫を少量内包する。

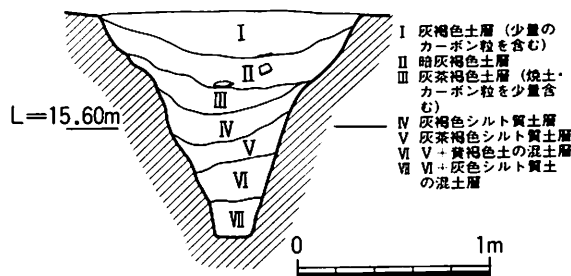
出土遺物は概して少ない。須恵器、土師器の小片が出土している。また、土師質の高台を有する土器微細片が1点出土しており、本溝の帰属年代が歴史時代以降であることを示している。

4号溝 (SD04)

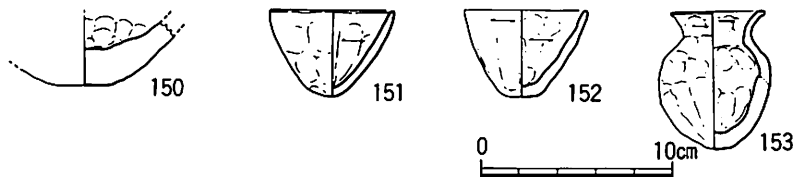
調査区のほぼ中央を東西方向に横走る溝状遺構である。東側部分は2号溝により切られている。検出面での幅1.52m、深さ1.3mを測り溝断面形は鋭角なV字形を呈している。

遺物は第IV層・灰褐色シルト質土層上に比較的集中して破片資料が出土する他、第IV層中に少量認められる程度である。図化可能な遺物は少なく、僅かに6点を図化し掲載した。150はかすかに平坦面を残す土器底部破片である。現状では壺、甕いずれのものであるかは確定しがたい。第IV層中から出土した。151～153は所謂ミニチュア土器である。

153は壺形土器を模倣したもの^{と推定され、}底部は不明瞭ながら、平底を意識して製作されている。



第36図 SD04土層断面実測図 (1/40)



第37図 SD04出土遺物 (1/4)

(2) 土壌 (SK)

今回の調査においては、18基の土壌を確認した。いずれも遺存状況が悪く、内包する遺物も小片のみの出土であり、各土壌の帰属年代、性格等を示すような状況は認められない。以下に主要な土壌の概要と出土遺物について記述する。

1号土壌 (SK01)

C1区、2号住居跡検出面において確認した。平面形は径0.44m測る円形を呈し、現存深度0.12mを有する。埋土は淡黒色土層と淡茶褐色土層の上下2層に分層することができ、埋土内より甕底部破片(甕底部C類)^{（注1）}1点と壺胴部突帯片1点が出土している。いずれも摩滅が著しい。

2号土壌 (SK02)

C1区において約1/4を検出した。1号土壌、2号住居跡と切り合い関係を有する。構築順位は2

号住居跡→2号土壌→1号土壌である。現存深度約0.1mを測り、淡茶褐色土を埋土とする。

出土遺物にはⅠa類壺形土器の肩部破片と3片の弥生土器破片（部位不明）が出土している。いずれも破片摩滅が著しい。

4号土壌（SK04）

C2区において確認した楕円型プランを呈する土壌である。長軸径0.89mを測り現存深度0.12mを有する。埋土は第Ⅰ層黄茶褐色土と灰褐色土の混土層、第Ⅱ層暗茶褐色土層の2つの層に分層することができる。

埋土内から壺底部破片（壺底部^{註2)}D類）の他、3点の弥生土器破片が出土している。

5号土壌（SK05）

C3区において検出した長楕円形を呈する土壌である。埋土は淡茶褐色土層と暗褐色土層の上下2層からなる。埋土内より摩滅した弥生土器小片2点が出土している。

6号土壌（SK06）

D2区において検出した楕円形を呈する土壌である。長軸の長さ0.7mを測る。埋土は淡茶褐色土層、暗褐色土層の上下2層からなる。

埋土上層から甕底部破片（甕底部^{註3)}A類）1点の他、2点の弥生土器破片が出土している。いずれも摩滅が著しい。

7号土壌（SK07）

D2区、1号溝検出面上面において確認した土壌である。現存深度約0.1mを測る。切り合い関係から1号溝より後出する事実を捕捉することができる。

土壌埋土内より複合口縁壺の口縁部小破片の他、10片程度の弥生土器小片が出土している。

8号土壌（SK08）

長径1.3m、短径0.85mを測る不定円形プランを呈する土壌である。E4区において検出した。現存深度約0.05mを測る。淡茶褐色土層を埋土とする。

遺物の出土は認められない。

9号土壌（SK09）

約0.2mの深度を有する円形土壌である。G4区において検出した。淡黒褐色土層を埋土とする。

埋土中からは部位の不明な弥生土器小破片9片が出土している。いずれも摩滅が著しい。

註1) 第Ⅳ章参照

註2) 第Ⅳ章参照

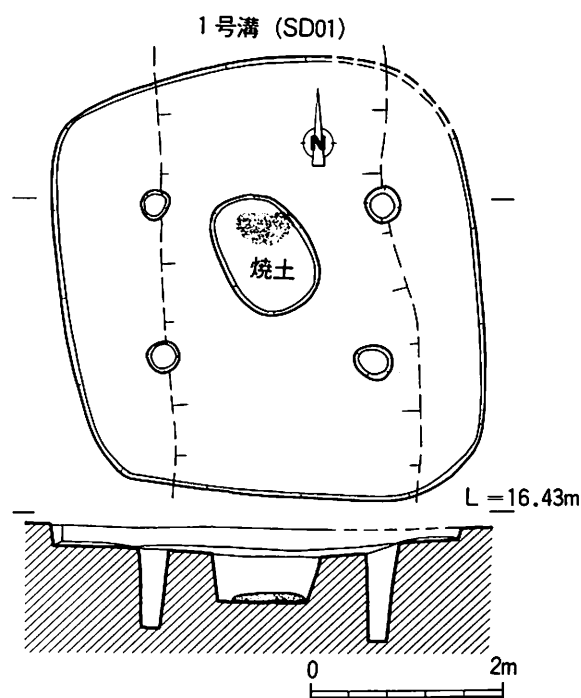
註3) 第Ⅳ章参照

(3) 住居跡 (SH)

8軒の竪穴住居跡を検出した。

1号住居跡 (SH01)

C2区において確認。4 m×4.21 m、壁高0.12 mの規模を有し、平面プランは隅丸方形を呈する。床面中央部に径1.28 mの土壇を配し土壇内北側には焼土塊を確認することができる。本住居跡は前述の1号溝 (SD01) の埋絶後に構築されており、住居床面に溝埋土が露呈する。支柱は4本認められ、壁溝等の施設は確認されない。また、1号溝埋土に相当する住居床部分は僅かに窪んでおり、溝埋没後、それほど時を経ぬ段階で本住居跡が構築されたことを物語っている。

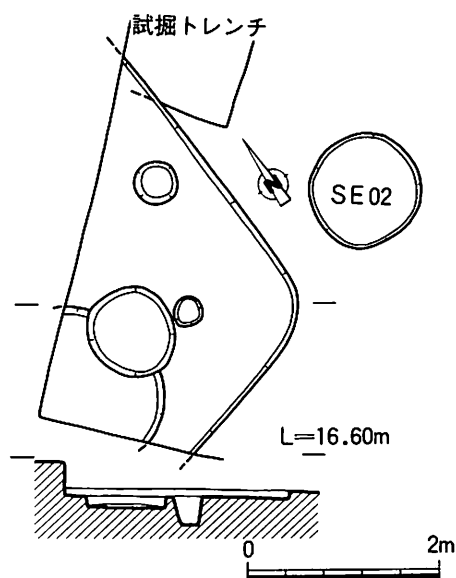


第38図 SH01平面・断面実測図 (1/80)

住居埋土内に少量の土器破片を内包する。154は甕の口縁部である。内・外面とも淡黄褐色を呈し、胎土内には細砂粒を包含する。163は甕の底部と思われる。粘土の貼りつけによる「ハ」の字状にひらいた上げ底を呈する。外面・淡赤褐色、内面・淡灰黒色を呈する。推定底径の約1/2が遺存する。167は壺の底部破片である。立ち上がりの稜線が不明瞭な不安定な平底を呈する。168は163と同様粘土貼りつけによる上げ底状を呈する底部である。外面・赤褐色、内面・淡黄褐色を呈する。172はほぼ完形に復元できた甕形土器である。外面・淡赤褐色、内面・淡灰褐色を呈する。器外面には帯状に煤の付着が認められる。この土器は既往の編年観に従えば、豊後編年の第Ⅲ期 (後期後葉) に相当し、当住居跡の帰属年代もほぼこの時期と考えられよう。173は砂岩製の砥石である。欠損部以外のすべての面に使用痕が認められる。

2号住居跡 (SH02)

1号住居跡の西側、C1区において住居コーナーを検出している。平面プランは方形を呈すると考えられ、現状での壁高0.07mを測る。コーナー付近に支柱と考えられる約30cmの深さを有する柱穴を検出しており、4本柱であったと推定さ



第39図 SH02平面・断面実測図 (1/80)

れる。SK01・SK02と切り合い関係をもち、当住居埋没後に両者が掘り込まれている。

住居埋土中からは土器細片が少量出土しているが、図化可能なものはなく、住居の帰属時期の特定はおこなえない。

3号住居跡 (SH03)

C3区において住居コーナー部分を確認。大部分は2号溝により切られており消失している。主柱穴の1つと思われる柱穴を検出しており、柱穴の検出位置から4本柱であったと推定される。現状での壁高0.09mを測り、遺存状況は良好とは言えない。

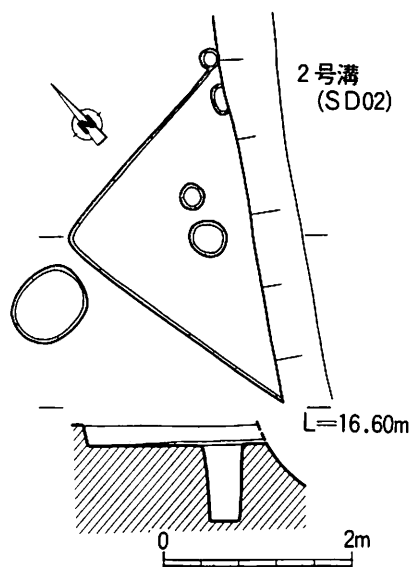
土器の微細片が少量出土しているが、図化可能な遺物の出土はない。

4号住居跡 (SH04)

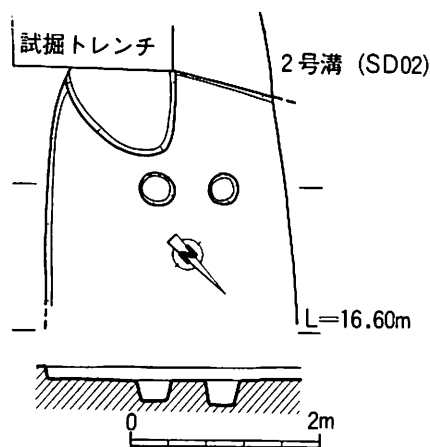
E6区において一部分を検出。西側部分を2号溝によって切られている。住居の約1/4について調査をおこなったが出土遺物の量は概して少なく厳密な時期の特定は難しい。床面において柱穴2を確認している。

5号住居跡 (SH05)

調査区のほぼ中央に位置し、北側部分は4号溝によって切られている。壁高0.09mを測り、遺存状態は悪い。主柱と考えられる柱穴2を確認しており、これらの検出位置から主柱は4本であったと推定される。柱間2.6mを測り、南側に配置されるであろう柱穴間に小土塊を検出した。大部分は4号溝により切られているため規模等の詳細については不明であるが、深さ0.14mを測り内部には灰層を認めることができる。住居のほぼ中央床面において若干量の遺物が出土した。156は甕形土器の口縁部片である。内・外面とも淡黄褐色を呈する。ヘラケズリなどの新出の調整要素はみられないものの、他遺構出土土器に比して器壁が薄く、趣を異にする。164・165は甕の底部と考えられる。両方とも粘土の貼りつけにより底部を創出しているが、164は上げ底状に、165は平底に仕上げている。いずれの個体もローリングを受けている。166は低平な脚を貼付した底部破片である。鉢形土器の底部と思われる。169は壺形土器の底部である。先述の1号溝出土土器分類の壺Ⅲ類の底部に類似する。外面は赤色の顔料により塗彩され、内面は淡黄褐色を呈する。171は甕形土器の底部破片である。内・外面ともに淡灰褐色を呈する。5号住居跡には他に実測



第40図 SH 03平面・断面実測図 (1/80)

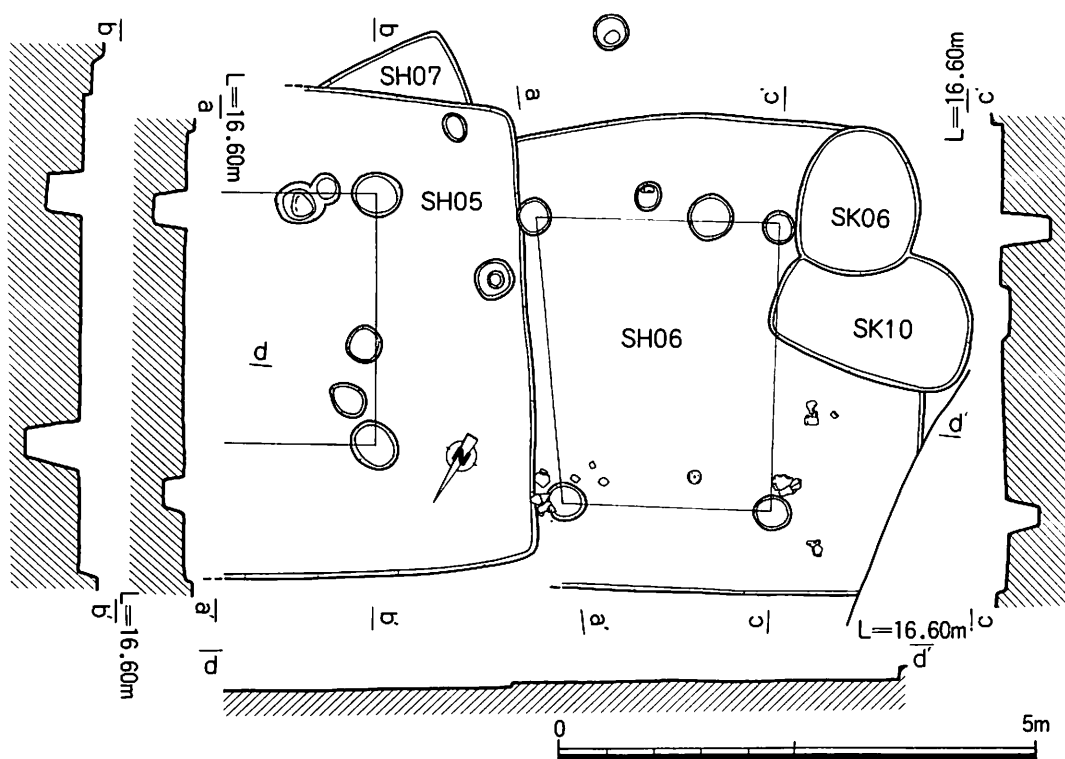


第41図 SH 04平面・断面実測図 (1/80)

は不可能であったが、器壁の非常に薄い丸底の土器破片の出土もみられ、多分に新出の要素を具備している。本住居跡の帰属年代は出土遺物に時期比定の決め手がなく特定することはできないがその諸相、ならびに切り合い関係を有する6号住居跡との関連から現行においては弥生時代後期終末～古墳時代初頭の時期幅の中で理解しておきたい。

6号住居跡 (SH06)

5号住居跡の西側に位置し、東側壁面を5号住居跡により切られている。主柱は4本であり、床面中央北寄りに炉跡を認知することができる。床面直上において、甕、甔等の出土がみられ、所属時期の特定に際し有力な資料となる。西側角を1号溝によって切られる。155は甕形土器の口縁部である。内面には比較的明瞭な稜線を有し、鋭角に「く」字状に外方へ展開する口縁部を有する。内・外面とも淡赤褐色を呈し、口縁端部を丸くおさめる。157・159は甕形土器の口縁部である。いずれも肩が張り、1号溝出土土器中大きな割合を占める長胴形を呈する甕形土器とは形態上大きく異なる。調整に関してもヘラケズリなどの新来の技術導入は認知されないものの、器壁は他の個体に比して薄く仕上げられる。157・159とも内・外面とも淡黄褐色を呈する。160は甕形土器の口縁部破片である。内・外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には石英、黒ウンモ粒を内包する。161は高坏の脚部破片である。約1/2遺存しており、内・外面とも淡黄褐色を呈している。170は甔形土器である。口径13cm、器高9.4cm、穿孔径1.3cmを測る完形品である。穿孔は焼成前におこなわれており、



第42図 SH 05・06・07平面・断面実測図 (1/80)

内底面にはへら状工具による調整痕が放射状に残る。住居床面直上に倒立状態で出土した。

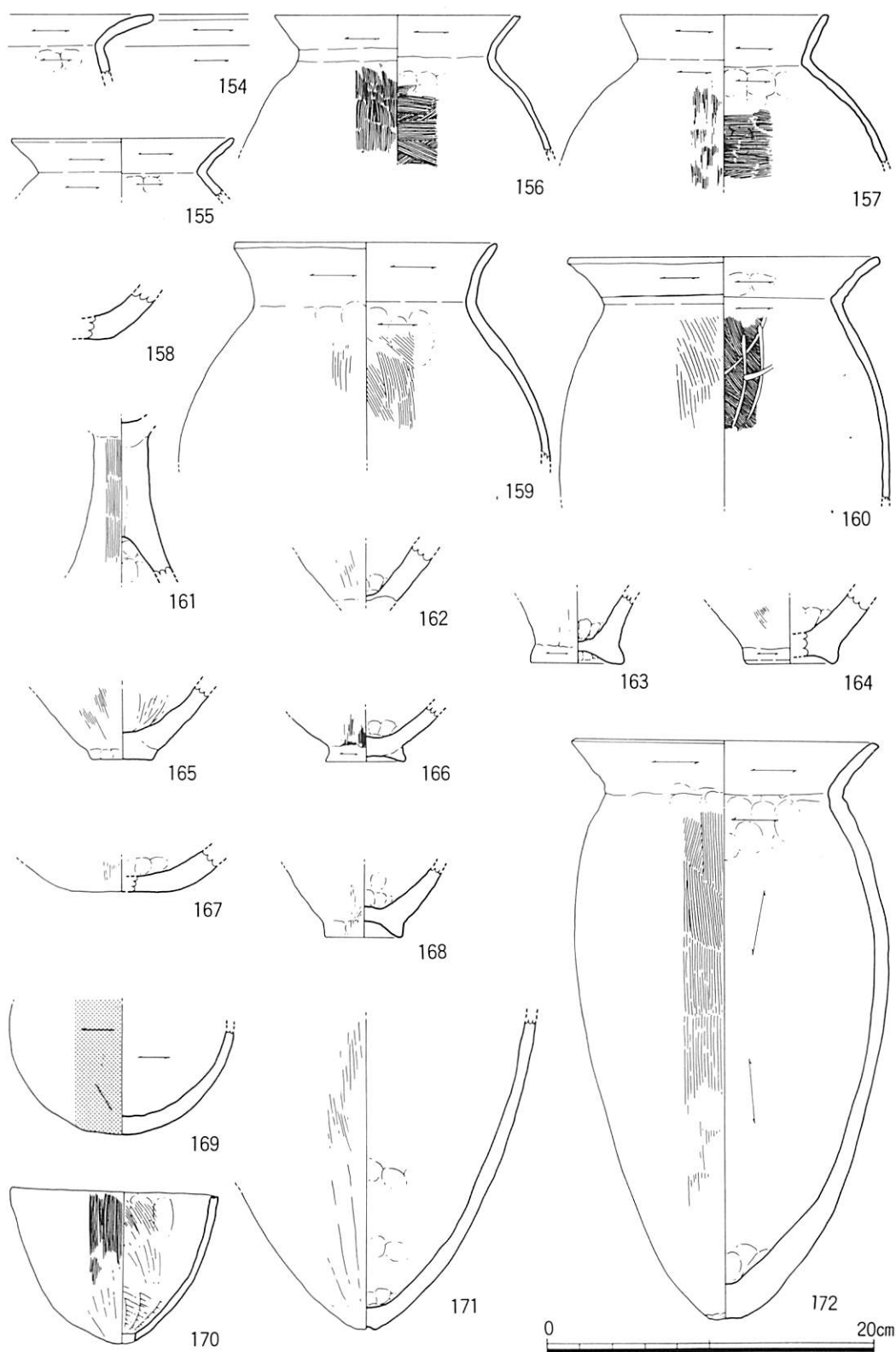
以上が出土遺物の概要であるが、157・159に象徴されるように甕形土器の形態的特徴に新出の要素を散見することができ、明らかに1号溝に後出する時期の所産と判断できる。帰属時期の厳密な特定は資料の制約から困難であるが、以上の状況等を勘案すれば、弥生時代後期終末期～古墳時代初頭の可能性を指摘できよう。

7号住居跡 (SH07)

D3区に位置する。今回検出した住居跡中で最も遺存状況の良くない住居跡であり、僅かに住居コーナーの一部を確認できる程度である。壁高0.04mを測り、遺物の出土も殆ど認められない。

8号住居跡 (SH08)

4号溝の南側に位置する (E4区)。壁高0.05mを測る小型の住居跡である。床面において確認できる柱穴の配置から支柱は4本であったと思われる。炉跡、壁溝、土壇等の住居付帯施設は確認できない。

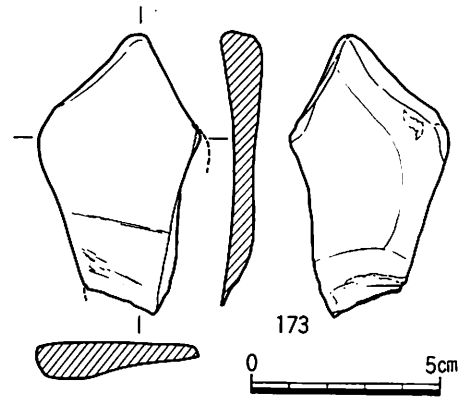


第43図 住居跡(SH)出土遺物 ① (1/4)

(4) 井戸跡

1号井戸 (SE01)

0.8m×1.08+αmを測る方形の掘り方を有す。約50%について調査を実施しており底面まで完掘した。土層の観察の結果、埋土の両端に土層の乱れが確認されることから、井戸側等の施設の存在を想起することができ、溝廃絶時、あるいは2号溝構築時期に引き抜かれたものと推定される。埋土内からは土師器小片が少量出土した他、12～13世紀に比定される磁器小片1点が出土しており、2号溝の築造時期を当該期以前に帰属することはできないことを示唆している。



第44図 住居跡(SH)出土遺物 ② (1/2)

2号井戸 (SE02)

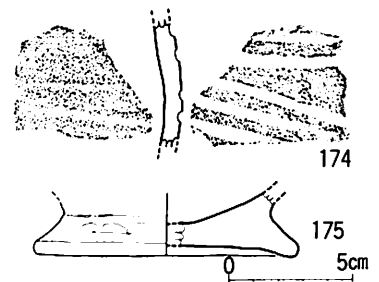
C1区において検出した井戸跡である。調査開始時、SK03としていたものであるが、調査の進展に伴い井戸跡と判明したため、呼称を変更した。平面形は径約0.6mを測り円形をなす。検出面からおおよそ1.5m掘り下げたが底面に到達していない。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、地中から夥しい量の湧水が認められる。埋土内からは著しい摩滅痕をもつ弥生土器小片(部位不明)、内・外面にタタキ目痕をもつ須恵器壺胴部の小破片の他、糸切り痕を底部に有する土師質土器(114)が1点出土している。この土師質土器の形態・法量とも2号溝出土土師器小皿分類のC類に類似しており、本井戸跡は2号溝と大差ない時期に機能していた可能性を指摘できよう。

註1) 第IV章参照

(5) その他の遺物

上記の遺構に帰属する遺物以外に、1号溝埋土内から2点の縄文土器が出土している。

174は内・外面とも淡黄褐色を呈する縄文土器の胴部破片である。胎土中には角閃石・細砂粒を多量に含む。断面U字形の工具によって施紋された沈線4条を確認することができる。縄文時代後期の所産か。175は深鉢形土器の底部である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土中には細砂粒を多量に包含する。底部の形態的な特徴から縄文晩期の所産になるものと判断される。



第45図 縄文土器実測図 (1/3)

表3 遺物観察表①

遺物 番号	印図 番号	出土 区 遺 構	器 種	胎 土		色		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口徑	器高	胴 径 最大径	底径	
001	9	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡茶褐色 と 淡灰黒色	淡赤褐色 と 淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	19.8	-	20.5	-	底部欠損
002	9	SD01	甕	金ウンモ 細砂粒 黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡黄褐色 と 淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	19.9	-	19.6	-	口縁部約1/2欠損 底部欠損
003	9	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黒色 と 淡黄黒色	ヨコナデ ミガキ風ナデ ハケナデ	ヨコナデ ハケナデ	27.3	40	28.8	3.0	口縁部の一部と胴部の一部を欠く
004	9	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ ナデ ケズリ風ナデ	ヨコナデ ハケナデ	18.9	36	22.6	2.2	口縁部約1/2欠損
005	10	SD01	甕	金ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目	ヨコナデ 指オサエ	26.4	-	-	-	ハケ目 (4~6本/cm) 胴部1/4黒斑 胴部上半完存
006	10	SD01	甕	黒ウンモ 細砂粒	細粒	淡黄茶褐色 と 淡黒色	淡黄茶褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ ハケナデ?	28.4	47.4	-	3.8	風化のため調整の詳細不明 口縁部もほぼ完存
007	11	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黒褐色 と 淡黄褐色	淡黒褐色 と 淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	ヨコナデ ハケナデ	18.6	-	16.5	-	ハケナデ (3~5本/cm) 底部一部欠損 ベルト状煤付着
008	11	SD01	甕	黒ウンモ 砂粒	細粒	淡茶褐色 と 淡黒色	赤褐色 と 淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ 工具ナデ	(18.4)	36.6	21.3	1.6	口縁部1/8残存
009	11	SD01	甕	角閃石 石英粒	微粒	黒色 と 淡茶褐色	淡黄褐色 と 淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ 指オサエ タテナデ	(23.0)	44.9	(27.7)	20.5	口縁部約1/3残存 胴部約1/2残存 底部欠損 煤の付着
010	11	SD01	甕	角閃石	細粒	淡黄褐色	淡黄白色 と 淡赤褐色	ハケ目 ヨコナデ ミガキ風ナデ	指オサエ ヨコナデ ハケ目	21.4	-	20.4	-	ハケ目 (8~10本/cm) 底部欠損
011	12	SD01	甕	石英粒 細砂粒	細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ	ミガキ風ナデ タテナデ 工具ナデ	21.9	33.5	21.3	3.0	完形品 煤の付着 風化のため調整の詳細不明
012	12	SD01	甕	石英粒 黒ウンモ粒 砂粒	細粒	淡灰黒色 と 淡褐色	淡赤褐色 と 淡褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目	指オサエ タテナデ ハケ目	(19.6)	-	21.3	-	ハケ目 (4~6本/cm・8~10本/cm・10~11本/cm) 口縁部約2/5残存 胴部完存 底部欠損
013	12	SD01	甕	黒ウンモ粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目 ナデ	32.6	-	-	-	ハケ目 (10~11本/cm) 口縁部約1/2残存
014	12	SD01	甕	角閃石 細砂粒 (約2mm程度)	細粒	淡黄白色 と 淡赤褐色	淡黄白色 と 淡赤褐色	ヨコナデ ハケ目 工具ナデ	ヨコナデ 指オサエ	18.0	31.6	19.9	-	ハケ目 (8~11本/cm) 底部粘土貼り付け 完形 風化のため詳細不明
015	13	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケナデ ナデ 指オサエ	タテナデ ハケナデ	21.2	33.9	20.5	3.4	口縁部約1/5欠損 煤の付着
016	13	SD01	甕	角閃石 砂粒	細粒	淡黄褐色 と 淡黄褐色	淡黄褐色 と 淡黄褐色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	工具ナデ ナデ	17.9	35.1	20.7	1.8	煤の付着 (淡灰黒色)
017	13	SD01	甕	石英 角閃石	微粒	淡黄灰色 と 淡灰黒褐色	淡黄暗褐色 と 暗灰色	ナデ 指オサエ	ハケナデ ナデ	(21.2)	38.5	(24.0)	-	煤の付着 風化のため調整不詳
018	13	SD01	甕	黒ウンモ	微粒	淡灰褐色 と 淡茶褐色	淡灰黒色 と 淡黄褐色	ナデ 一部ハケナデ 指オサエ	ハケナデ ナデ	19.8	36.3	23.0	3.2	煤の付着 ハケ目 (4~6本/cm)
019	14	SD01	甕	角閃石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色 と 淡黒褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	工具ナデ 指オサエ	17.4	-	-	-	口縁部一部欠損 胴部上半一部欠損
020	14	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色 と 淡黒褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ハケナデ ナデ	18.4	-	(19.5)	-	口縁部1/2、胴部上半1/2残存

表 4 遺物観察表 ②

遺物 番号	押図 番号	出土区 出土構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 底 最大径	底径	
021	14	SD01	甕	黒ウンモ 角閃石	微粒	淡黄灰色 淡黄白色	淡黒茶褐色 淡黄茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ	(26.5)	48.0	31.5	—	口縁部2.3欠損 煤の付着
022	14	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ナデ ハケ目	19.2	38.5	21.2	1.9	口縁部1.3、胴部～底部1.3欠損 ハケ目(4～6本/cm)
023	15	SD01	甕	角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ 指オサエ	21.2	—	—	—	胴下半欠損 口縁部約1/4欠損 赤色塗彩
024	15	SD01	甕	角閃石	細粒	淡黄褐色	暗茶褐色	ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ ハケナデ	18.5	—	—	—	口縁部約2.3残存 煤の付着
025	15	SD01	甕	黒ウンモ 長石	細粒	淡黄茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ハケナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	18.5	—	—	—	口縁部一部欠損 ハケ目(10～12本/cm)
026	15	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ハケナデ ヘラナデ	ヨコナデ ハケナデ	19.7	—	—	—	口縁部わずかに欠損
027	15	SD01	甕	角閃石	微粒	淡黄暗褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケナデ ナデ	16.7	24.9	(16.3)	2.3	胴部2.3欠損 煤の付着
028	15	SD01	甕	角閃石	細粒	淡黄褐色 淡黒色	淡黄褐色 淡黒色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	ナデ ハケナデ ミガキ	(18.0)	21.6	17.7	3.1	胴上半欠損・口縁部約1/10残存 風化のため調整の詳細不詳 赤色塗彩
029	16	SD01	甕	黒ウンモ 長石	細粒	淡黄褐色 淡黒色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヘラナデ ヨコナデ	17.6	—	—	—	口縁部約3.5残存 単位10条の櫛描波状文を2段施文(左ま わりに施文) 勾玉状浮文を貼付(欠損しているため1ヶ 所だけ確認)
030	16	SD01	甕	長石 黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	15.8	—	—	—	櫛描波状文を施文(風化のため明確でない)
031	16	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡灰白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ 工具ナデ ハケ目	12.8	53.2	31.5	4.3	底部完存・上部約1/3残存 曲水波状文・小波状文を施文(単位不明) 勾玉状浮文2個残存。ハケ目(5～6本/cm)、 赤色塗彩
032	16	SD01	甕	黒ウンモ 長石	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケナデ ケズリ風ナデ	ヨコナデ ハケ目	12.6	46.5	23.3	3.3	口縁部完存。胴部2.3欠損 勾玉状浮文2個残存 ハケ目(8～10本/cm)、煤の付着
033	17	SD01	甕	黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ヘラナデ 指オサエ	13.8	—	—	—	口縁部は完存
034	17	SD01	甕	長石 角閃石	細粒	淡黄白色	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	16.9	—	—	—	口縁部完存 粘土ひもを貼りつけた後、指オサエにより 文様効果を期待する。 ハケ目(10～12本/cm)
035	17	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 ナデ	13.7	—	—	—	口縁部は完存。ハケ目(10本/cm) 単位8条+aの櫛描波状文(小波状文)3 段か? 施文単位上→下→中
036	17	SD01	甕	黒ウンモ 石英	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	16.8	—	—	—	口縁部は完存 単位5条の櫛描波状文2段に施文 施文方向左まわり
037	17	SD01 SD02	甕	黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 工具ナデ	16.6	54.0	27.2	2.7	口縁部完存、胴部～底部1/3残存 小波状文(単位不明) ハケ目(10～12本/cm)、赤色塗彩
038	17	SD01	甕	石英 角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色 淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ 工具ナデ	17.9	54.3	28.0	3.9	赤色塗彩
039	18	SD01	甕	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色 淡黄白色 淡灰黒色	淡黄褐色 淡黄白色 淡灰黒色	ナデ 工具ナデ ハケナデ	ヨコナデ ハケ目 ハケナデ	(16.3)	—	—	—	胴下半欠損 胴上半約1/2欠損 ハケ目(5 ～6本/cm) 単位12条+aの櫛描波状文を3段施文 内・外面とも赤色塗彩
040	18	SD01	甕	石英 角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色 淡黄褐色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ	—	—	21.7	4.3	煤の付着 単位5条の櫛描波状文を2段に施文 施文方向右まわり

表5 遺物観察表③

遺物 番号	坪図 番号	出土区 出土 遺構	器種	胎土		色調		器面調整		法量(cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
041	18	SD01	壺	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄褐色 暗灰褐色	淡黄白色 暗灰褐色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ 工具ナデ	-	-	23.0	-	煤の付着 赤色塗彩 単位8条の櫛描波状文を1段施文
042	19	SD01	壺	黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ ハケ目 指オサエ	ヨコナデ ハケ目	14.0	-	-	-	口縁部は完存 ハケ目(8~10本/㎝)
043	19	SD01	壺	金ウンモ 角閃石	細粒	赤褐色	赤褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ	(22.2)	-	-	-	口縁部約1/2残存
044	19	SD01	壺	黒ウンモ粒	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目	(13.9)	-	-	-	口縁部約1/3残存 ハケ目(10~12本/㎝) ハケ目工具による施文(6~8本/㎝)
045	19	SD01	壺	角閃石	微粒	淡黄褐色 淡灰褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ ハケナデ	ナデ 指オサエ ハケナデ	(12.3)	-	-	-	口縁部約1/2残存 赤色塗彩
046	19	SD01	壺	角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ	(16.8)	-	-	-	単位6条の櫛描波状文を2段施文(左まわり) 浮文(3ヶ所残存…本来は5ヶ所か) へこみはセンイ痕のついた棒状の工具により押圧
047	19	SD01	壺	角閃石 長	微粒	淡赤褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ	(14.4)	-	-	-	口縁部1/3残存 赤色塗彩 低平な突帯に板状工具による刺突風キザミ 単位不明の小波状文
048	19	SD01	壺	角閃石 長	微粒	淡赤褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ ハケナデ	ハケナデ 指オサエ ナデ	-	-	-	-	047と048はわずかに接点があり同一個体と 確認することができるが、破砕時ならびに 復元時のユガミのため正確な全形復元を行 うことができない
049	20	SD01	壺	黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目 工具ナデ	18.1	47.8	23.1	3.8	口縁部約1/2残存 単位6条の櫛描波状文を2段施文 ハケ目(10~12本/㎝)、赤色塗彩の可能性 がある
050	20	SD01	壺	金ウンモ 黒ウンモ	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ ミガキ風ナデ ヘラミガキ	ミガキ風ナデ ハケナデ ナデ	(17.5)	-	(29.8)	-	口縁部2/3欠損
051	21	SD01	壺	角閃石 石英粒	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ?	(13.8)	-	-	-	口縁部約1/6残存 風化のため調整不詳
052	21	SD01	壺	角閃石 細砂	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ ナデ	13.5	-	-	-	口縁部完存
053	21	SD01	壺	角閃石 赤色酸化土粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色 淡黄褐色	工具ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ	(12.6)	-	-	-	口縁部1/3残存 ハケ目(5~7本/㎝)
054	21	SD01	壺	角閃石 細砂	細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	ヨコナデ ハケ目	12.4	-	-	-	口縁部完存 ハケ目(8~9本/㎝)
055	21	SD01	壺	金ウンモ 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 ナデ	(13.7)	40.3	22.4	-	口縁部約2/3欠損 胴部中央部約1/2欠損 胴部中央部約1/5に黒斑 ハケ目(4~6本/㎝)
056	21	SD01	壺	角閃石 石英	小粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ 指オサエ	(12.6)	35.3	(21.0)	3.5	口縁部約1/2、胴部約1/2欠損 風化のため調整不詳
057	22	SD01	壺	赤色酸化土粒 角閃石	小粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ	(15.3)	40.7	26.4	-	口縁部1/3残存 ニッ穿孔 煤の付着
058	22	SD01	壺	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ 指オサエ	(13.2)	31.5	23.8	2.0	口縁部約1/10、胴上部1/5残存
059	23	SD01	壺	長 黒ウンモ	細粒	赤色	赤色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ 指オサエ	16.7	14.9	18.3	-	胴部完存 口縁部一部欠損 赤色塗彩 (地色色調・淡黄褐色)
060	23	SD01	壺	角閃石 細砂	細粒	黒色	暗黄褐色 淡黒灰色	ヘラミガキ ナデ 指オサエ	ヘラミガキ ミガキ風ナデ ナデ	(13.9)	(16.2)	(17.2)	-	1/2残存

表 6 遺物観察表 ④

遺物 番号	埋蔵 番号	出土区 土層	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
061	23	SD01	壺	角閃石 細砂粒	細粒	暗赤褐色	暗赤褐色 淡黒褐色	ヘラナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	16.6	18.0	19.2	—	ハケ目 (8~10本/cm)
062	23	SD01	壺	黒ウンモ 長石粒 砂粒	細粒	黒 色	淡黄褐色 淡 黒 色	ミガキ ハケナデ ナデ	ミガキ 指オサエ	(13.9)		(19.3)	—	口縁部1/10、胴部1/3残存 底部欠損
063	23	SD01	壺	角閃石粒	細粒	淡黄赤褐色	淡 赤 褐色 淡 赤 褐色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ ハケ目	19.2	18.2	20.6	—	口縁部2/5欠損 胴部ほぼ完存
064	23	SD01	壺?	黒ウンモ	細粒	淡黄赤褐色	淡 黄 褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ 指オサエ	16.9	18.2	19.3	—	完形
065	24	SD01	鉢	赤色酸化土粒 砂粒	細粒	暗茶褐色 淡黒灰色	淡赤茶褐色	ナデ?	ナデ?	(16.8)	11.2	14.1	3.9	口縁部2/3欠損 風化のため調整不詳
066	24	SD01	削機	石英	小粒	淡黄褐色	淡 黄 褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目の後 ナデ	18.3	—	14.1	—	口縁部2/3残存 底部欠損
067	24	SD01	鉢	黒ウンモ 長石	細粒	淡黄褐色 淡黒褐色	淡 黄 褐色 淡 黒 褐色	ヨコナデ ミガキ風ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(18.3)	12.2	16.2	—	1/2残存 胎土に精製土使用
068	24	SD01	鉢	角閃石	細粒	淡黄白色	淡 黄 白色	ヨコナデ ハケナデ ケズリ風ナデ	ハケナデ ナデ	(16.9)	12.9	15.4	—	口縁部1/2残存 赤色染彩
069	24	SD01	鉢 or 皿口	石英 黒ウンモ	細粒	淡茶褐色 淡黄褐色	淡 茶 褐色 淡 黄 褐色	ヘラナデ ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(15.7)	15.5	18.3	4.4	口縁部4/5欠損 ヘラナデ (原体幅2.2cm) 内面・底付近にもろ痕あり
070	24	SD01	鉢	黒ウンモ 角閃石	細粒	淡黄褐色 (地色) 淡 赤 褐色	淡 黄 褐色 (地 色)	ナデ ヘラナデ 指オサエ	ナデ?	(17.2)	17.4	18.3	—	1/3残存 風化のため調整不詳 赤色染彩
071	24	SD01	鉢	黒ウンモ粒	細粒	淡黄褐色	淡 黄 褐色 淡 黒 褐色	ヨコナデ ハケナデ ヘラナデ	ナデ ハケナデ 指オサエ	22.6	18.1	20.0	3.9	口縁部1/5欠損 煤の付着 赤色染彩
072	24	SD01	鉢	黒ウンモ粒	細粒	淡黄白色	淡 黄 白色	ヨコナデ 工具ナデ ハケナデ	ナデ ハケナデ 工具ナデ	(26.2)	20.9	22.7	—	口縁部約1/5残存 赤色染彩
073	25	SD01	削機	長石粒 黒ウンモ粒	細粒	淡黄褐色 (地色)	淡 黄 褐色 (地 色)	ヨコナデ ミガキ風ナデ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	13.7	—	13.8	—	口縁部約1/5欠損 底部欠損 赤色染彩
074	25	SD01	削機	黒ウンモ 砂粒	細粒	淡黄白色 (地色)	淡 黄 白色 (地 色)	ナデ 指オサエ	ナデ	(15.0)	14.3	—	(13.3)	約1/2残存 赤色染彩
075	25	SD01	削機	角閃石 黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡茶褐色	暗 茶 褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ	21.2	—	18.5	—	口縁部約1/5欠損 ハケ目 (3~4本/cm)
076	25	SD01	削機	角閃石粒	細粒	淡黄赤褐色	淡 黄 褐色	ミガキ風ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ハケ目 指オサエ	20.8	14.1	—	(12.5)	底部約1/2欠損 ハケ目 (6~8本/cm)
077	25	SD01	削機	黒ウンモ 長石	細粒	淡黄褐色 (地色)	淡 黄 褐色 (地 色)	ヨコナデ ミガキ風ナデ	ヨコナデ タテ・ミガ キ風ナデ	(24.9)	15.4	—	12.5	底部完存・口縁部約1/3残存 赤色染彩
078	25	SD01	削機	黒ウンモ 赤色酸化土粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	ヨコナデ ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目	24.2	16.8	—	(16.1)	口縁部約1/2・底部1/3程度残存 ハケ目 (10~12本/cm)
079	26	SD01	高坏	角閃石	細粒	淡黄白色	淡 黄 白色	ミガキ風 工具ナデ	ヨコナデ ミガキ	—	—	—	—	坏部および底部欠損 穿孔4ヶ所
080	26	SD01	高坏	角閃石	細粒	淡黄白色	淡 黄 白色	ヨコナデ	ハケ目 ナデ 指オサエ	—	—	—	17.0	坏部・底部の一部欠損 穿孔4ヶ所

表 7 遺物観察表 ⑤

遺物 番号	探区 番号	出土 区 遺 構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口 径	器 高	胴 径 最大径	底 径	
081	26	SD01	高坏	赤色酸化土粒 黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	硝文風のミガキ ヨコナデ 指オサエ	ミガキ ヨコナデ 指オサエ	—	—	—	(14.3)	坏部口縁部欠損 胴部約1/2欠損 風化のため明確でないが赤色塗彩の可能性 もある 穿孔5ヶ所、しほり痕あり
082	26	SD01	高坏	角閃石	細粒	淡黄褐色 (地色)	淡黄褐色 (地色)	ハケナデ ミガキ風ナデ	ヨコナデ ハケナデ	30.5	—	—	—	口縁部約1/2欠損 赤色塗彩
083	26	SD01	高坏	角閃石	細粒	淡黄褐色 (地色)	淡黄褐色 (地色)	ナデ? 指オサエ	ナデ? 指オサエ	(28.6)	20.2	—	17.5	口縁部1/3残存 赤色塗彩 風化のため調整不詳
084	26	SD01	高坏	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色 (地色)	淡黄茶褐色 (地色)	ヨコナデ ナデ 指オサエ	ハケナデ ミガキ風ナデ ミガキ	29.9	24.6	—	(18.4)	脚部約1/10残存 赤色塗彩 穿孔4ヶ所 (現存2ヶ所) しほり痕あり
085	27	SD01	瓶	金ウンモ 黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ヘラナデ (平滑しおひ)	ハケ目	12.2	—	—	(孔径) 1.6	反転復元 ハケ目 (10~12本 ㎒) (片面把手欠損) 口縁部は平坦に仕上げることなくつまみあ げたままである
086	27	SD01	瓶	黒ウンモ	細粒	淡黄茶褐色	淡黄褐色	指オサエ ヨコナデ ハケナデ	ナデ ハケナデ	(14.9)	11.9	—	(孔径) 2.5	焼成前穿孔 約1/3残存 口縁部約1/2残存
087	27	SD01	瓶	黒ウンモ 長石粒	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ナデ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	15.6	12.9	—	(孔径) 2.3	穿孔… (径1.1㎒) 一部反転復元 縦斜位を基調とする工具しあげ
088	27	SD01	瓶	石英 角閃石粒	細粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	指オサエ ハケナデ	(16.4)	12.9	—	(孔径) 2.3	焼成前穿孔 (径1.0㎒) 反転復元 口縁部約1/2弱残存、底部完存
089	27	SD01	瓶	黒ウンモ 長石粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ 工具ナデ ナデ	(13.8)	13.7	—	(孔径) 2.5	反転復元 (焼成前穿孔) 穿孔 (径0.8㎒) 外側からの粘土貼りつけによる把手 (残存部分の位置関係から2ヶ所であった と思われる)
090	27	SD01	瓶	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指ナデ ナデ ヘラナデ	指オサエ ヘラナデ	(15.1)	—	—	(孔径) 1.7	反転復元 底部完存、口縁部はわずかしこ残っていない ので詳細不明であるが口縁部は仕上げず つまみ上げただけの粗い調整が行われる
091	27	SD01	瓶	黒ウンモ 長石	微粒	淡黄白色 と 淡灰黑色	淡黄白色 と 淡灰黑色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ ナデ タテ方向ミガキ	13.2	13.3	—	(孔径) 1.9	穿孔は焼成前 一部欠損するものの完形復元が可能である
092	27	SD01	瓶	角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ハケナデ	タテハケナデ	—	—	—	(孔径) 3.1	反転復元 穿孔部残存
093	27	SD01	瓶	黒ウンモ 長石粒	微粒	淡黄褐色	淡黄白色	指オサエ 指ナデ ヨコナデ	工具ナデ 指オサエ ナデ	—	—	—	(孔径) 2.7	穿孔は焼成前 穿孔部完存、上部欠損
094	27	SD01	瓶	黒ウンモ	微粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	指オサエ ナデ	指オサエ ハケナデ ナデ	11.6	17.5	—	(孔径) 0.9	縁部はつまみあげて粗雑 (最終調整を行っていない) 口縁部1/2欠損、底部完存
095	28	SD01	てづ くね	黒ウンモ 長石粒	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ (指ナデ)	指オサエ ハケ目 ナデ	6.1	4.5	—	—	ハケ目 (8~10本 ㎒) 口縁部 上端を一部欠損
096	28	SD01	ミナ ナミ (甌)	黒ウンモ 角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指オサエ ナデ	5.4	7.2	—	—	口縁部上端を一部欠損
097	28	SD01	てづ くね? (鉢)	黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	黒 色 と 淡黄褐色	指オサエ ナデ	ヨコナデ ケズリ ナデ	8.0	6.9	—	—	完形
098	28	SD01	甌	金ウンモ 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色 と 淡 黒 色	淡黄褐色	ヨコミガキ ナデ	ヨコナデ ハケナデ	10.0	—	—	—	反転復元 底部欠損 約1/2残存
099	28	SD01	鉢	黒ウンモ 石英粒 金ウンモ	微粒	淡黄褐色	赤 褐 色 と 淡黄褐色	指オサエ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケナデ	13.2	9.9	—	—	完形
100	28	SD01	鉢	黒ウンモ	微粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ 指オサエ ケズリ	11.2	10.2	—	—	口縁部約2/5欠損

表 8 遺物観察表 ⑥

遺物 番号	押印 番号	出土区 出土構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
101	28	SD01	ニシ 7土 壺	黒ウンモ 角閃石 金ウンモ	微粒	淡黒茶褐色	淡黒茶褐色	指オサエ ナデ	指オサエ ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	反転復元 胴上半約1/3残存(傾き若干疑問あり)
102	28	SD01	鉢	黒ウンモ	微粒	黒 色 淡黄茶褐色	黒 色 淡黄茶褐色	ヨコナデ ナデ 指オサエ	ヨコナデ ナデ 指オサエ	12.6	9.0	-	-	随所に製作時に付着したと思われる粘土塊 が表面にみられる 完形品
103	28	SD01	鉢	黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ ハケナデ 指オサエ	(10.4)	8.5	-	-	口縁部1/5残存 以下完存
104	28	SD01	壺	角閃石粒	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ヘラナデ	ヨコナデ 指オサエ ナデ	(13.0)	9.1	-	-	反転復元 1/2残存
105	28	SD01	壺	ウンモ 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ ハケナデ	ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	12.2	-	-	-	口縁部1/3欠損
106	28	SD01	壺	黒ウンモ 長石粒	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ 工具ナデ ハケナデ	ヨコナデ ミガキナデ ナデ	(9.8)	7.0	-	1.3	反転復元 口縁部約1/2欠損
107	28	SD01	鉢	角閃石	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ハケナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ 指オサエ	(13.3)	10.9	-	-	口縁部約1/4残存 赤色掌彩
108	28	SD01	鉢	角閃石	細粒	淡 黒 色	淡黄白色 淡灰黒色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 工具ナデ 指オサエ	(12.2)	8.7	-	-	口縁部約1/5残存
109	28	SD01	壺	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色 淡赤褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ?	(17.9)	4.6	-	-	約1/2残存
110	30	SD02	土器 小 皿	精製土	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ナデ	回転ナデ	(8.1)	1.2	-	(6.7)	風化のため判断としないか糸切り底か
111	30	SD02	土器 小 皿	赤色酸化土粒	微粒	明 褐 色	明 褐 色	回転ナデ	回転ナデ	(8.6)	1.4	-	(7.0)	糸切り底(風化のため詳細は不明である) 口縁部で約1/6残存 反転復元
112	30	SD02	土器 小 皿	黒ウンモ	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(8.1)	1.1	-	(7.1)	反転復元 口縁部で約1/8残存
113	30	SD02	土器 小 皿	金ウンモ 赤色酸化土粒	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	7.4	1.4	-	5.6	糸切り底 砂粒の移動方向右まわり ほぼ完形 口縁部の一部をわずかに欠損
114	30	SE02	土器 小 皿	角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(7.8)	1.4	-	(4.8)	糸切り底(風化のため詳細不明) 反転復元
115	30	SD02	土器 小 皿	精製土	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	(6.8)	糸切り底(風化のため詳細不明) 反転復元
116	30	SD02	土器 小 皿	ウンモ 角閃石	微粒	暗赤褐色	暗赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	(8.6)	1.4	-	(6.0)	糸切り底 砂粒の移動方向 右まわり 口縁部で約1/3残存 反転復元
117	30	SD02 上 層	土器 小 皿	黒ウンモ	微粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	(8.9)	1.0	-	(7.8)	糸切り後ナデ 口縁部で約1/8残存 反転復元
118	30	SD02	土器 小 皿	精製土 (黒ウンモ、 赤色酸化土粒)	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	(6.6)	風化のため詳細不明 糸切り底か? 反転復元
119	30	SD02 最下層	土器 小 皿	黒ウンモ	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(12.5)	(3.4)	-	-	口縁部約1/5残存(底部欠損)
120	30	SD02 中 層	土器 中 皿	赤色酸化土粒 細砂粒	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	(6.6)	全面磨滅が著しい 風化のため判断としない(糸切り底か?)

表 9 遺物観察表 ⑦

遺物 番号	押印 番号	出土区 遺構	土器 器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
121	30	SD02	土器 Ⅱ部	精製土 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコ回転ナデ	ヨコ回転ナデ	—	—	—	(7.0)	底部で約1/8残存 反転復元
122	30	SD02 中層	土器 Ⅱ部	金ウンモ	微粒	淡 褐色	淡 褐色	回転ナデ	回転ナデ	(12.5)	2.8	—	(8.6)	口縁部約1/3残存 反転復元
123	30	SD02 中層	土器 Ⅱ部	精製土 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	(8.0)	反転復元 糸切り底 砂粒の移動方向…不明 底部で約1/10残存
124	30	SD02 最下層	土器 Ⅱ部	赤色酸化土粒 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(12.3)	2.5	—	(8.8)	口縁部で約1/2残存
125	30	SD02 中層	土器 Ⅱ部	赤色酸化土粒 石英粒	微粒	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	(8.4)	4点接合 糸切り底 (風化が著しい) 砂粒の移動方向 右まわり 底部完存 (口縁部欠損)
126	30	SD02 中層	土器 小Ⅱ部	ウンモ 赤色酸化土粒	微粒	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(9.2)	2.3	—	(6.5)	反転復元 糸切り底 (風化のため詳細不明) 口縁部約1/5残存
127	30	SD02 上層・ 最下層	土器 Ⅱ部	赤色酸化土粒	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ 不定方向の 指ナデ	回転ナデ	12.4	2.5	—	8.0	糸切りかどうか遺存状況が悪く判然とし ない
128	30	SD02	土器 Ⅱ部	黒ウンモ 赤色酸化土粒	微粒	淡茶褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	(13.4)	3.3	—	(9.4)	反転復元 風化が著しい 糸切り底 砂丘の移動方向 右まわり 口縁部約1/8残存
129	30	SD02 中層	土器 Ⅱ部	長石 角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 後ナデ	ヨコナデ 後ナデ	8.2	1.3	—	6.7	粘土接合痕 回転糸切り 砂粒の移動方向 右まわり 約1/5残存
130	30	SD02	土器 小Ⅱ部	黒ウンモ 赤色酸化土粒	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	(8.6)	—	—	—	全面磨滅が著しい 反転復元 糸切り底 砂粒移動方向不明 底部約1/8残存
131	30	SD02 (床直)	土器 小Ⅱ部	赤色酸化土粒 黒ウンモ	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	8.8	1.1	—	7.2	(内面に焼成前のヒビ多数みられる) 砂粒の移動方向 右まわり、回転糸切り ほぼ完形 (2/8程度欠損)
132	30	調査区 内表探	土器 小Ⅱ部	黒ウンモ	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	7.5	1.7	—	5.5	胎土は精良な粘土を使用 回転糸切り
133	30	SD02 (床直)	土器 Ⅱ部	石英 赤色酸化土粒 金ウンモ	小粒	淡黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	11.9	2.7	—	(8.3)	胎土には精製土を使用、底部糸切り 砂粒の移動方向 右まわり (口縁部約1/3欠損) 立ち上がりにはぶく不明瞭
134	30	SD02 最下層 上 部	土器 Ⅱ部	金ウンモ 角閃石	小粒	淡黄褐色	暗黄褐色	ヨコナデ ケズリ風 ハケナデ	回転ナデ ヘラナデ	12.4	3.3	—	9.3	下半部全体ススの付着、糸切り状況不明瞭 完形 砂粒の移動方向は不明
135	30	SD02 上層	土器 Ⅱ部	赤色酸化土粒 金ウンモ	小粒	赤 橙 色	赤 橙 色	ナデ	ヨコナデ	(12.2)	3.2	—	9.8	胎土は非常にもろい 回転糸切りの後ナデ 口縁部約1/2欠損
136	30	SD02 (床直)	土器 Ⅱ部	精製土 黒ウンモ	小粒	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	12.9	3.6	—	(8.7)	底部回転糸切り 砂粒の移動方向 右まわり 口縁部一部欠損
137	31	SD02 中 層	中世 陶器	石英 赤色酸化土粒	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ヨコナデ ハケ目 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目 ナデ	25.6	32.1	—	18.0	ハケ目 (6~8本 ㊥) タタキ幅 1.8㊥
138	32	SD02 最下層 上 部	土器	精製土 黒ウンモ	微粒	—	淡茶褐色	—	ナデ	—	—	—	—	重量 14g (一部欠損)
139	32	表土中 採 集	土器	赤色酸化土粒	微粒	—	淡黄褐色	—	ナデ	—	—	—	—	重量 23g (両端の一部欠損)
140	33	SD02 中 層	甕	—	微粒	緑 灰 色	緑 灰 色	—	—	—	—	—	—	磁胎は灰白色 傾き疑問あり

表10 遺物観察表 ⑧

遺物 番号	押印 番号	出土区 遺構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
141	33	SD02 中層	青磁皿	—	—	灰 緑 色	灰 緑 色	—	—	(11.2)	—	—	—	口縁部で約1/10残存
142	33	SD02 中層	青磁碗	—	—	暗 緑 色	暗 緑 色	—	—	—	—	—	—	磁胎は灰白色
143	33	SD02 最下層 上部	白磁碗	—	—	灰 白 色	灰 白 色	—	—	(15.7)	—	—	—	磁胎は白灰色
144	33	SD02 中層	青磁碗	—	—	淡 緑 色	淡 緑 色	—	—	—	—	—	—	磁胎は白灰色 傾き若干疑問あり
145	33	SD02 中層	青磁皿	—	—	淡 緑 色	淡 緑 色	—	—	—	—	—	(4.6)	磁胎は灰白色 切離し(露胎となる) 反転復元
146	34	SD02 中層	五輪塔											別表あり
147	34	SD02 中層	五輪塔											
148	34	SD02 中層	五輪塔											
149	34	SD02 中層	五輪塔											
150	37	SD04	底部 (壁)	金ウンモ 長石粒	細粒	淡 黒 色	淡 黄 褐色	指オサエ	ナデ	—	—	—	3.4	底部立ち上がりの稜線は明瞭ではない
151	37	SD04	てづくね	角閃石	細粒	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	指オサエ ヨコナデ	指オサエ ナデ	6.4	4.5	—	—	(完形)
152	37	SD04	てづくね	角閃石 長石粒	細粒	淡灰白色	淡灰白色 と 黒 色	指オサエ ヨコナデ	ヨコナデ 指オサエ	6.4	4.5	—	—	(完形) 胴部に黒斑あり
153	37	SD04	ミナチ ナデ (壁)	長石 角閃石粒	細粒	淡灰白色	淡灰白色 と 淡 黒 色	指オサエ ヨコナデ	指オサエ ヨコナデ	(4.9)	7.1	(5.8)	—	(器形において該期の壺形土器の特徴をよく 示している) 平底の底部を意図する 反転復元
154	43	SH01	壺 口縁部	角閃石 細砂粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ	—	—	—	—	傾き若干疑問あり
155	43	SH06	壺 口縁部	黒ウンモ 細砂粒	細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ	ヨコナデ	(13.8)	—	—	—	端部を丸くおさめる 約1/7残存 反転復元
156	43	SH05	壺 口縁部	黒ウンモ 金ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目	ヨコナデ ハケ目	(15.1)	—	—	—	ハケ目 (10~12本/㎢) 口縁部で約1/5残存
157	43	SH06	壺 口縁部	黒ウンモ 石英粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目 指オサエ	ヨコナデ ハケ目 ナデ	(12.8)	—	—	—	ハケ目 (10~12本/㎢) 口縁部で約1/6残存
158	43	SH03	丸底 底部	黒ウンモ 細砂粒	細粒	淡黄白色	淡黄白色 と 淡 黒 色	指オサエ ナデ	不定方向の ナデ	—	—	—	—	傾き若干疑問あり
159	43	SH06	壺 口縁部	角閃石	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目	ヨコナデ 指オサエ	(16.1)	—	—	—	風化のため器面調整の詳細不明 反転復元 一部にハケ目様の痕跡あり (8~10本/㎢) 口縁部片 (口縁部分で約1/7残存)
160	43	SH06	壺 口縁部	石英 黒ウンモ粒	細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目 (10~12本)	指オサエ 工具ナデ ハケ目	—	—	—	—	下段工具ナデのため段ができる 風化のため詳細不明 ハケ目 (10~12本/ ㎢・6~7本/㎢) 傾き若干疑問あり 反転復元

表11 遺物観察表⑨

遺物 番号	押図 番号	出土区 遺構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴径大径	底径	
161	43	SH06	高坏 脚部	精製土 角閃石 長石	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ 指ナデ	ハケ目	-	-	-	-	ハケ目 (6~8本 cm) 1/2残存
162	43	SH06	壺 底部	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色 黒色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	工具ナデ	-	-	-	-	端部欠損 約1/4程度残存 風化のため判然としない。粘土の剥離
163	43	SH01	壺 底部	長石粒 細砂粒	細粒	淡灰黒色	淡赤褐色	指オサエ ナデ	工具ナデ ヨコナデ	(5.8)	-	-	-	約1/2残存 反転復元
164	43	SH05	壺 底部	黒ウンモ 細砂粒	細粒	黒色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	(5.4)	-	-	-	風化のため器面調整判然せず ナデ、擦過痕が一部にみられる 反転復元
165	43	SH05	壺	黒ウンモ粒	細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ヘラミガキ 指オサエ ナデ ハケ目		-	-	-	(3.9)	風化のため調整の詳細不明 反転復元
166	43	SH05	鉢の 底部	石英粒 赤色酸化土粒 黒ウンモ粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ナデ	ハケ目 ヨコナデ ナデ	-	-	-	4.9	ハケ目 (10本 cm) 1/2残存 反転復元
167	43	SH01	壺 底部	黒ウンモ 砂粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ナデ	ナデ	-	-	-	(6.3)	破損は不鮮明 風化のため調整の詳細不明 (わずかにナデ風の擦過がみられる。工具 ナデ) ?
168	43	SH01	壺 底部	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	赤褐色	指オサエ ナデ	ハケ目 指オサエ	-	-	-	4.8	風化のため調整の詳細不明である
169	43	SH05	壺 底部	黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	赤色塗彩	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	外面…赤色塗彩
170	43	SH06	瓶	黒ウンモ 石英 赤色酸化土粒	細粒	淡赤褐色	淡黄褐色	指オサエ 工具ナデ ハケナデ	ハケ目 ケズリ	13.0	9.4	-	穿孔 1.3	穿孔 (焼成前の二次穿孔) 完形 ハケ目 (5~6本 cm・6~8本 cm・10~ 12本 cm)
171	43	SH05	瓶	黒ウンモ 長石粒	細粒	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 擦過 ヘラケズリ	-	-	-	1.5	底部片
172	43	SH01	瓶	黒ウンモ 石英粒	細粒	黒色 淡灰褐色	黒色 淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	縦方向ハケ目 ナデ ヨコナデ	(19.3)	35.3	19.3	2.1	工具ナデ (幅3.5cm) ハケ目 (5~7本 cm) スズ付着 (口縁部約5/6欠損) 反転復元
173	44	SH01	砥石	-	細粒	-	-	-	-	-	-	-	-	現存重量34g 石材 砂岩 欠損部分以外は磨っている
174	45	SD01	縄文 土器	角閃石 細砂粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ	-	-	-	-	傾き 上下関係不詳
175	45	SD01	縄文 土器	長石 黒ウンモ	細粒	暗茶褐色 灰黒色	暗茶褐色 灰黒色	ミガキ 指オサエ	ヨコナデ 指オサエ	-	-	-	(10.6)	反転復元

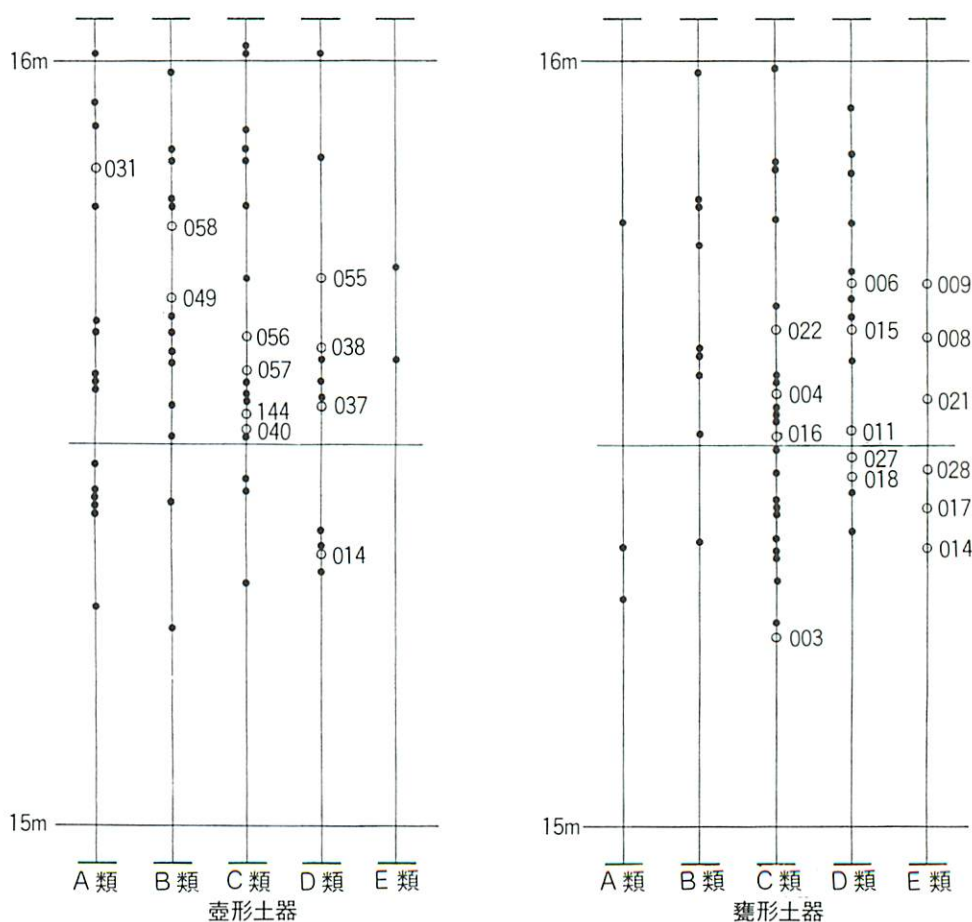
第Ⅳ章 平成3年度調査のまとめと考察

賀来中学校遺跡は大分市大字賀来字門田に所在し、大分川と賀来川によって形成された標高17mを測る自然堤防上に立地する。今回の調査では弥生時代後期～中世の所産となる遺構（竪穴住居跡8軒、溝状遺構4条、土塼18基、井戸跡2基）を検出した。本章ではこれらのうち1号溝と2号溝からの出土遺物の内容を検討し各遺構の帰属年代を推察することにより、当遺跡の集落変遷試考の一助としたい。

1】1号溝について

1号溝出土土器について

1号溝の出土土器は弥生時代後期の土器を主体としており、数器種の内容を有している。また出土した資料はその大部分が小破片であり、出土土器総数に比して全体形状を知りうる資料が少ない点を考慮し、当該期の土器型式の変化において時間的経過に伴う変化が顕著であり、しかも他の部位との分別が容易で器種判断がおこないやすいという点から土器底部に着目し分析を試みる。



第46図 SD01出土土器(壺・甕)底部形態別出土レベル分布図(1/10)

註1)

総出土資料中、底部と認識しうる総破片数は347を数える。これらのうち甕の底部と考えられるものが114点(33%)、壺の底部と考えられるものが108点(31%)出土しており、全体で非常に高い比率を占めていることがわかる。

(甕形土器)

出土した甕形土器の底部は形態により次の5類に分類することができる。

甕底部A類 粘土貼りつけによるやや外にふんばる上げ底状を呈する底部(底部径大)

甕底部B類 粘土貼りつけによる上げ底状を呈する底部

甕底部C類 底部を窪ませることにより上げ底状を呈する底部

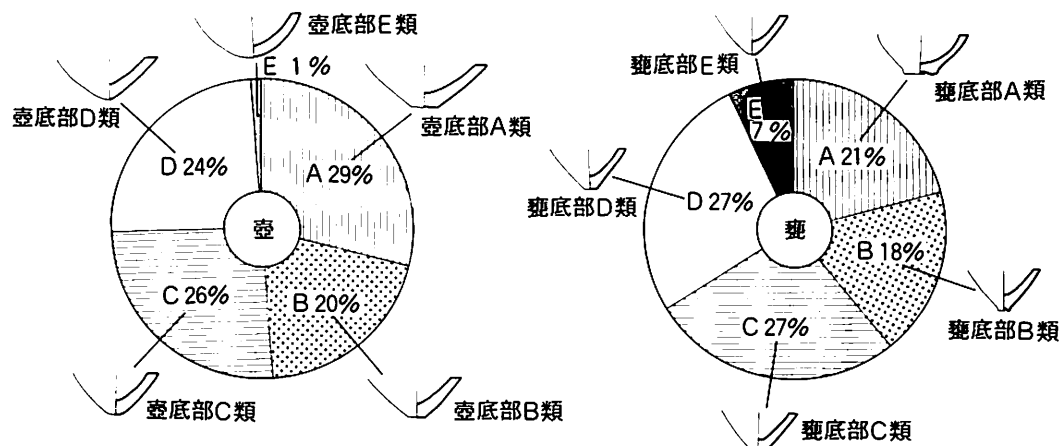
甕底部D類 平底を呈する底部

甕底部E類 底部先端が凸レンズ状を呈する底部

第46図は各甕形土器底部と溝埋土内における出土レベルの分布を示している。これをみると、各底部形態と出土レベルの相関は認められず、溝埋土の上層から下層までほぼまんべんなく出土している状況を看取することができる。しかしながら、「遺存率」という視点でながめてみると、A→Eの順に遺存率が高く、完形復元の可能な資料の多いことがわかる。これらの中でも特にC・D・Eについてはすこぶる遺存率が高くなり、完存品のないA・Bとは隔世の感がある。また資料数でみるとAがBを僅かに凌駕しているが、遺存率は相対的にB類の方が圧倒的に高い。表13は前章で分類した口縁部形態と底部形態の相関を示したものである。これをみると口縁部形態と底部形態の組み合わせから7つの型式の存在を想定することができる。これに後期の「平底→凸レンズ状の底部→丸底」といった底部の一般的な変遷過程を考慮し、型式学的見地および前述の「遺存率」を考え合わせると、大要において次のような序列が考えられる。

A→B→C→D→E

以上の想定を踏まえるならば、口縁部形態によって示されるⅠ→Ⅳ類はそれぞれ個別の形式を形成しているとも考えられよう。したがって口縁部形態Ⅰ～Ⅳ類によって示される最大で4形式7型式



第47図 底部形態別出土割合図

口縁部形態 底部形態	I a	I b	II
A	△		
B	△		△
C	◎	△	○
D		○	△
E			

表12 口縁部形態・底部形態相関表（壺）

口縁部形態 底部形態	I	II	III	IV
A				
B				
C	△	△		○
D		◎	△	△
E				●

表13 口縁部形態・底部形態相関表（甕）

の甕形土器により構成されるものと推定される。また、これらの型式の相対的な出土量の比較から、本溝出土資料は底部形態がまさに平底→凸レンズ状底部へ移行しようとする過渡的な様相を示しているものと考えられよう。

（壺形土器）

出土した壺形土器の底部は形態により次の5類に分類することができる。

壺底部A類 中期的な様相を残す安定した平底

壺底部B類 比較的安定した平底

壺底部C類 B類、D類の中間的な様相を呈する底部（不安定な平底）

壺底部D類 凸レンズ状を呈する底部

壺底部E類 丸底を呈する底部

ここでは先に分類した4つの口縁部形態のうちⅢ類の小型球形胴を有する丸底壺を除いた長胴卵形をなす3類の底部について検討する。後期において一般的な「中期的な様相を残す安定した平底→平底→凸レンズ状底部→丸底」という時間的経過を認めるならば、これら5つの底部形態には

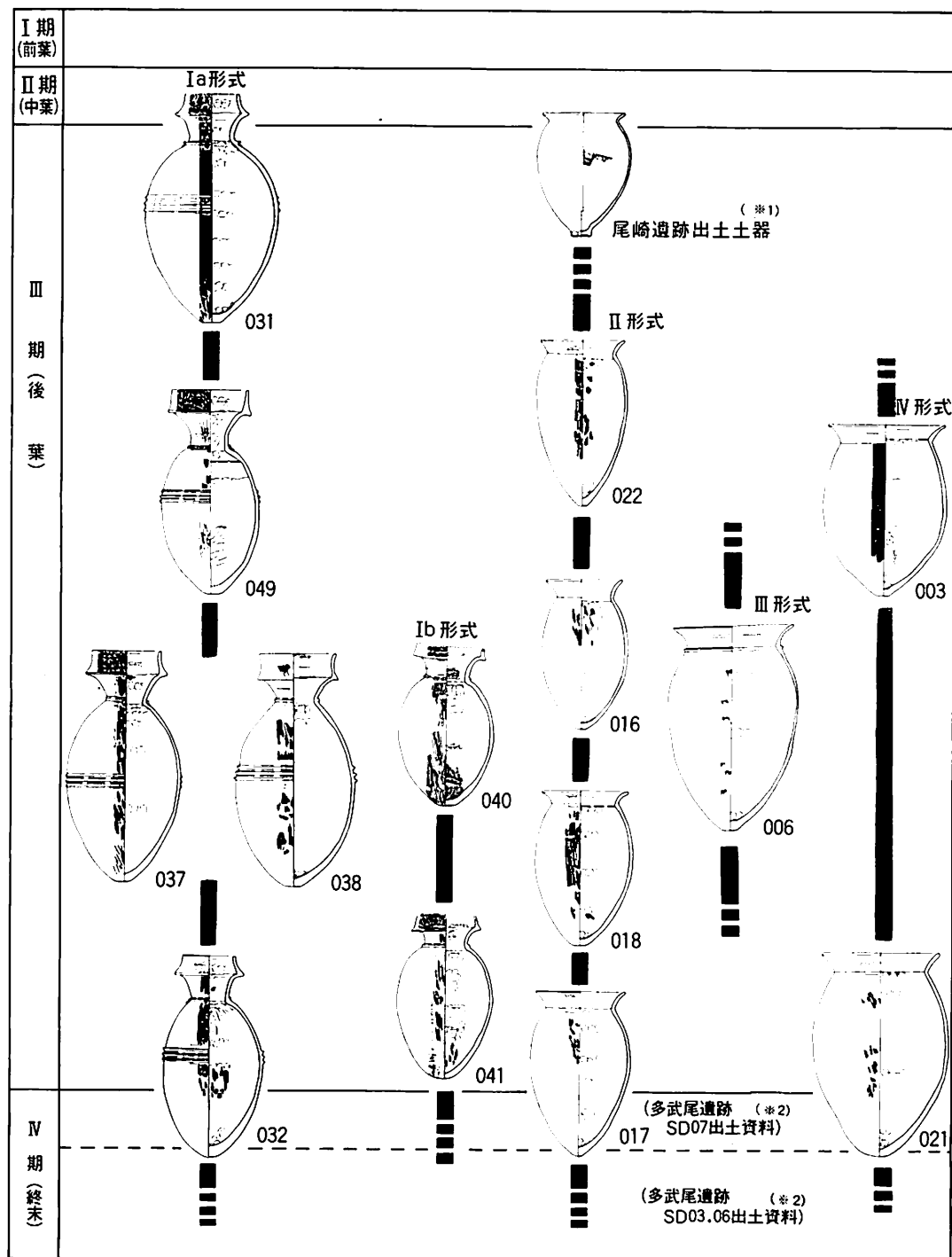
A→B→C→D→E

の型式組列を想定することができる。

以上の想定を踏まえて作成したのが表12である。これをみると、Ia→Ibの時間的経過が考えられ、Ⅱ類は独自に通時的な型式変化を遂げている状況を看取することができる。したがって以上の結果から壺形土器においては、壺底部C・D類に代表される型式段階において溝はその機能を停止し、埋没していったものと考えられよう。

溝状遺構の所産時期について

前項における甕ならびに壺の型式学的な検討を踏まえ既往の編年観に対照させ、溝状遺構の所産時期、特に溝状遺構が埋没した時期について検討する。



第48図 SD01出土土器(壺・甕)編年対照表 (S=1:16)

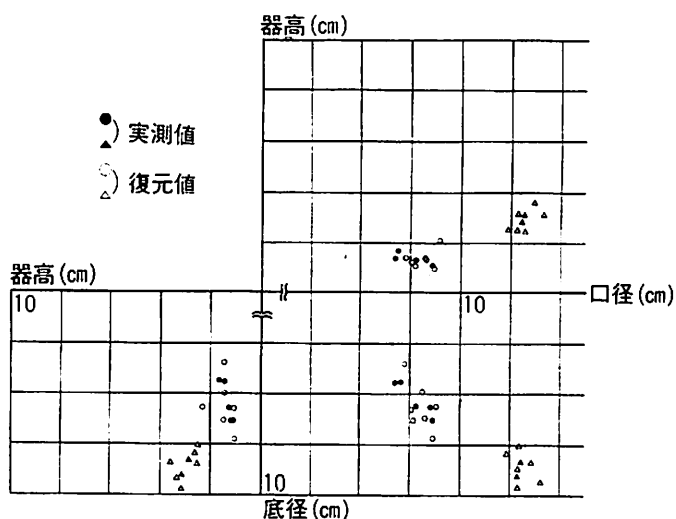
※1)「尾崎遺跡」-大分市立明治北小学校建設に伴う発掘調査概報- 大分市教育委員会 1984

※2)「大分市多武尾遺跡 調査概報」 大分市教育委員会 1982

第48図は既往の編年観に遺存率の高い各型式の土器型式変化を勘案し、模式的に充当したものである。甕形土器、壺形土器ともほぼ矛盾なく同一期（様式）の中におさまっている。1号溝の出土土器は破片資料を含めれば後期後葉～終末の時期幅を有し、特に後葉を主体とすることから溝がその機能を停止した時期をほぼこの時期とみて大過ないであろう。

溝掘削時期については具体的

な資料において明示することはできないが、内包する土器の时期的な幅から後期後葉のはやい時期に掘削が行われた可能性が高いといえようか。



第49図 SD02出土土師器法量分布図

2】2号溝について

出土遺物について

土師器

第49図は出土した土師質土器の法量分布を示したものである。この図をみると、資料数の制約からか、特定の領域を設定することはできず、通常感覚的に坏、小皿と認識しているものの分離を視覚的に明示することができたにすぎなかった。

出土した資料は全形を知りうる資料が少ないが、形態的特徴・製作手法から坏については大きく4類に、小皿については5類に分類することができる。

- 坏A類 全体的に丸味を帯び、底部から口縁部へ内湾気味に立ちあがる。
- 坏B類 底面からの立ち上がりが明瞭でなく、全体的に丸味を帯びる。製作手法の特徴として内底面にケズリ風の手入れ調整を施す
- 坏C類 器壁は薄手で立ち上がりは次第に外反しながら開く体部を有する。焼成は比較的堅緻である。
- 坏D類 器壁は非常に厚手で、赤橙色の胎土を有し、焼成は非常に軟質である。底部から体部に若干外反ぎみに開く体部を有する

以上のうち、坏A類については、器高差等において、さらなる細分が可能と思われるが、資料数の制約から今回は一括して扱う。坏B類は完存資料ならびに破片資料においても内器面に多量の煤

の付着が認められ、あるいは、灯明皿としての専用も考えられよう。坏C類は数こそ少ないが、出土する資料の完存率が他の資料に比べて高い点が注意をひく。この坏C類においても109と112にみるように、器高差、胎土状況において差異が認められるものも確認することができ、本類もさらなる細分が可能であろうとおもわれるが、坏A類と同様の理由により、ここでは一括してあつかう。坏D類は111を唯一の例としてあげることができる。溝埋土の最上部層から出土している。

上記の4類のうち、出土層位に着目してみると坏B類・坏C類が溝底面直上、あるいは最下層・下層に集中して出土する状況を看取することができ、前述の完存率の高さ等を考慮した場合、溝使用期間中、あるいは溝廃絶直後の時期に帰属する可能性が最も高いと考えられる。

小皿の分類は以下の通りである。

小皿a類 平坦な底部から短く外方へ、直線的に立ち上がる体部を有する。

小皿b類 底部から短く内湾気味に立ち上がる体部を有する。

小皿c類 底部から大きく外反して立ち上がる体部を有する。

小皿d1類 底部から外方へ大きく直線的に立ち上がる体部を有する。

小皿d2類 体部中位に稜を有し、内湾気味に立ち上がる体部を有する。

小皿については、坏において確認されたような層位的な出土傾向はみられない。

次に、これらの編年的な位置づけについて考えてみたい。

豊後における中世土師器の編年案は1980年代から各氏により示されており、その大綱はほぼかたまりつつあるとみてよいであろう。^{ⅡF3)} 県内資料の実年代観の拠り所となっているものに大野郡野津町に所在する弘安8年(1285年)の銘をもつ八里合五輪塔と同一整地層から一括出土した資料があり、^{ⅡF4)} あまねく13世紀後半代の標識資料となっている。この八里合出土の資料と本遺跡出土資料の土師質土器を比較してみると、坏においてはA類が、小皿においてはa類・b類が形態的、あるいは法量の面において近い値を示すが、口縁端部の処理状況、粗雑化した器面調整等に後出的な要素を見いだすことができる。

以上の結果を踏まえ、今回の調査で出土している小皿に着目し、既往の編年案との対象を試みると、a類は伐株山城跡^{ⅡF5)}での小皿A類に、b類は小皿A類、c類はA類、d1類はB類、d2類B類に形態的な類似性という点ではほぼ対応するものと考えることができ、^{ⅡF6)} 両子寺での小皿編年案のⅢ期～Ⅵ期に相当する資料と考えることができよう。したがって、小皿に関する限り現時点では14世紀中頃～16世紀前半の時期幅をもって理解することが可能である。ただ、ここで注意が必要なのは、これらの下限資料となっているd2類(伐株山城跡分類の小皿B)の出現上限はいずれの編年案においても留保されており、以上の理由からこのd2類を根拠にここで下限としている15世紀後半～16世紀前半という実年代観は確定したのではなく、流動的なものであるという点に留意しなければなら^{ⅡF7)}ない。

坏については、小皿ほどスムーズな形式変化をたどることができず、個々の資料についての所産時期の検討はおこなえないが、形態的な特徴からほぼ、既往の編年観における14世紀後半から15世

紀後半といった時代幅の中で理解しうるものである。

輸入陶磁器は、玉縁状を呈する白磁碗や龍泉・同安窯系の青磁が出土しており、室町期に属する元・明代青磁の類の出土は確認されていない。

五輪塔について

2号溝（S D02）埋土中からは火輪1、水輪3の計4点の四石彫成の五輪塔片が出土している。火輪の年代は軒先の反りの形態変化により、時期比定されることが一般的であり、鎌倉時代『高さは（鎌倉時代）前期にくらべてやや高くなり、照り屋根で軒は厚く両端に向かって力強く反っている。この軒の厚さは中央部でも両端でもあまり変わらない』→南北朝時代『軒先の厚さや反りは充分であるが、後期になると軒の厚さが中央部と両端では差が甚だしくなり軒の下方の線が平らに近くなる』といった変遷を認知することができる。ここでは制作年代銘を有する県内所在の五輪塔を集成することにより、火輪ならびに水輪の形態変化の方向を模索し、当遺跡出土の五輪塔片のおおよその制作年代を検討する。

県内に所在する制作年代銘を有する主な五輪塔は以下に示すものを挙げるることができる。

・安心院町下毛最明寺	石造五輪塔	正元元年	(1259年)
・野津町八里合	一石五輪塔	弘安八年	(1285年)
・三重町赤嶺	石造五輪塔	正安二年	(1300年)
・別府市野田竈門氏墓地	石造五輪塔	嘉元四年	(1306年)
・挾間町挾間龍祥寺	石造五輪塔	康永二年	(1343年)
・千歳村新殿	石造五輪塔	貞和三年	(1347年)
・庄内町龍原	石造五輪塔	文和二年	(1353年)
・大野町長畑長寿庵	石造五輪塔	正平十一年	(1356年)
・大野町中土師	表五輪塔	正平二十三年	(1368年)
・三重町久田	石造五輪塔	康暦三年	(1381年)

ここでは、具体的な計測値を示しての法量による検討をおこなうことはできないが、上記の資料により、おおよその「形態変化の方向」を知ることができる。すなわち、火輪については、一般的に認識されているように、軒先の反りの形態変化において。また、水輪に関しても整美な球形から長円・円柱形といった形態変化を認めることができる。これらの傾向をもとに、本遺跡出土の五輪塔片の年代を推定すると、火輪、水輪とも形態の上で14世紀初頭の所産になる別府市野田竈門氏墓地石造五輪塔に先行するものと判断され、三重町赤嶺石造五輪塔と安心院町下毛最明寺石造五輪塔とのほぼ中間的な諸特徴を具備していることからおおよそ13世紀後半代の年代が考えられようか。また、今回出土した五輪塔片のうち、147・148の水輪は上下に突起をもつという特異な形態を示す。このような形態を有する水輪は管見の知る限り、賀来中学校遺跡の北西方向2.5kmに所在する宮苑

遺跡周辺に多数分布する他、熊本県陣内遺跡に例をみる以外、その例を知らない。今後出自を含めた分布範囲の検討が課題となるであろう。

2号溝の所属年代とその性格について

出土遺物の検討の結果、土師質土器に関しては、およそ14世紀後半～15世紀後半という年代観を得ることができた。しかしながら、坏D類ならびに小皿d2類の出現時期がグレーゾーンとなっている現況、あわせて溝内から出土している輸入陶磁器の様相等から、ここでは2号溝の所産時期をおおまかに14世紀後半～15世紀前半に位置づけておきたい。

溝の性格については、現時点において①用水路的な機能を有する溝、②館等に付随する堀的な溝の2つの可能性が考えられるが、①の想定は周辺の地形的な状況から首肯し難い。さらには調査によって確認された溝底面の状況からある程度の滞水が予測される点。また溝の断面形状が整美な梯形をなす点などからここでは②の可能性を指摘しておきたい。

註1) この数値は底部破片相互において徹底した接合関係の有無の確認をおこなった後の数字であるので、実際の個体実数に近い数値を示していると言える。

註2) このことは壺底部E類が数量的に少ないにもかかわらず、完存資料がその殆どを占めている点からも傍証することができるであろう。

註3) a 渋谷忠章「考察 出土遺物について 土師質土器」『伐株山城跡』玖珠町教育委員会 1984
b 菊田 徹「東九州における中世土師質土器の様相―坏・皿形土器を中心として」『専修考古学』第7号 1986
c 高橋 徹「Ⅲ おわりに＜遺物について＞」『両子寺講堂跡』安岐町教育委員会 1988
d 小林昭彦・玉永光洋「出土遺物―土器」『安岐城 下原古墳』大分県教育委員会 1988
e 小柳和宏「中世土器生産少考-文書・地名から土器生産地を探る」『大分県地方史』第143号 大分県地方史研究会1991
など

註4) 重要文化財 五輪塔 保存修理工事報告書 野津町教育委員会 1981

註5) 渋谷忠章「考察 出土遺物について 土師質土器」『伐株山城跡』玖珠町教育委員会 1984

註6) 高橋 徹「Ⅲ おわりに＜遺物について＞」『両子寺講堂跡』安岐町教育委員会 1988

註7) この要因としては、「14世紀後半から15世紀にかけての土師質土器のうち、特に15世紀代になると県内に限らず各地でその確実な資料に欠けるようであるが、」（註5文献）の言葉に代表されるようにこの時期の良好な資料に恵まれていないという点があげられよう。また、さらにはこれまでの編年案の大部分が、資料の絶対数の不足から一様に一元的な型式的傾向を追求するものであったことが大きく作用していると言えよう。近年、この点に関して小柳氏は鎌倉時代から江戸時代初頭に到る坏と小皿についてそれぞれ4形式に分類し、前述の問題解決の糸口を模索している。また氏はこれらの作業を行う中で12世紀末～15世紀の坏に二形式が存在するとし、この二者を豊後タイプと呼んだ。

（註3 e 文献）

註8) 内田 伸 「山口県内における五輪塔の編年と瑠璃光寺遺跡出土石塔の位置づけ」『山口県埋蔵文化財調査報告書第28集瑠璃光寺跡遺跡』昭和63年3月31日 山口市教育委員会

註9) 註8に同じ

註10) 昭和59年10月大分市教育委員会調査 13世紀を中心とする館跡が確認されている。

註11) 「陣内遺跡」阿蘇町文化財調査報告書第2集 熊本県阿蘇町教育委員会 1982

第V章 付章1 昭和55年度調査概要

賀来中学校遺跡は昭和55年、校舎の建て替え事業に伴い、当市委員会が調査を実施している。

今回の調査（平成3年）はこの時の調査地点から南方130mの位置に相当し、遺跡総体としての視野にたった場合、非常に深い関連性を有する。したがって、本章は過去の調査成果の概要を記載し、本年度に調査を実施した地点をも含めた当遺跡の性格究明に資することを目的とする。

- 1 調査主体 大分市教育委員会
- 2 調査期間 昭和55年6月～昭和56年1月
- 3 調査担当者 讃岐和夫（大分市教育委員会文化財室技師）
松田政基（大分市教育委員会文化財室調査員） ※ 職名は調査当時のもの
- 4 調査概要

検出遺構では、弥生時代後期～古墳時代初頭の時期に比定しうる竪穴住居跡37軒、これらの住居跡に伴うと推定される溝状遺構2条を確認した他、土墳墓13基、壺棺墓9基を検出した。

住居跡は平面プランが円形を呈するものと、方形を呈するものが存在する。時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭の時期幅が考えられ、また、住居間の切り合い関係等から永続的な集落形成を看取できる。

以下に主要遺構の概要を略述する。

1. 溝状遺構

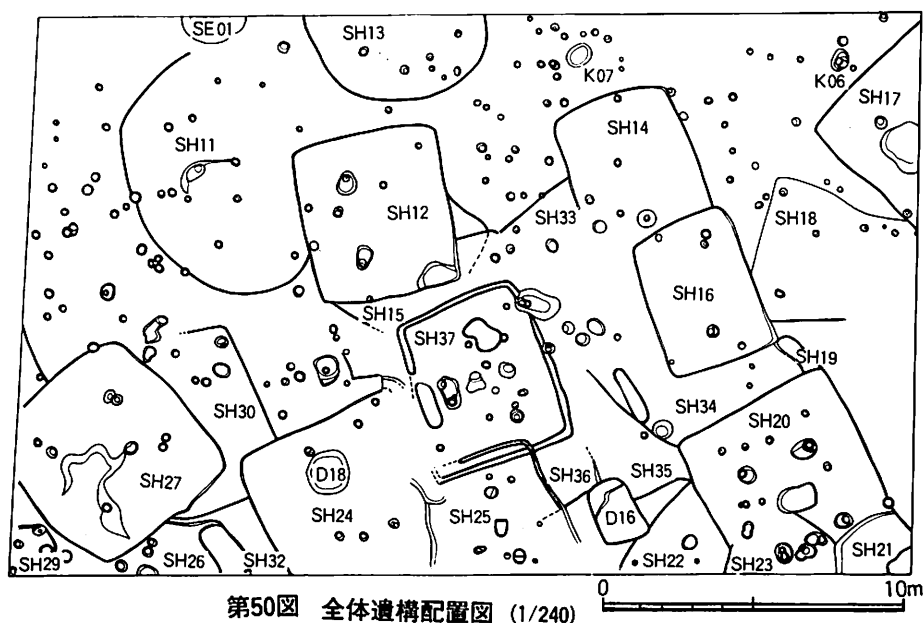
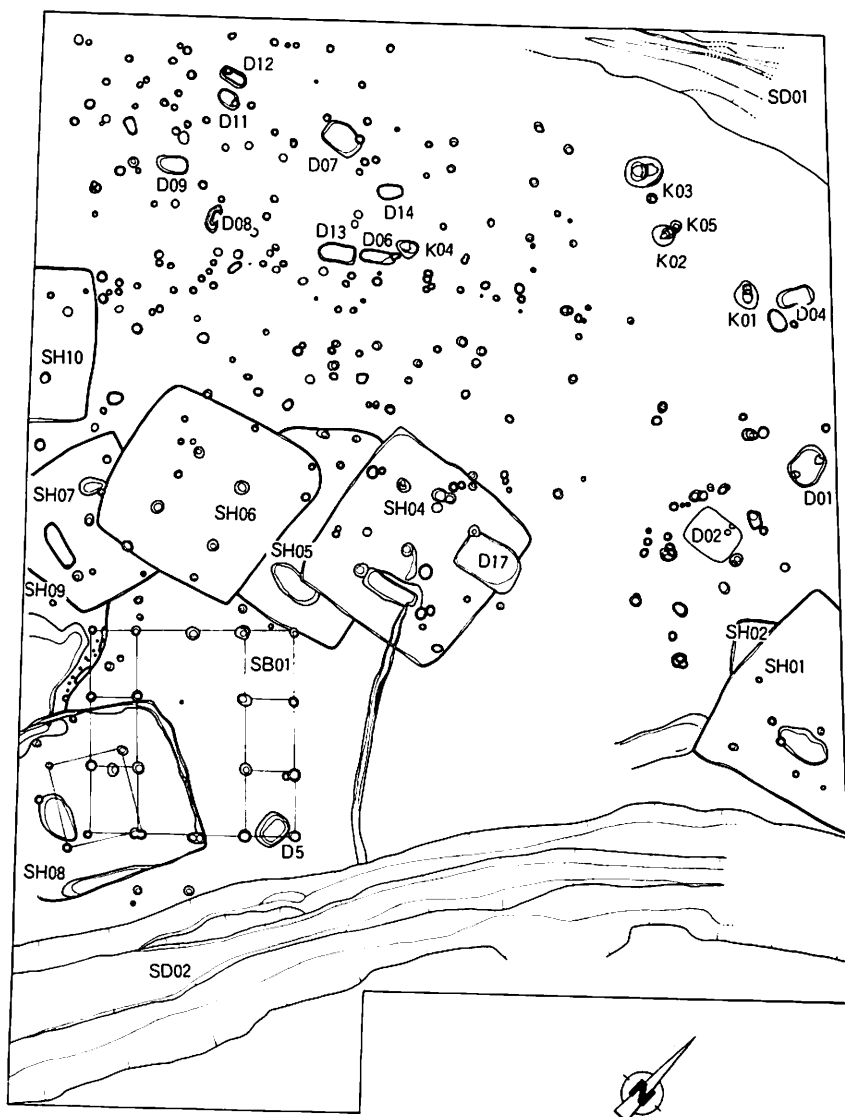
溝状遺構は調査区の西端、および中央部において調査区を横走するかたちで検出された。

1号溝

調査区西端に位置する1号溝は大部分が調査区外に存し、そのため調査もごく一部分の調査に終始しているため、具体的内容に関しては不明な部分が多く、出土遺物も2号溝に比して少ない。しかしながら、出土する土器は平底を呈するものが多く、明らかに2号溝出土遺物とは様相を異にする。各器種・各部位の細部に関しても相対的に2号溝出土土器よりも古相の特徴を具備しており、溝機能の停止時期を2号溝に先行する時期に想定することが可能である。

2号溝

2号溝は検出面での幅約4m、現存深度約1.6mを測り断面形はV字形をなす（第53図）。さらには、溝内堆積土層のうち、比較的下位に位置するIX層灰色粘質土層、ならびに基盤土（地山土）を含むXI層黒灰色粘質土層の堆積状況から、溝内側からの多量な土砂流入が想定され、溝機能時に土塁あるいは堤状の施設が存在を推慮することができる。同様な状況は大分市大字横尾に所在する多武尾遺跡^{（附1）}においても確認されており、市域内では2例目の検出事例となる。溝は埋土内に多量の土



第50図 全体遺構配置図 (1/240)



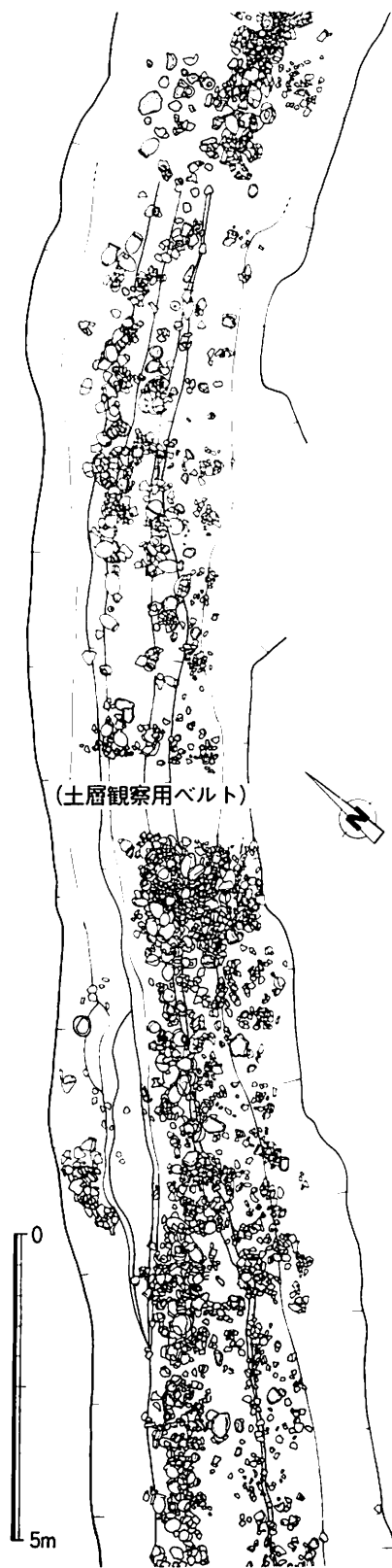
第51図 SD 01遺物出土状況図 (1/120)

器を内包し、出土土器は複合口縁をもつ壺形土器、高坏、鉢、小型丸底壺、小型鉢、甑、ミニチュア土器など多彩な内容を有している。出土土器から最終廃棄時期を弥生時代最終末あるいは古墳時代初頭の時期として大過ないであろう。これは検出住居跡の最終段階の推定年代と略一致する。すなわち当集落の衰退消滅とともにその機能を停止し、埋没していったと推定される。

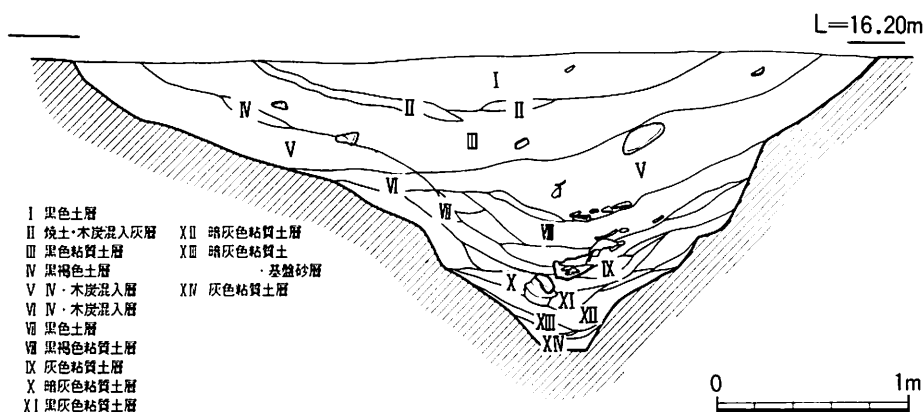
出土遺物

今回は2号溝、住居跡内出土遺物の一部を図化し掲載した。

1～5はいわゆる小型丸底壺と呼称される一群である。1は口径9.1cm、推定器高7.4cmを測る。底部を一部欠損しているが、残存部分により全体形状の復元が可能である。内・外面とも明褐色を呈し、ハケ目、横方向を主体とするヘラミガキにより仕上げられる。2は黄褐色を呈し、内・外面ともヘラミガキによる最終調整が施される。胎土には精練された粘土が使用され、器壁は極めて薄く仕上げられる。6は高坏の坏部である。内・外面とも赤褐色を呈し、器表面にはスリップ（化粧土）が塗布される。7・8は高坏の脚部片である。ともに赤色顔料が塗彩され、器表面はヘラミガキにより仕上げられる。9は甕形土器である。内・外面とも淡黄褐色を呈し、内面上部にはヘラケズリ痕が認められる。口縁端部は跳ね上げたように粘土がつまみ出され、胴部はやや肩が張り丸底をなす底部にいたる。本資料についてはこれらの形態的特徴ばかりでなく、器壁の薄さや



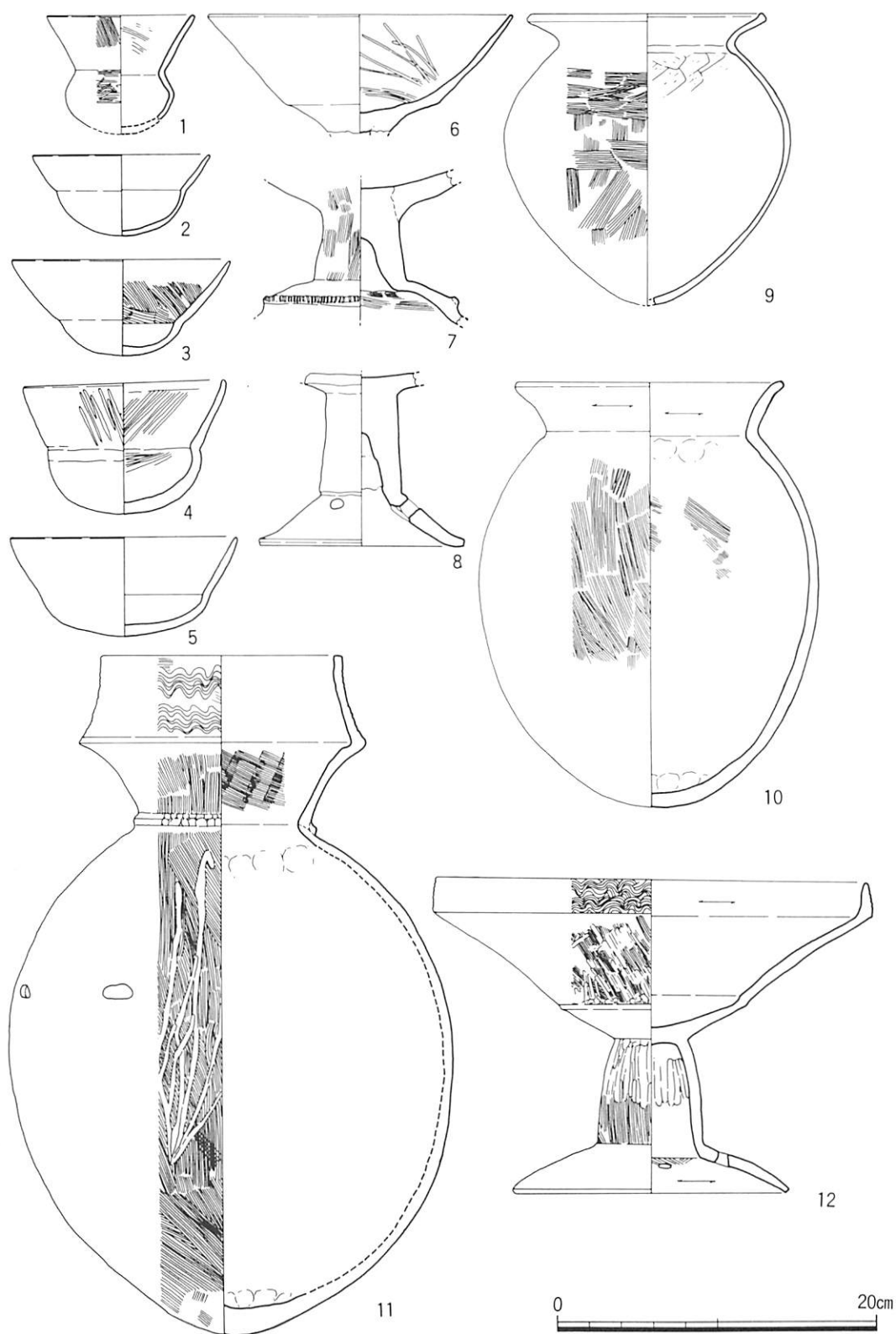
第52図 SD 02遺物出土状況図 (1/120)



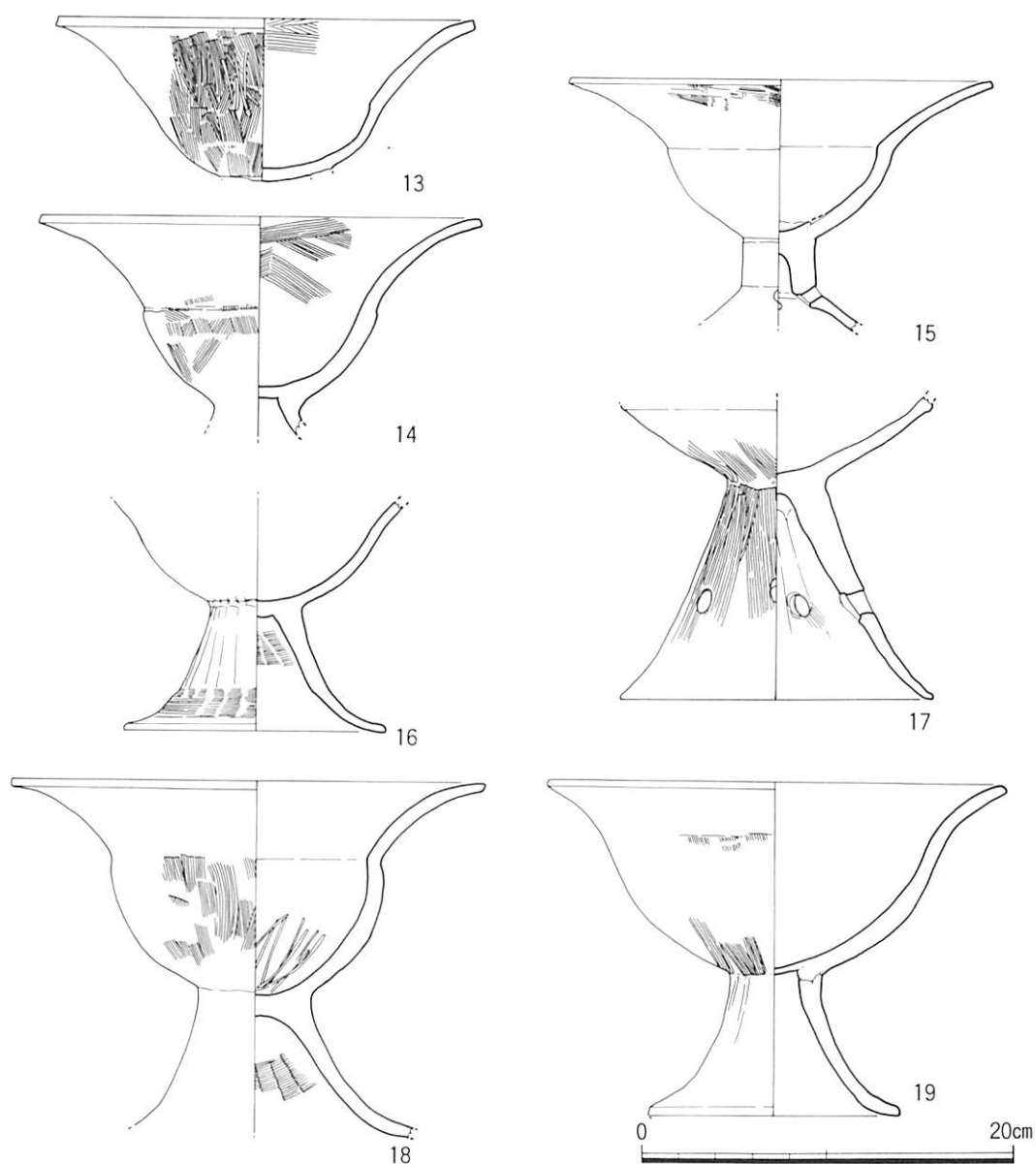
第53図 SD02土層断面実測図 (1/40)

胎土の様態においても他の資料と異なっており搬入品である可能性を指摘できる。10も甕形土器である。前代の甕形土器に比して球形胴化は進んでいるものの、随所に在地土器の特徴を色濃く残している。11は複合口縁を有する壺形土器である。底部は丸底を呈し、胴部も球形胴化が進行している。胴中位に2か所の焼成後穿孔が認められる。複合口縁部に施紋される櫛描波状文は単位7条の櫛状施紋具によるもので、土器を正置した位置関係において右回りに施紋されている。12は高坏の完存品である。坏部は脚接合部から外方へ直線的に開き、口縁端部において上方へ立ち上がる。口縁部外面には単位7条の櫛描波状文が2条施紋される。13・15～17は2号溝埋土内から出土した高坏である。外方へ大きく開く口縁部を有し、坏部は鉢を想起させるような形状を呈する。脚部には15のように筒状の脚に屈曲部を介して外方へ大きく開くものや、17のように接合部から脚裾部に開く脚部など、数タイプのものの存在を認めることができる。形態的に近似するものが、8号住居跡(14)、14号住居跡(19)、33号住居跡(18)からも出土している。

20～39はいわゆるミニチュア土器と呼ばれる一群である。2号溝埋土内の他、数軒の住居跡中からも出土が認められる。20～27は鉢様の形状をなすてづくね土器である。器内・外面には指頭痕が明瞭に残る。最も出土量が多いのがこのタイプであり、口径が2cm前後のものと、4cm前後のものに大別することができる。口縁部上面も最終調整をおこなわず、波状を呈したままのことが多い。30・35・36は当該期の複合口縁壺を模倣したものである。30は2号溝から出土したもので、赤褐色を呈する。指頭痕を随所に残し、仕上げのための最終調整は行われていない。35は18号住居跡から出土した。長胴気味の体部に平底風の底部を有する。内・外面とも赤褐色を呈し、器表面はナデにより仕上げられている。36は調査地廃土内から出土した。球形胴を有し、器外表面には輪積みの痕跡が認められる。基本的にナデにより仕上げられるが、一部にへら状工具による調整痕がみられる。完形品である。29・33・37・39は甕形土器を模倣したとおもわれるミニチュア土器である。29は安定した平底をなし外方へ大きく開く口縁部を有する。14号住居跡から出土した。33は24号住居跡から出土した。底部は平底風の尖底をなす。内・外面とも黄褐色を呈し、全面ナデにより仕上げられる。37は2号溝埋土内から出土したミニチュア土器である。胴部は長胴形をなしており、口縁部直下に一条の三角突帯を巡らしている。形態的な特徴は前章で分類した甕形土器Ⅲ類に酷似する。口縁部の一部を欠損する。



第54図 出土遺物 ① (1/4)



第55図 出土遺物 ② (1/4)

註1)「大分市多武尾遺跡 調査概報」 大分市教育委員会 1982

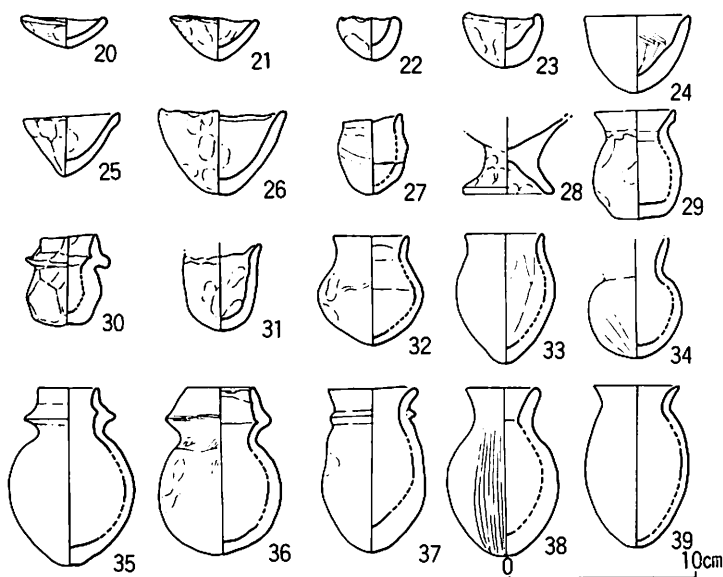
2 壺 棺 墓

壺棺墓は長楕円ないし隅丸の平面プランを有する墓壇に斜め方向に墓棺を埋置する。墓棺は壺と壺、壺と鉢などの組み合わせによるもので、いずれも小型である。小児用と推定される。また、副葬品等は皆無である。

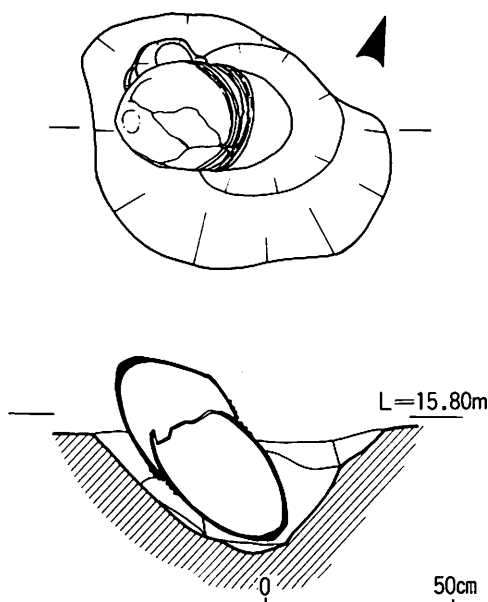
1号壺棺 (第57・58図)

調査区の北西隅、1号溝 (SD01) の内側に位置している。墓壇は上部の削平はあるものの、0.78m×0.65m、深さ0.3mの規模を有し、検出面での平面形は不定形を呈している。床面は径約0.4mの円形をなし、墓壇構築に際して必要最小限の掘削を意図している。

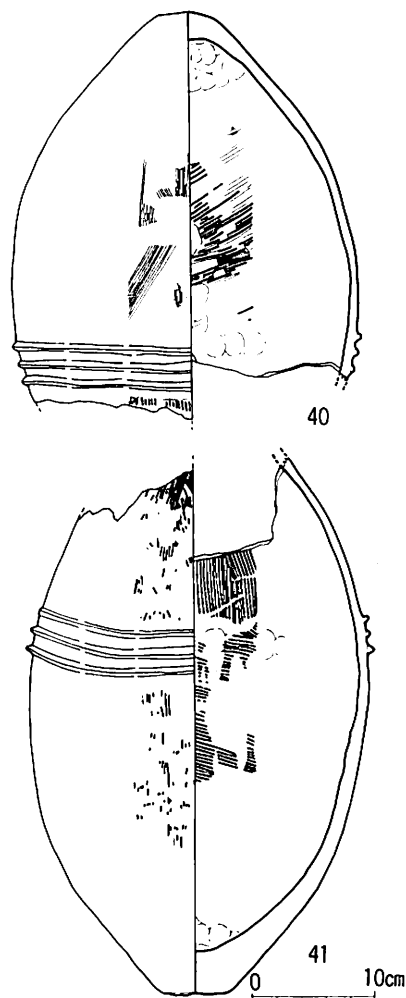
棺は小児用と推定され、長軸を東西方向にとり、約47°の傾斜をもって墓壇内に挿入している。上棺と下棺には壺形土器の胴部と口縁部を打ち欠いたものを使用し、合わせた状態での全長94cm、胴部は径約26cmであった。壺の胴部には断面三角形の突帯が三条巡っており、底部は平底気味のものである。



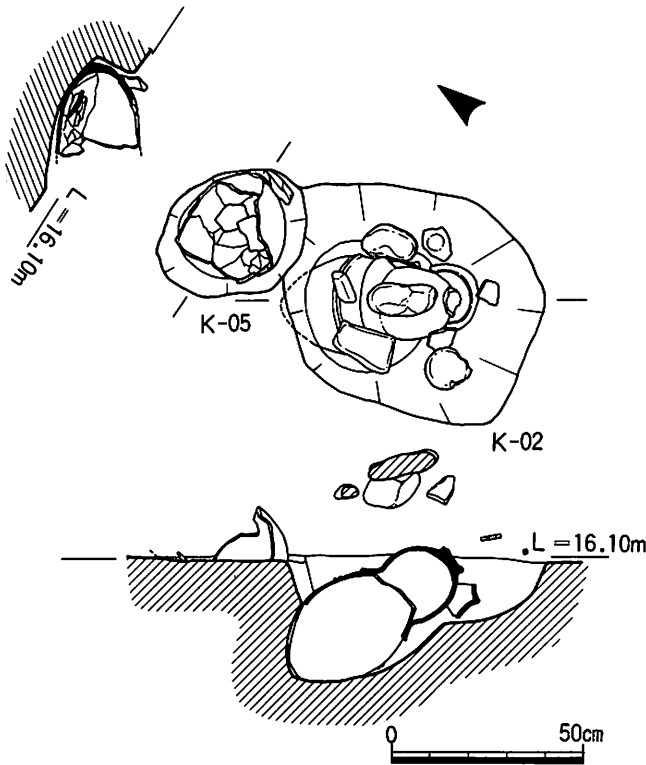
第56図 出土遺物 ③ (1/4)



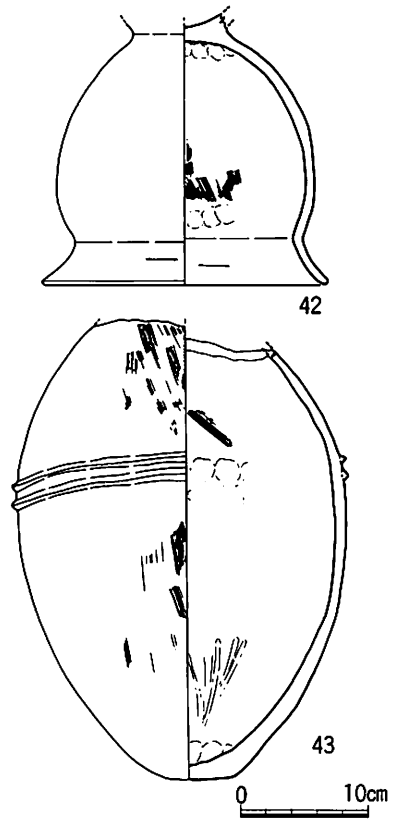
第57図 K-01出土状況平面・断面実測図 (1/20)



第58図 1号棺 (K-01) 実測図 (1/6)



第59図 K-02・K-05出土状況平面・断面実測図 (1/20)



第60図 2号棺 (K-02) 実測図 (1/6)

40は胴部最大径27.8cm、底径4.4cmを測る壺形土器である。上端部を打ち欠き上棺として利用する。内・外面とも黄褐色を呈し、ハケ目によって仕上げられる。

41は内・外面とも明褐色を呈する壺形土器である。肩上部を打ち欠き下棺として使用する。胴部最大径27.8cm、底径5.3cmを測る。肩部以下は完存する。

2号壺棺 (第59・60図)

5号壺棺と切り合い関係にあり、3号棺の東側に位置している。墓墳の大きさ0.68m×0.58m、深さ0.33mで2段に掘られた楕円形を呈している。

棺は、大きさから小児用と推定され、長軸を南東から西北方向にとり、水平より約33°の傾斜をもって据えられている。上棺には脚部を欠いた鉢形土器を用い、下棺の口縁部を欠いた壺形土器に覆口させている。上棺には欠いた複合口縁部を敷いて押さえとし、さらには、墓墳上面に5つの礫が載せられている。下棺となっている壺の胴部には断面三角形を呈する突帯が二条巡り、底部は平底をなしている。

42は底部の一部を欠く鉢形土器である。口径22.6cm、胴部最大径20.2cmを測る。内・外面とも淡黄褐色を呈し、器面は基本的にナデにより仕上げられる。43は下棺に使用された壺形土器である。内外面とも赤褐色を呈し縦方向のハケ目、ナデにより仕上げられる。

3号壺棺（第61・62図）

当遺跡の中で一番大型の壺棺墓である。墓壇は上部削平を受けてはいるものの、1.15m×0.95m、深さ0.3mの規模を有する隅丸長方形を呈している。

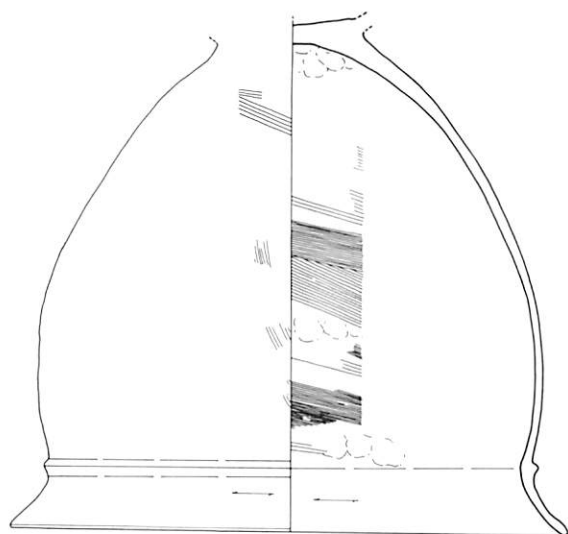
棺は小児用と推定され、長軸を南北方向にとり、約20°の傾斜をもって据えられる。上棺には脚部を欠いた鉢形土器を使用し、下棺には口縁部を打ち欠いた壺形土器を使用する。また、上棺には2号棺と同じく、礫数点と欠いた複合口縁部を敷いて押さえにしている。

上下合わせた棺の長さ85cmを測り、上棺となる鉢の口縁部直下に一条の突帯が巡っている。

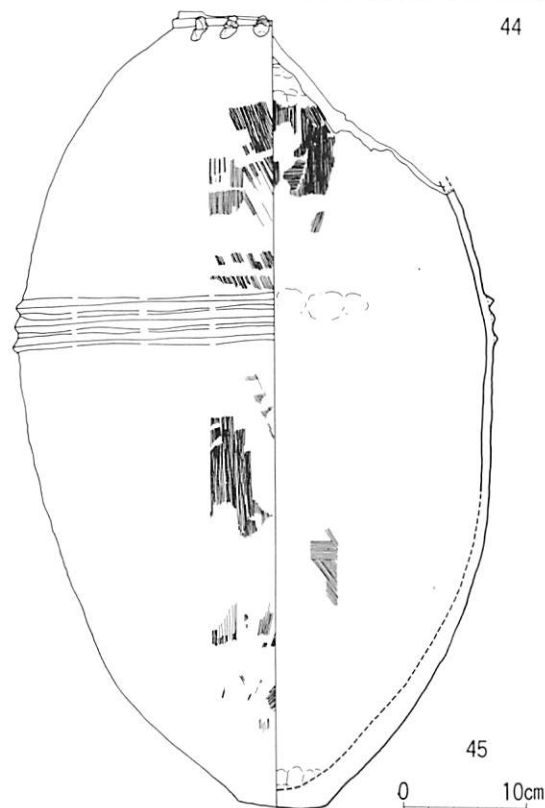
下棺の壺には頸部に一条、胴部に三条の三角突帯が巡っている。底部は平底を呈している。

44は上棺に使用された鉢形土器である。全体に製作時のユガミがみられる。内外面ともに淡黄褐色を呈し、ヨコナデ、ハケ目により仕上げられる。焼成は良好である。

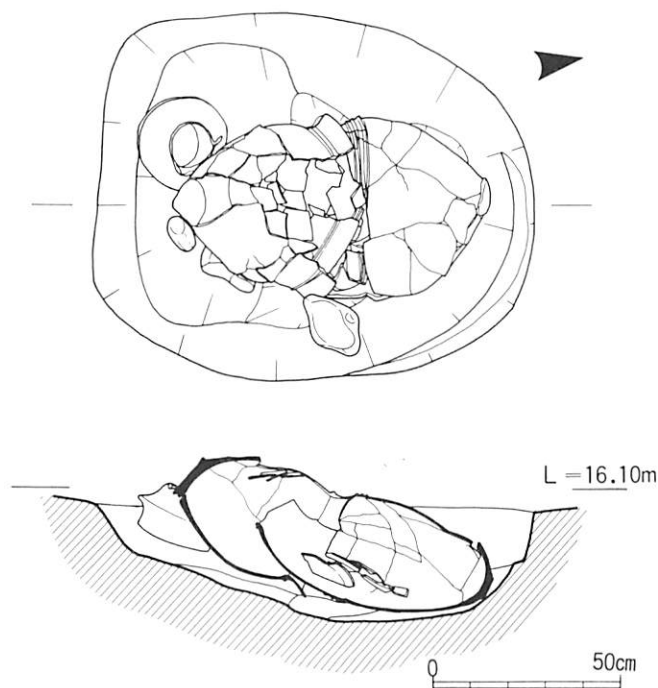
45は下棺に使用された壺形土器である。内外面とも淡黄褐色を呈する。胎土には比較的精良な粘土が使用され、焼成は良好である。



44



45



L = 16.10m

0 50cm

第61図 K-03出土状況平面・断面実測図 (1/20)

第62図 3号棺 (K-03) 実測図 (1/6)

4号壺棺

調査区の西側隅に位置し、6号土壙、14号土壙に近接する。墓壙は0.60m×0.65m、深さ0.4mの不定形をなしている。棺は小児用と推定され、長軸を南北方向にとり、底面は必要最小限の掘削をおこない約11°の傾斜をもって埋置する。

上棺には胴部を欠いた壺形土器を使用し、下棺の口縁部を欠いた壺形土器に覆口する。合わせた状態での全長60cm、胴部径35cmを測る。

上棺に使用されている壺は、比較的小さな安定した平底を有し、土圧によると思われる亀裂が上面を中心に無数にみられる。

下棺に使用されている壺は、頸部直下まで打ち欠き土器棺としての機能を担っている。底部は安定した平底を呈しており、胴部最大径のやや上位に断面三角形の貼りつけ突帯を3条巡らしている。また、土壙底面に接する棺下面の外器面には広い範囲にわたって剝離が認められた。

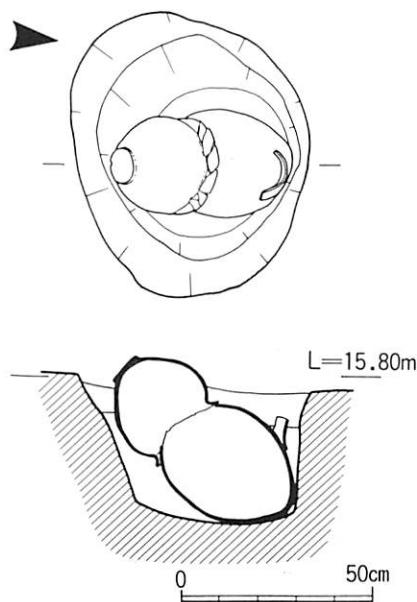
5号壺棺（第59図）

2号棺と切り合い関係をもち、墓壙はかなりの削平を受けている。墓壙の大きさは0.4m×0.33m、深さ0.12mを示し、平面形は楕円形を呈している。

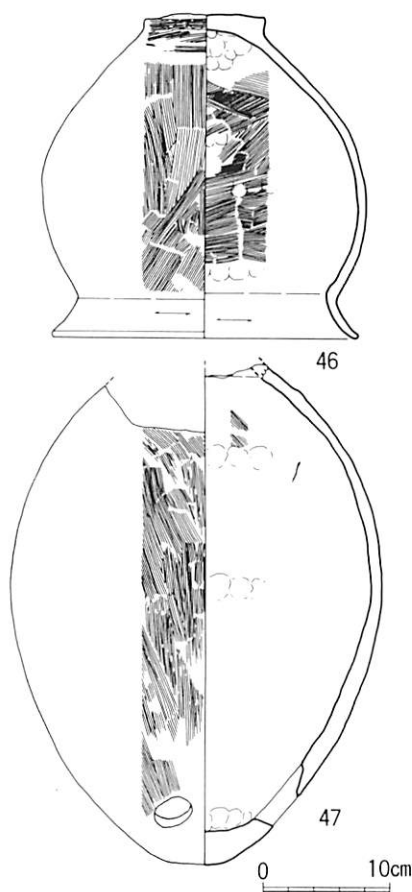
棺はその大きさから小児用と考えられ、長軸を東西方向にとり、約23°の傾斜をもって埋置される。上部の状況は破損しており不明である。

6号壺棺（第63・64図）

墓壙は0.72m×0.62m、深さ0.40mの規模を



第63図 K-06出土状況平面・断面実測図 (1/20)



第64図 6号棺 (K-06) 実測図 (1/6)

有し、平面プランは楕円形を呈している。

棺は小児用と推定され、長軸を南西から北東方向にとり、39°の傾斜をもって挿入される。上棺には脚部を欠いた鉢形土器を使用し、下棺には口縁部を欠いた壺形土器を使用する。合わせた状態での棺長58cmを測る。

46は上棺に使用された鉢形土器である。口径24.25cm、器高25cm、底径9.5cmを測る。器表面は内外面ともヨコナデ、ハケ目により仕上げられ、淡黄褐色を呈する。底部から胴下半の一部に黒斑がみられる。

47は下棺に使用された壺形土器である。内外面とも淡黄褐色を呈し、胴下半には焼成後に行われた穿孔が認められる。器表面はハケ目、ナデにより仕上げられる。

9号壺棺

墓墳はかなり削平されているが、現状で0.72m×0.57m、深さ0.28mを測り、平面形は楕円形を呈している。棺は小児用と推察され、直立気味に埋置される。下棺には口縁部から胴部の一部を欠いた壺形土器を使用し、上棺に鉢形土器を用いて覆口する。合わせた状態での棺長40cmを測り、上棺に使用される鉢には刻み目突帯が巡らされている。

10号壺棺・11号壺棺

両者は切り合っており、墓墳については、10号壺棺で0.80m×0.63m、深さ0.2mを測り、墓墳の平面形は楕円形を呈している。11号壺棺の墓墳は0.45m×0.45m、深さ0.15mの円形を呈する。両棺ともに小児用と推定されるが、後世の削平により破損が著しいため、全容は不明である。

以上が1次調査で出土した壺棺墓の概要である。棺に使用された壺形土器は胴部に二条ないし三条の三角突帯を巡らすものと突帯をもたないものの2者が認められる。いずれの底部も凸レンズ状へ移行する前段階の若干安定性を欠く平底を呈する。これらの特徴は既往の編年観に従えば豊後編年Ⅱ期～Ⅲ期の範疇において理解され、出土した壺棺墓群は後期の中葉～後葉の所産と考えられよう。ちなみに、前述した1号溝から出土した壺形土器には同タイプのものが数多く散見され、両者が同時期の所産である可能性も指摘できよう。

3. 土 墳 墓

土墳墓は平面プランが長楕円あるいは隅丸の長方形を呈する。副葬品はまったく伴わない。

5号土墳墓

調査区のほぼ中央、2号溝の西側に位置する略長方形プランを呈する土墳墓である。規



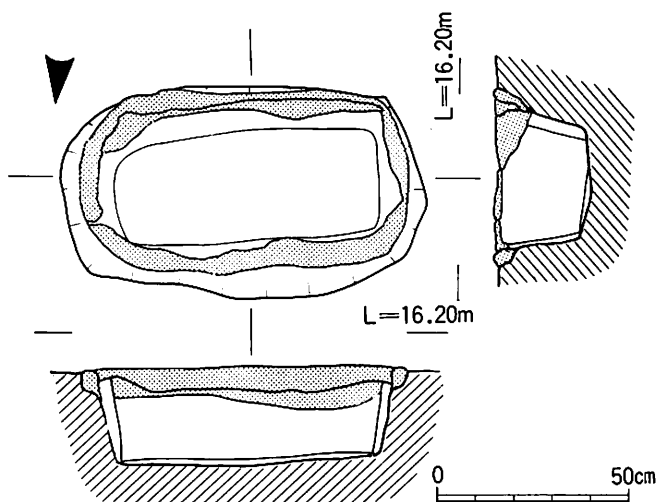
写真2 5号土墳墓底面検出状況

模は検出面において1.9m×0.84mを測り、現存深度0.35mを有す。検出面から約0.27mのところに二段堀のような状況が窺え、底面には白色粘土が環状に分布する。底面はフラットであり、平面プランの規模は0.86m×0.57mを測る。土壌内堆積土層は上層・黒褐色土層（炭粒を少量含む）と下層・黒茶褐色土層（炭粒を少量含む・硬質）の2層に区分されるがともに遺物の出土は認められない。

12号土壌墓（第65図）

調査区の南西部分、11号土壌と並行して構築される。

墓墳の規模は0.95m×0.55m、深さ0.25mを測り、平面プランは長方形を呈している。長軸をN-30°-Eの方向に向けて構築する。土壌の周囲には白色粘土の分布がみられ、これらは板状の蓋を密閉するために扶持されたものと推定される。同形態の土壌墓として5号土壌がある。出土遺物は皆無である。



第65図 12号土壌墓(D-12)平面・断面実測図 (1/20)

表14 遺物観察表 ⑩

遺物 番号	印 番号	出土 遺構	土 器	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
001	54	SD02	小 短 瓶	砂粒	細粒	明 褐 色	明 褐 色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヘラミガキ	9.1	(7.4)	—	—	
002	54	SD02	小 短 瓶	砂粒	微粒	黄 褐 色	黄 褐 色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10.8	5.1	—	—	全体には精練された粘土 器壁は極めて薄い
003	54	SD02	小 短 瓶	砂粒 金ウソモ	微粒	灰 褐 色	灰 褐 色	ヨコナデ ハケ目 ヘラミガキ	ヨコナデ ナデ	13.8	6.1	—	—	内側下位に陵をつけ内湾気味に外植する口 縁を有す 底部は平底気味の丸底
004	54	SD02	小 短 瓶	砂粒 金ウソモ	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	12.4	8.2	—	—	
005	54	SD02	小 短 瓶	微砂粒 金ウソモ	微粒	灰 褐 色	灰 褐 色	ヨコナデ ヘラミガキ	ヨコナデ	13.9	6.3	—	—	刺離が激しく器面調整は明瞭でない
006	54	SD02	高 杯	砂粒	微粒	赤 褐 色	赤 褐 色	ヨコナデ ナデ ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラ削り ヘラミガキ	18.9	—	—	—	表面にスリップと思われるものを塗る
007	54	SD02	高 杯	砂粒	微粒	赤 褐 色 (赤色顔料)	赤 褐 色 (赤色顔料)	ハケ目 ヘラミガキ	ハケ目 ヘラミガキ ハケ目	—	—	—	12.9	素地・薄赤黄色
008	54	SD02	高 杯	砂粒	微粒	赤 褐 色 (赤色顔料)	赤 褐 色 (赤色顔料)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	17.5	—	素地・薄黄灰色
009	54	SD02	壺	砂粒 金ウソモ	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヘラケズリ	ナデ ハケ目	14.6	18.0	20.9	—	カーボン付着 底部丸底
010	54	SD02	壺	砂粒	微粒	淡 黄 色	淡 黄 色	ヨコナデ ハケ目 ヘラナデ	ヨコナデ ハケ目	16.6	26.5	27.8	—	黒斑あり ハケ目 (8~9本/cm)
011	54	SD02	壺	砂粒	微粒	赤 褐 色 淡黄白色	赤 褐 色 淡黄白色	ハケ目	ハケ目 ヘラナデ	14.7	42	—	—	櫛掻波状文 単位7本・2条 穿孔は焼成後穿孔 ハケ目 (8~10本/cm)
012	54	SD02	高 杯	砂粒	微粒	淡 黄 色	淡 黄 色	ヨコナデ ナデヘラ	ハケ目 ヘラミガキ	27.2	19.3	—	17.3	櫛掻波状文 単位6本・2条 (完形)
013	55	SD02	台 皿	微砂粒 金ウソモ	微粒	淡赤黄灰色	淡赤黄灰色	ナデ? ミガキ?	ヨコナデ ハケ目 ヘラミガキ	22.4	—	—	—	
014	55	SD08	台 皿	微砂粒 金ウソモ	微粒	赤 褐 色 (赤色顔料)	赤 褐 色 (赤色顔料)	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目	24.4	—	—	—	素地・薄黄褐色
015	55	SD02	台 皿	砂粒	微粒	淡赤黄褐色	淡黄灰色	ヘラミガキ	ヨコナデ ハケ目 ヘラケズリ	22.8	—	—	—	
016	55	SD02	台 皿	微砂粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ヨコハケ ナデ	ヘラミガキ ヨコハケ目	—	—	—	14.1	
017	55	SD02	台 皿	砂粒	微粒	黒 色	灰 黄 色	ハケ目 ナデ	ハケ目	—	—	—	16.7	通し穴は6ヶ所
018	55	SH33	台 皿	砂粒	微粒	赤 褐 色 (赤色顔料)	赤 褐 色 (赤色顔料)	ヘラミガキ	ハケ目 ヘラミガキ	25.6	—	—	—	素地・薄黄灰色
019	55	SH14	台 皿	砂粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ヘラミガキ	ハケ目 ヘラミガキ	24.8	17.7	—	13.4	
020	56	—	て ぶ く ね	砂粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	指オサエ	指オサエ	4.6	1.6	—	—	

表15 遺物観察表 ⑪

遺物 番号	押図 番号	出土区 出土 遺構	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴 部 最大径	底径	
021	56	SH16	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ	指オサエ	4.5	2.2	—	—	
022	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ	指オサエ	3.3	2.3	—	—	
023	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	4.1	2.6	—	—	
024	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	灰 褐 色	灰 褐 色	へら状工具 で調整	ナデ (へらミガキ?)	6.7	4.0	—	—	
025	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ	指オサエ	5.1	3.2	—	—	
026	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ	指オサエ	6.7	4.4	—	—	
027	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	黒 褐 色	黒 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.1	3.7	—	—	
028	56	—	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	—	—	—	4.8	製塩土器?
029	56	SH14	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	4.3	5.6	4.8	—	甕の模倣?
030	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.1	4.6	4.2	2.1	複合口縁壺の模倣
031	56	SH12	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	(4.0)	4.5	3.7	—	甕の模倣
032	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	黄 褐 色	黄 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.9	5.7	5.4	—	輪積み痕がみられる
033	56	SH24	てづくね	細砂粒	細粒	黄 褐 色	黄 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	4.2	6.8	5.1	—	
034	56	SH24	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ へら削り	—	—	4.9	—	
035	56	SH18	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.2	9.1	6.5	—	
036	56	—	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.4	8.2	6.3	—	輪積みの痕跡が認められる へら状工具による調整痕
037	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	黄 褐 色	黄 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	(4.6)	7.9	5.3	—	甕の模倣
038	56	SD02	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	3.9	8.5	6.0	—	
039	56	SH06	てづくね	細砂粒	細粒	赤 褐 色	赤 褐 色	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	(4.3)	8.4	5.5	—	甕の模倣
040	58	K-1	徳箱	砂粒	細粒	黄 褐 色	黄 褐 色	指オサエ ハケ目	ナデ ハケ目(タテ)	—	—	27.8	4.4	胴上部打ち欠き 黒斑あり ハケ目 (5~6本/cm・7~8本/cm)

表 16 遺物觀察表 ⑫

[illegible]

第Ⅵ章 付章2「賀来荘」の時代—中世の賀来地域—

古代、大分郡内には九郷が置かれたが、賀来地域はそのうちのひとつ阿南郷に所属した所である。阿南郷は九郷のうち最大の郷域をもったもので、東は荏隈郷に接し、西は現挾間・庄内町域に広がる。賀来地域は郷の東端、大分川の河流沿いに開けた沖積平野を占めて、荏隈郷に境するところに位置する。

ここは大分郡内では最も早くから開かれ、弥生時代以来の生活痕が色濃く残されている地のひとつである。律令時代には荏隈・笠和郷などと同じように条里地割が施され、豊かな生産の場を提供した。地区の南端に位置する国分には「好地」を^{えう}択んで建立された豊後国分寺が置かれた。賀来地区は生産の好地ばかりでなく、大分川による水運に加えて、高坂駅（上野丘陵に位置した）と由布駅（現由布院）を結ぶ、いわゆる太宰府官道が通過した古代交通の要地でもあった。豊後国衙との距離も約三キロメートルと近い。賀来地域は、そうした「好地」であった。

賀来荘はこの好地に成立した由原宮（柞原八幡宮）領の荘園である。阿南郷の中から分出した荘園であり、賀来地区を中心にして西は石城川・由布川地区、北は西大分の生石付近までを含み、また賀来地区の対岸（大分川右岸）の小野津留までを荘域とする。

成立の経緯については詳細でないが、長徳四年（998）の由原宮の三十三年を一期とする宮社の造替に際して、造替の「料所」とするために由原宮に寄進されたものと伝える。（「賀来社大宮司平経妙申状案」）。しかし、史料上、荘名の「賀来御庄」が初見されるのは治承元年（1177）であり、「経妙申状案」にいう寄進の時期よりも約二世紀も下がってからである。このため、長徳四年成立説にはいささかの疑義を差しはさまねばなるまい。一方、長寛二年（1164）の文書には、従来阿南郷内に所在した由原宮の大般若修理料田一町について、これを「大般若修理田一丁在賀来」とする記載がみえるようになり、「賀来」地名が初めて登場する。つまり、阿南郷から分出した形で賀来が登場する訳である。加えて、鳥羽院政の頃（大治四年・1129—保元元年・1156）に由原宮大宮司大神広房が勅勘を蒙って領家職を没収されたとする史料（前出「経妙申状案」）とも併せ考えれば、すでにこの十二世紀前半頃の時期に賀来荘の成立を求めたとしても大過ないものと思われる。

さて、弘安図田帳によれば賀来荘は次のように記載されている。

「賀来荘貳百三十町

本荘貳百町 領家一條前左大將家室家

地頭職賀来五郎惟永法名願連

平丸名三拾町 領家山法師備後僧郡幸秀 地頭同前」

これから明らかなように、賀来荘は本荘200町と平丸名30町から成った荘園である。本荘はともかく、平丸名という名田については平丸保とも呼ばれるが、その成立の経緯については詳らか

ではない。いずれにしろ地域有力者（私領主で平丸と称した人物か。「平丸郡司藤原貞助」なる人物が確認される。）の私領となっていた土地であろう。なお、平丸名は阿南郷に所在するという記載史料もあることから、たぶん賀来荘と阿南郷の境付近に所在した名田と考えられよう。

賀来荘の「職」についてはどうであろうか。上記の図田帳では先ず、領家職について弘安八年（1285）当時「一条前大将家室家」、すなわち一条実経の室家・平成俊女であるものと思われる。本荘の領家職はもともと、由原大宮司家の大神氏が相伝していたものであるが、前述のように大神広房が鳥羽院の勅勘によって領家職を没収されたのに伴い、これ以後平家一門の手を経て一条実経に相伝されてきたものである。つまり、由原大宮司の手から一旦離れた領家職は回復されることなく中央貴族に相伝されていき、由原宮はこのため、さらに下級の職である預所職（あるいは雑掌）に甘んじなければならなかった。しかし、足下にある荘園として、これから得られる経済的収益は大きく、実質的な支配は由原宮がもっていた。

ところで、弘安図田帳によれば賀来荘の地頭職を所帯したのは本荘、平丸名ともに賀来五郎惟永法名願連なる人物とする。これによって地頭職は在地領主たる賀来氏が掌握していたことが明白である。この賀来氏はもともと豊後大神氏の流れを汲む佐伯氏の一族であって、後述のように中世には賀来荘を地盤に活動する。今次の発掘に確認された断面・梯形を呈する溝状遺構を伴う居館跡らしい遺構が、賀来氏とかわるものであらうと推定されるのは当然である。

賀来氏が賀来荘と関係をもってくるのは、賀来氏の祖・佐伯惟家が当荘の下司職を取得したのに始まり、次いで惟家にこれが相伝された後、三代の惟綱（法名頼阿あるいは順阿）の時にになって貞応三年（1224）に地頭に補されたという経緯をみることができる。この地頭補任の背景となったのは、いうまでもなくこの三年前に起きた承久の乱であり、この乱に対する勲功の賞として地頭職を手に入れることができたわけである。賀来氏は、いわゆる新補地頭として賀来荘内にその地位を得たのである。こうして賀来荘では、賀来氏が地頭職を帯するようになって以来、在地領主としてその力を強めていくことになる。このため、これまで実質支配を進めた由原宮との鋭い対立が起きることは当然の成り行きであった。なお、賀来氏の居館については今回の溝状遺構に近接（300メートル位北）した所にある天満社の社地一帯と伝える地元の言い伝えがあり、この付近が賀来神社（由原宮の関連社）の社地であることと合わせて、おそらく、居館の営まれた所であると推察してよいであろう。

賀来氏が賀来荘の在地領主として活動した形跡についてはどうであろうか。結論からいえば、賀来氏による賀来荘の侵略の動きこそ、賀来氏の勢力伸長の足跡といえる。賀来惟綱の時にそれまでの下司職に代わって地頭職を得たこと―これが賀来氏の活動の原動力、つまり由原宮と対立する中で在地領主権を強化拡充していく背景となるのである。

嘉禄二年（1226）、宝治二年（1248）の関東下知状は、賀来氏の侵略に耐えかねた由原宮がこれを幕府に訴えたことに対する、幕府側の惟綱に対する下知を伝えた文書である。これによれば惟綱の「非法」のあらましは次のようである。

（1）鬼丸（惟綱）は由原神人（賀来荘の荘民）の給田を奪って自分の所従に宛行い、神馬を押領

して五月会を違乱した。

(2) 最勝講田、仁王講田を押領して所従に宛行った。

(3) 小野津留郷に加徴(年貢付加米)を賦課した。

(4) (課役賦課など) 荘民を不安にずる行為をおこなった。

下知状はこれらの非法の停止を指令したものであるが、惟綱はほとんどこれを意に介さず、この後も例えば、文永十一年(1274)蒙古来襲に際して、由原宮異国降伏祈祷を執行するための供料米を抑留して祈祷が行えないという前代未聞の事態を引き起こしたり、また建治3年(1277)には多勢を催して由原宮に乱入し、傷害事件を起こして神事を妨げるといった非法を繰り返している。

こうした非法は次の惟永にあってはいっそうひどく、神事の停滞や社殿の造替不可能、苅田狼藉といった乱行が繰り返されて社務の執行に重大な支障を来たようになる。こうした賀来氏の非法も、賀来氏の側からすれば、在地領主権の拡大の指標に他ならなかった。

ところが、こうした非法の数々は南北朝期に入るとほとんどみられなくなってくる。その理由は守護大名大友氏が由原宮に対する保護の動きをとるようになったことが関係している。すなわち、大友氏は南北朝期になると戦勝祈願を始めとする由原宮崇敬の態度を強め、豊後一の宮としてこれを手厚く保護するようになっていった。この傾向は時代を追うごとに顕著になり、賀来氏はそうした大友氏の動きの中で、戦国大名化していく大友氏の家臣として臣従化していく。その中で十八代大友親治の頃には賀来氏は由原宮大宮司職を務めるようになり、また、二十一代義鎮(宗麟)の代になり宮師職をも手に入れて、由原宮の社務執行の両職(宮司・宮師)を独占することになる。なお、賀来氏が荘園侵略を通じて獲得していった既得権は、この後も大友氏によってほぼ安堵され、賀来氏の経済的基盤として維持されていった。また、由原宮の各種神事・仏事執行のための料田—たとえば、経番田、正御供田、八幡御誕生会神事田など平安時代の免田に系譜する「宮師坊拘分」の免田が文禄年間まで維持されていったことは、賀来荘と由原宮の深い歴史的結び付きを証するにたるものである。

(秦 政博)

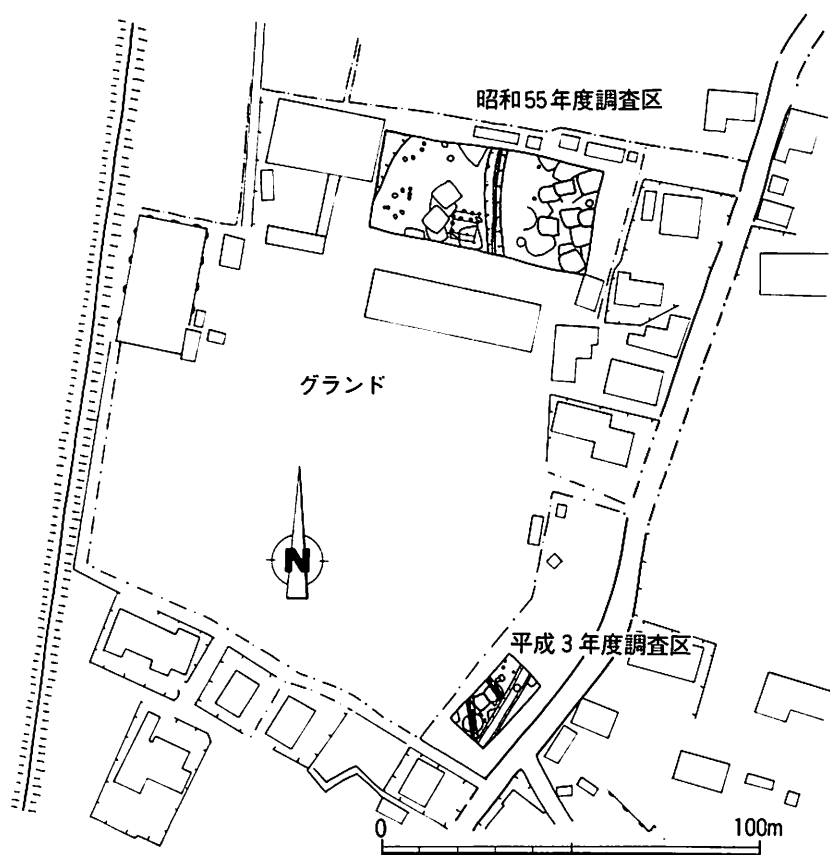
第Ⅶ章 総 括

昭和55年、校舎の建てかえに伴う発掘調査によって弥生時代後期を中心とする環濠を有する集落遺跡の存在が明らかとなった。当時、大分市内では多武尾遺跡等^{（注1）}に代表される台地上の遺跡に環濠様の溝状遺構を具備した集落遺跡の存在は認知されていたが、低地の調査例は皆無であり、賀来中学校遺跡の発見は低地集落の存在を実証するところとなり、後の下郡遺跡調査の契機となる。また、大分市内において検出例の僅少であった埋葬跡^{（注3）}を捕捉できたことは遺跡としての重要性をさらに倍加することになった。以下には1次・2次調査で判明した集落様相所見と今後の周辺調査における課題を提示しまとめとしたい。

弥生時代～古墳時代初頭

平成3年度の調査では、弥生時代後期の所産となる溝状遺構を検出し、遺跡範囲の把握に大きく貢献することになった。1次調査時に検出されている2本の溝状遺構の厳密な時期比定は出土遺物の整理作業の完了をもっておこなうべきところであるが、本書に掲載した遺物ならびに遺存率の高い遺物の様相を

みる限り、2号溝については、庄内式土器～布留式土器の新段階^{（注4）}の諸特徴を具備した甕形土器（9）、小型丸底壺の存在などからその下限は古墳時代の初頭にいたることは确实視されるところである。平成3年度の調査では検出住居の中にこの時期に近接するもの（SH05・06）が存在するものの、当該期の溝状遺構



第66図 賀来中学校遺跡遺構配置模式図（1/2000）

は検出されていない。1次調査の1号溝に関しては、今回図化はおこなっていないものの、出土土器の諸相が今回の調査の1号溝出土土器の諸相に酷似している。周辺地形の現況を考慮した場合、両調査地点の溝状遺構が接続する可能性は高いと思われ、仮にこの想定を支持し、現存する地形的なものを併慮すれば、最大で約3haの環濠内居住域を確保することが可能となる。

次に1次調査時において検出された壺棺墓の時期比定をおこなうことにより埋葬跡と溝ならびに集落との空間的位置関係について考える。検出された壺棺墓の上棺と下棺の組み合わせは壺×壺、鉢×壺の2タイプに限られ、使用される鉢形土器は、いずれも第Ⅲ章での分類のⅡ類相当のものが使用される。また、上棺ならびに下棺に転用される壺形土器は6号墓の下棺に焼成後穿孔を施したⅠb類壺形土器が使用される以外は胴部に2～3条の三角突帯を貼付するⅠa類壺形土器によって占められ、さらに時期比定のメルクマルとした底部形態についてみても壺底部B・C類に限られる。したがってこれらは前章において時期の比定をおこなった1号溝（平成3年度調査）機能期間中に造営されたものと推定され、同時併存の可能性を指摘できよう。分布に関しては、1次調査における各住居跡の帰属時期が明らかにならなければ明示することはできないが、形態の上で古相の要素を有する円形住居跡と埋葬跡との切り合いが認められない点などからある程度の「墓域」形成の可能性もまた指摘することができよう。

また、検出した埋葬跡はすべてその規模から小児用と判断され、当集落跡における成人用の埋葬遺構の探索も今後の課題である。

以上の知見から次のような集落変遷が想定される。弥生時代後期中葉～後葉のある時期に集落形成が開始される。この時点ですでに集落外周には環濠（1号環濠）が造営され環濠内には小児用を中心とする「墓域」が形成される。その後、後葉の新段階に1号環濠は遺棄されることになる。しかし、集落は途絶えることなく永続的に営まれていたと推定され、その後2号環濠^{（後葉）}が造られるが、その所産時期は現段階では不明である。この2号環濠は規模も1号に比して大きく、内側には土塁状の土盛りが築かれていたと考えられる。このように村内防備を強く意識した低地の村も古墳時代初頭には2号環濠の終焉とともにその幕を閉じたのである。

表17 大分市内における溝状遺構を有する集落遺跡一覧

遺 跡 名	標 高	所 在 地	溝形状	溝種類	時 期
1 賀来中学校遺跡	17m	大分市大字賀来字門田	V字溝	環 濠	Ⅲ・Ⅳ～Ⅴ期 （中葉・後葉～古墳時代初頭）
2 下 郡 遺 跡	5m	大 分 市 大 字 下 郡	V字溝	環 濠	Ⅴ期（古墳時代初頭）
3 多 武 尾 遺 跡	40m	大分市大字横尾字下横尾	梯形溝	環濠？	Ⅳ期（終末）
4 北 の 崎 遺 跡	38m	大分市大字葛木字北崎	V字溝	環 濠	Ⅳ期（終末）
5 米 竹 遺 跡	39m	大分市大字小池原字米竹	V字溝	環 濠	Ⅳ期（終末）
6 雄 城 台 遺 跡	67m	大分市大字玉沢字宮ノ口	V字溝	環 濠	Ⅴ期（古墳時代初頭）
7 尼ヶ城遺跡	60m	大 分 市 大 字 永 興	V字溝	条 溝	Ⅴ期（古墳時代初頭）

環濠と思われる溝状遺構を有する集落遺跡は市内各所に認められる。これらは弥生時代後期に限定すればいずれも豊後における弥生後期編年^{註6)}のⅢ期を上限にⅤ期（古墳時代初頭）の時期に営まれる。溝の規模に着目すると、賀来中学校遺跡で看取されたと同様にⅢ期→Ⅴ期の時間的な経過に従い巨大化していく傾向を窺い知ることができ、溝状遺構構築に至る契機の究明と併せて今後解明しなければならない事象といえよう。

中 世

本地域は中世・賀来氏の本貫地として知られ、古来よりその館の推定地とされてきたところである。発掘調査における中世の所産となるものとして、昭和55年の一次調査では掘立柱建物跡・井戸跡を検出し、平成3年度の調査では井戸跡・館に付随する堀様の溝状遺構を確認した。溝状遺構は出土遺物から14世紀後半～15世紀後半の時期のものと推定され、賀来氏の推定出現年代（12世紀前後）とは大きな隔たりが存在するものの、調査地の北方約200mにおいて古い様相を示す中世遺物の出土が確認されており、時間的な経過に伴う当地域内における館の移設・拡大等の想定を行うことにより賀来氏関連の館存在の可能性は否定されるものではない。賀来氏に関しては文献の上においても細部については不明な点が多く、今回の調査において考古資料からのアプローチへの手掛かりの一端を見いだすことができた意義は大きいといえよう。今後の周辺調査の展開が期待される。

註1)「大分市多武尾遺跡 調査概報」 大分市教育委員会 1982

註2)「下郡遺跡群」 大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報 (1) 1990 大分市教育委員会

「下郡遺跡群」 大分市下郡地区土地地区画整理事業に伴う発掘調査概報 (2) 1991 大分市教育委員会

註3)「浜遺跡」大分県文化財調査報告書第48輯 1980 大分県教育委員会

註4) 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館編「三世紀の九州と近畿」 河出書房新書 1986

註5) 平成3年度の調査において、1号溝と切り合い関係を有する住居跡（SH01）が確認されている。この住居跡内には1号溝埋没時に使用されていた土器型式に近似する甕形土器を内包している。これは量的なセリエーションにおける隣接する2時期の土器型式（様式）の古段階の土器型式が新段階に遺存した残存現象と理解され、1号溝が完全に埋没した後にはほとんど当住居跡が構築されたことを示しており、溝埋没後も引き続き集落が営まれたことを示唆している。

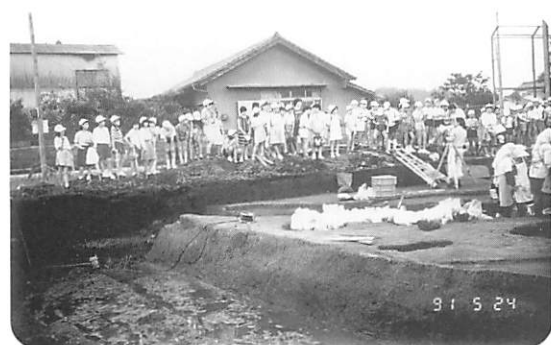
註6) 羽田野（玉永）光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ－安国寺式土器の再検討－」『古文化談叢』第5集 1978 九州古文化研究会

高橋 徹 「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉」『古文化談叢』第6集 1979 九州古文化研究会

玉永光洋・吉田 寛「大分県の弥生土器」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料 1990

註7) 平成3年度大分県教育委員会が県道築造に際し発掘調査を実施。調査担当者 綿貫俊一氏御教示

写真図版





遺構検出状況（北方向から）



1号溝(SD01) 遺物出土状況遠景
(西方向から)



遺構完掘状況（北方向から）



1号溝(SD01) 遺物出土状況近景（南方向から）



1号溝(SD01) 完掘状況（南方向から）



2号溝(SD02)遺物出土状況(137)



2号溝(SD02)近景(南方向から)



2号溝(SD02)全景(南方向から)



2号溝(SD02)調査状況(南方向から)



1号溝(SD01)調査状況(南東方向から)



1号溝(SD01)遺物出土状況
(北方向から)



2号住居跡(SH02)完掘状況(南西方向から)



1号住居跡(SH01)柱穴間土壌
検出状況



6号住居跡(SH06)完掘状況(北西方向から)



同 上 調査状況

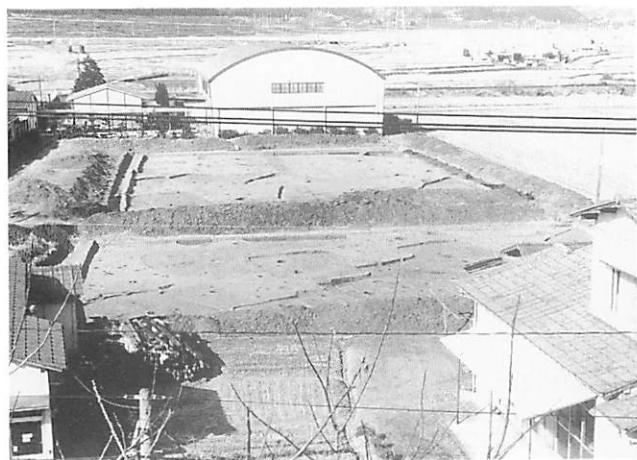


8号住居跡(SH08)完掘状況(北西方向から)



同 上 柱穴間土壌内焼土塊検出状況

図版 4



昭和55年度 調査区全景 (南東方向から)



昭和55年度 1号溝(SD01)近景
(東方向から)



昭和55年度 1号溝(SD01)近景 (南東方向から)



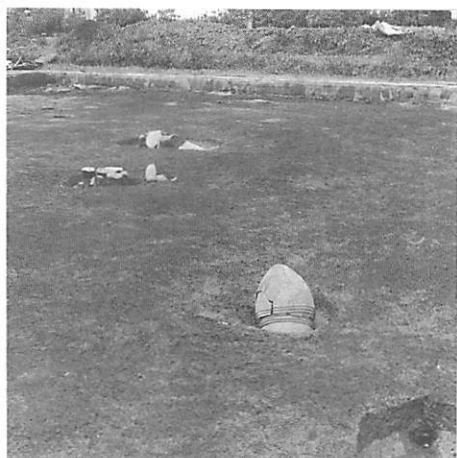
昭和55年度 1号溝(SD01)遺物出土状況 ①



昭和55年度 1号溝(SD01)遺物出土状況 ②



昭和55年度 2号溝 (SD02) 遺物出土状況



昭和55年度 壺棺墓検出状況 (遠景)



昭和55年度 2号溝 (SD02) 遺物出土状況 (近景)



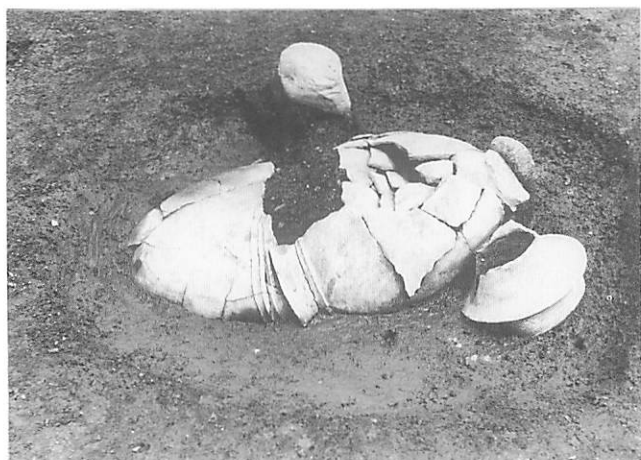
昭和55年度 1号壺棺墓 (K-01)
検出状況 ①



昭和55年度 1号壺棺 (K-01) 内部検出状況



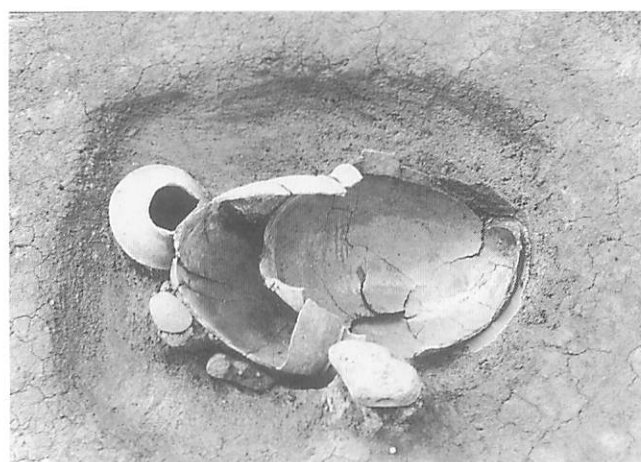
昭和55年度 1号壺棺墓 (K-01)
検出状況 ②



昭和55年度 3号壺棺墓 (K-03) 検出状況



昭和55年度 3号壺棺墓 (K-03)
内部検出状況 ①



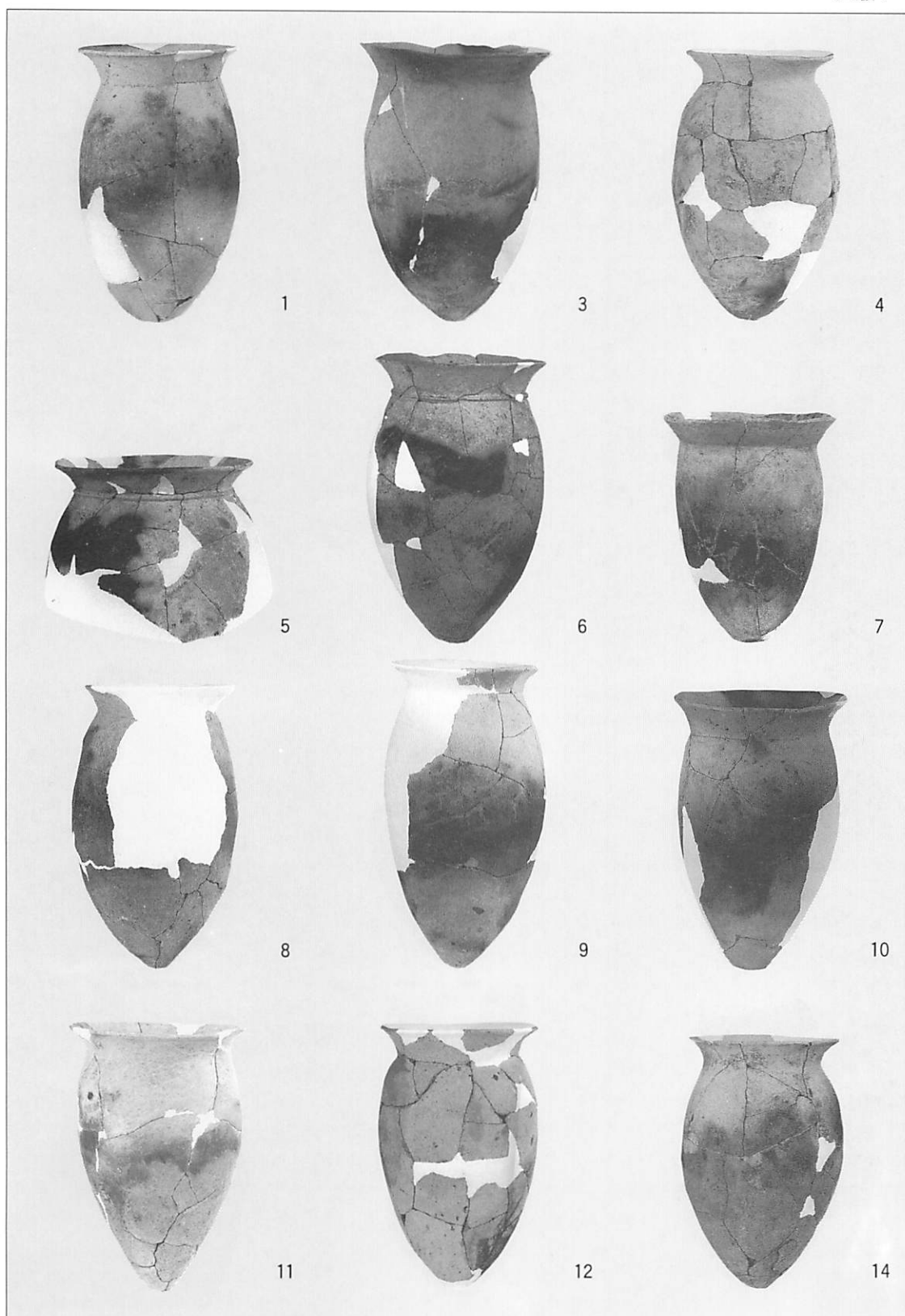
昭和55年度 3号壺棺墓 (K-03) 内部検出状況 ②



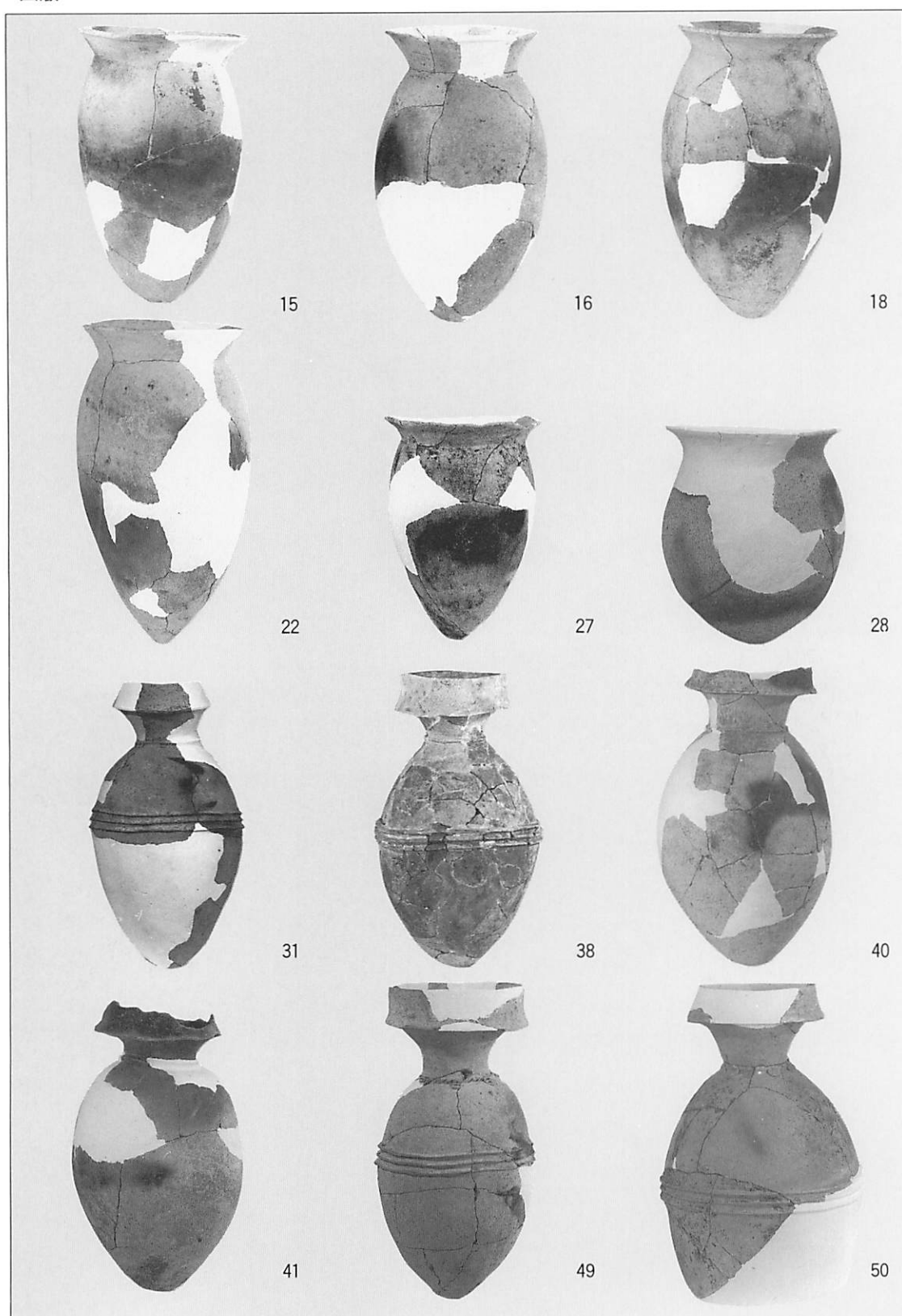
昭和55年度 6号壺棺墓 (K-06) 検出状況 ①



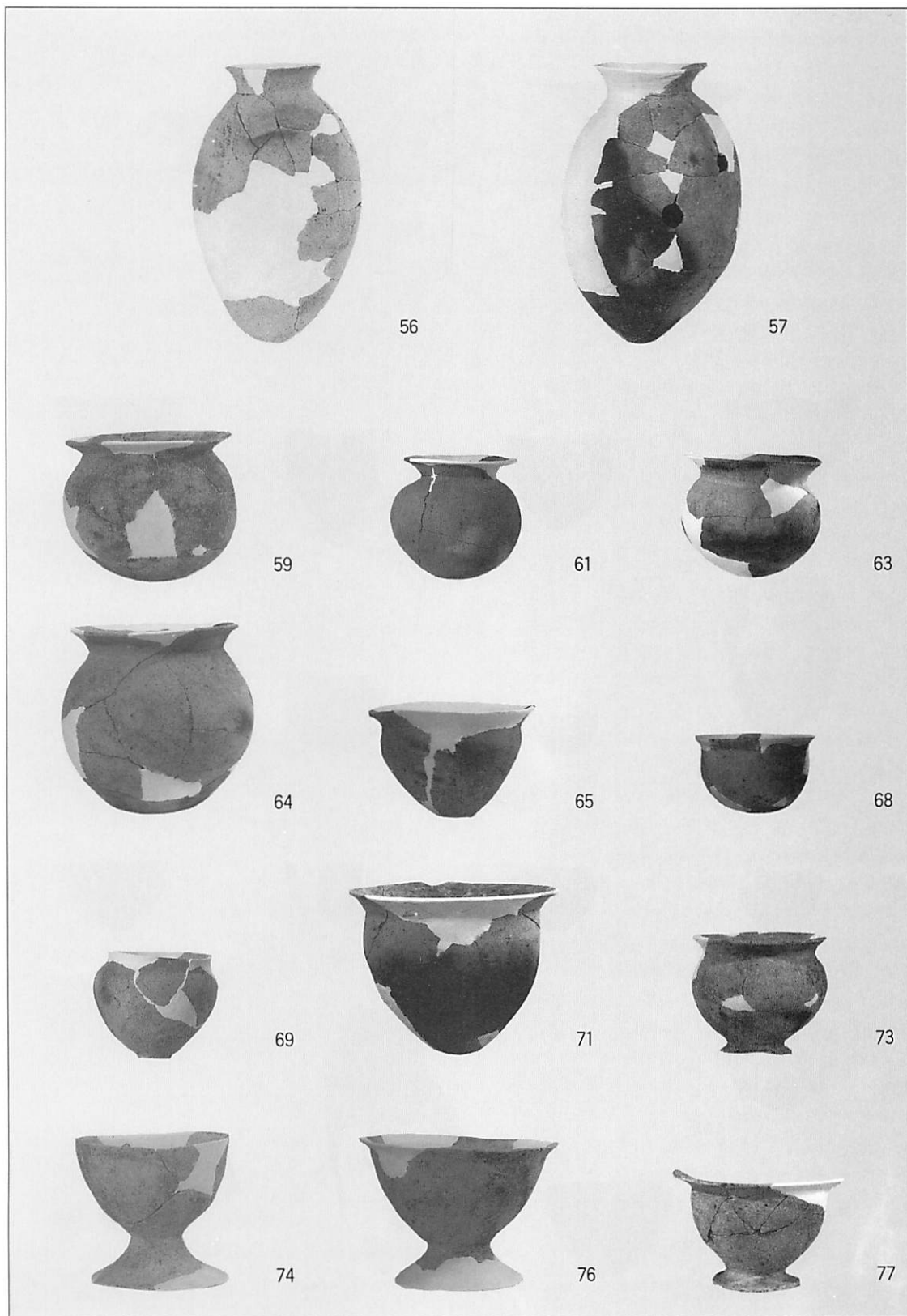
昭和55年度 6号壺棺墓 (K-06)
検出状況 ②



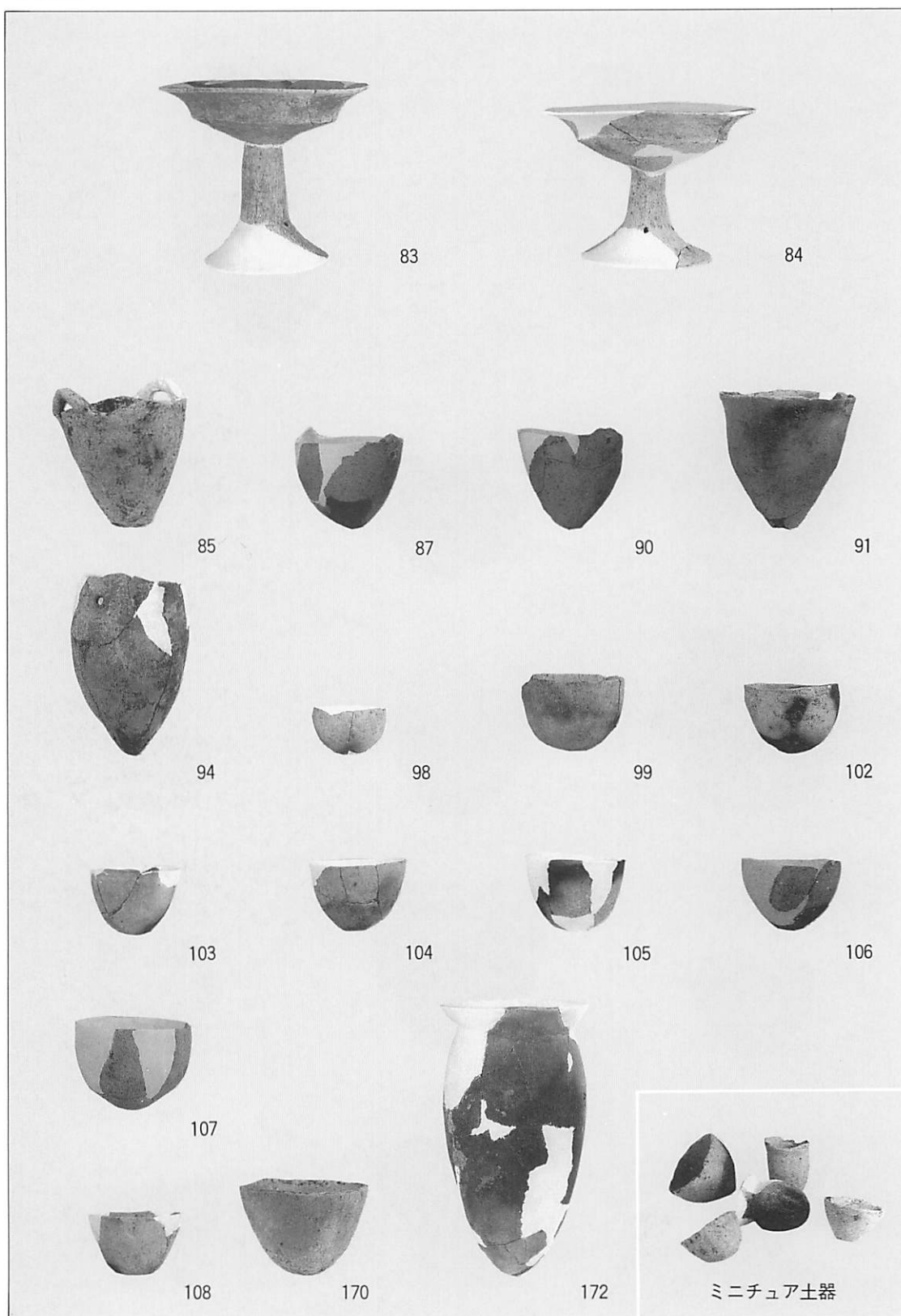
1号溝(SD01)出土遺物 (1)



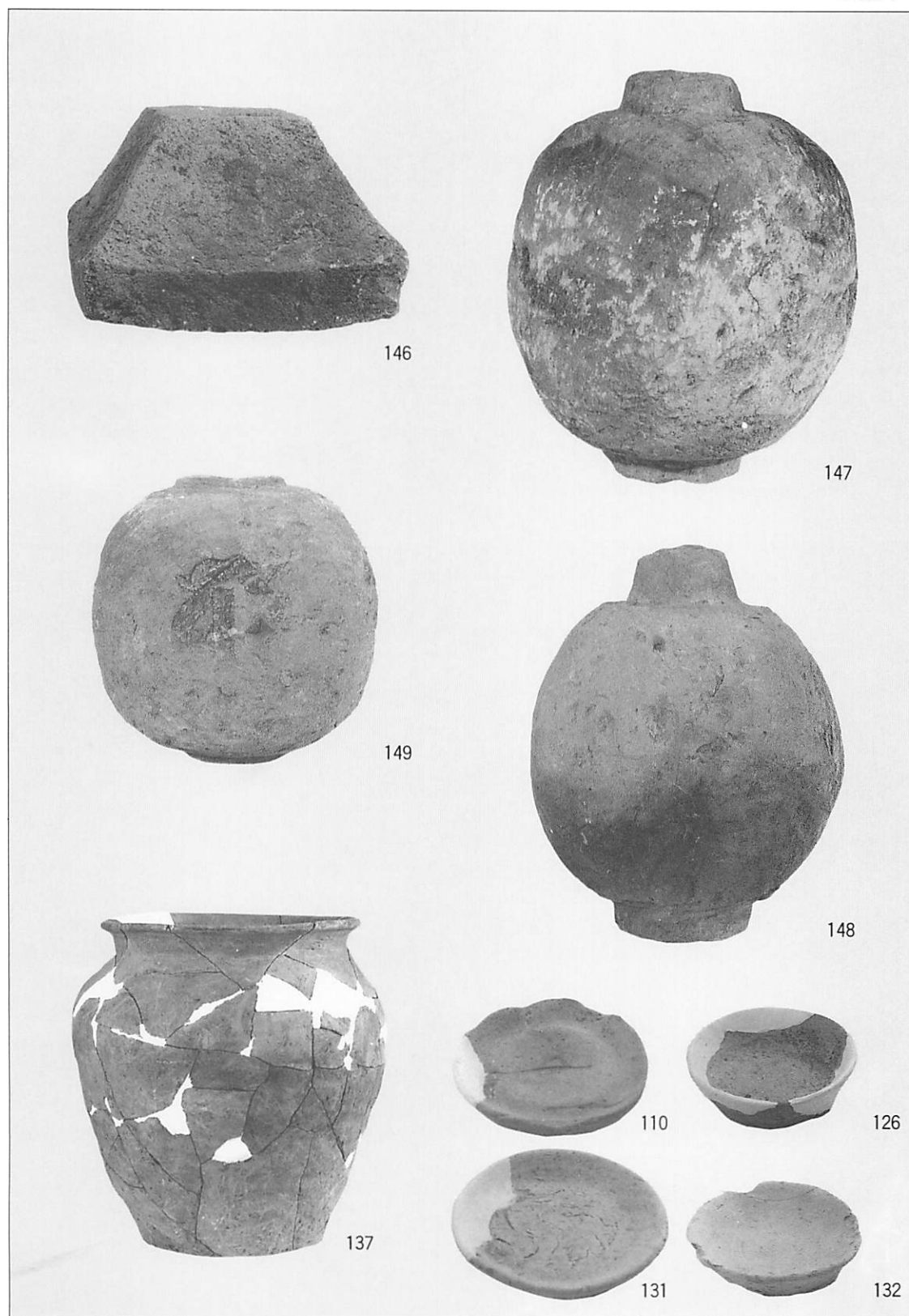
1号溝(SD01)出土遺物(2)



1号溝(SD01)出土遺物(3)



1号溝(SD01)・住居跡(SH)出土遺物



2号沟 (SD02) 出土遺物

大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

賀 来 中 学 校 遺 跡

平成4年3月31日

発 行 大分市教育委員会 大分市荷揚町2番31号

印 刷 株式会社明文堂印刷 大分市長浜町1丁目2番2号
